

現代印度の諸問題

脇山康之助

幸矢書房

普及版

302.25
W33a

2



0000262-000

302.25-W33aウ

現代印度の諸問題

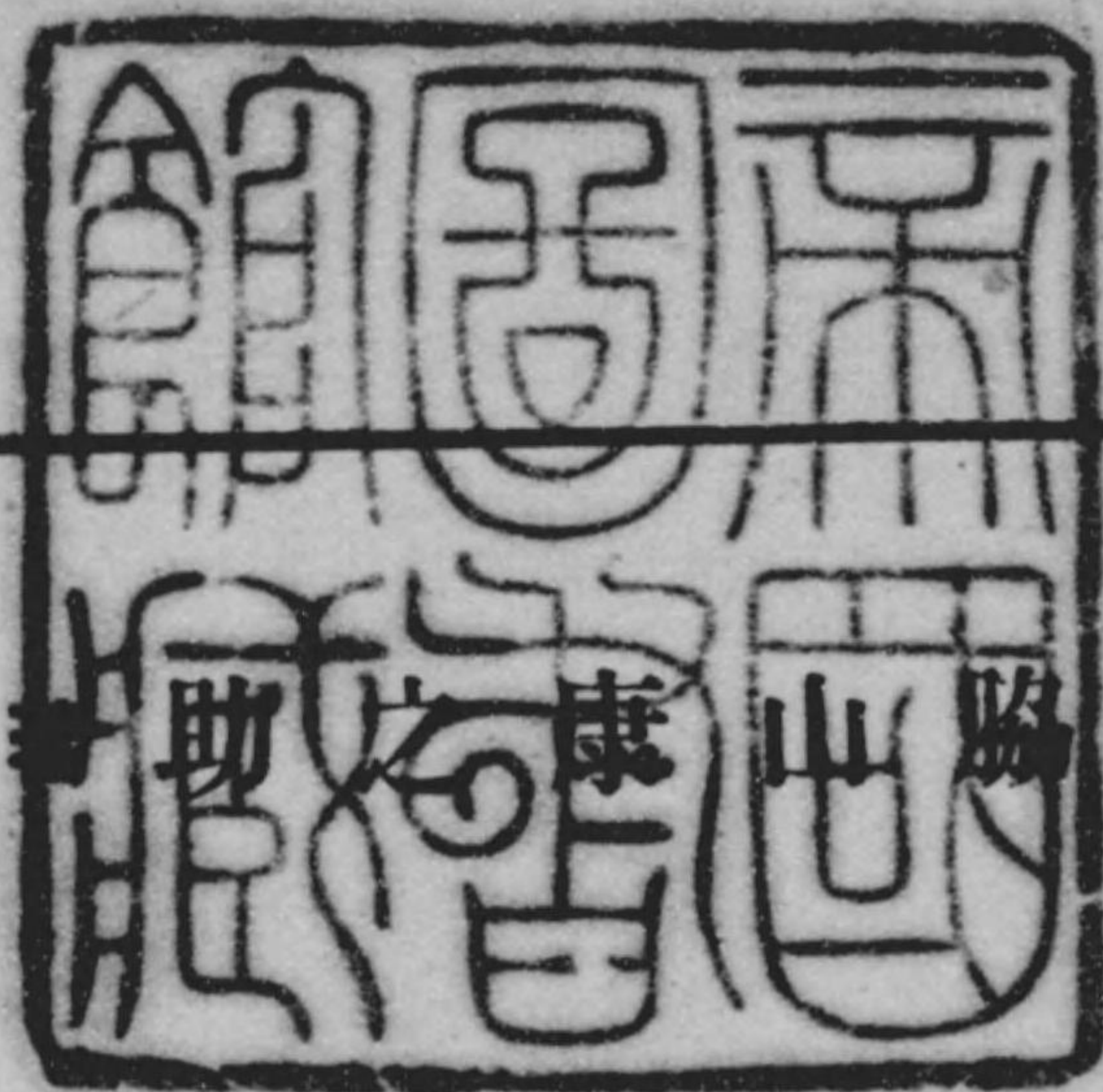
脇山康之助・著

幸矢書房

改訂版
昭和17

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



302.25
W33a

現代印度の諸問題

改訂・普及版
幸矢書房發賣



前
書

印度は歴史的、文化的に見ても、その老大な國土に溢れる人口數——一九四一年度の國勢調査概算では三億八千八百萬八十萬人である——から言つても、正に支那に比肩するアジアの代表國家である。又「物の方面」から言つても、印度は棉と黄麻と紅茶の國であり、その消費量を見れば米、甘蔗糖、植物油種子（落花生、胡麻、亞麻仁等）、マンガン等に於ても世界一の産額を示してゐる。

然し現實に印度を構成する社會に就て言ふと、それは恐ろしく複雑で多岐に亘り、何處にその實體があるか發見に困難する程である。事實印度社會の實體としては、通常宗教社會が擧げられてゐるが、これも仔細に見ると既に宗教社會の本質を失ひ、宗教、種族、職業の三社會に分化して居り、而もそれ等はカースト（種姓）以下の各制度によつて遂に追跡し得ないまでの微細な單位に分裂してゐる。而もその微細な單位はそれぞれ孤立性と獨自性を固持して、その間に何等の聯關もないため、結局印度とは無數に細分した獨立小國家群を雜然と積重ねた集合體、或はアジアの半島部に英帝國の占める政治勢力圏に與へられた地理的名稱に過ぎぬとも極言出来る。

このことは一口に印度と言つても、單なる歴史的墮性の齎らす抽象的な觀念に過ぎなくなつて居り、彼等を共通の民族感情に奮起せしむるに充分でないことを物語つてゐる。事實印度にはガンデー以下の民族獨立運

二
動が熾烈に続けられ、既に六十餘年に亘る古い苦闘の歴史を誇つてゐるのであるが、而もなほ獨立の最終目的を達成し得ない眞の原因も此處にあると言ふことが出来る。従つてこの印度社會の實狀を無視する時のみ、從來の我が國に見る如く「印度は明日にでも獨立する」と云ふ希望的觀測が、横行するのである。

然し異常な速度で進展する大東亞戰爭の戦火は既に印度の國境に及び、今日程眞剣に印度問題が考慮されてゐる時はないのである。又それは「英米勢力の驅逐」、「アジア人のアジア」なる聖戰の意義を持つことによつて、この英國最大の植民地解放こそ、日本に課せられた最終の歴史的使命とも言ふことが出来る。

この觀點から今一度印度を見ると、無數に獨立する印度社會の小單位も今や既にその分化過程を終へて、再び綜合過程に移つてゐることを知るのである。その變化を直接促してゐるのは、印度社會の背後にひそむ經濟關係の變化である。それを換言すると第一次大戰以降上向線を迎へる印度民族産業が、極めて遅い速度ではあつたが兎も角も社會關係の變化を促すに足る力の充實を示して來たことを意味してゐる。かくて生れる印度社會とは、生産關係を規定した從來のカーストとは逆に、今度は生産關係によつて規定される階級關係に基礎を置くものである。事實印度のカースト制度は既に崩壊し、現在ではこの新たな階級關係への再編成過程に移つてゐると言へる。

かくて本書では、眞實印度社會を構成する要素として、(イ)農民、(ロ)勞働者、(ハ)智識階級、(ニ)藩王國

の君主、(ホ)印度在住の英國人——以上の五要素を取上げ、それらに就て民族運動を含む政治、經濟、文化の廣汎に亘る諸問題を取扱つて見た。本書の意圖する所は、これまでの類書と異つて印度社會と言ふ前人未踏の領域に一步踏み込み、複雑な印度の綜合的把握に努めたことである。

然し本書は、正確に言ふと昨年末刊行した「現代印度の諸問題」の改訂版である。

舊著「現代印度の諸問題」は、一九四〇年三月から十月まで大戰下の印度を訪れた著者の小さな記念品であつたが、多數の先輩有識者から全く意外な讃辭を恭うし、刊行月餘にして店頭から姿を消してしまつた。

然しその後の戦局の推移によつて印度問題の重要性が一段と増加したため、再刊の要望に答へて此處に再び公にするものであるが、今回は舊著の内容に取捨選擇を加へ、特に大東亞戰爭と直接關係ある印度問題の一部文を加へた外、舊著に多かつた誤字誤讀の掃に努めた。又特に印度の地名及び人名に就ては、これまでの新聞、類書が餘りにも無關心粗雑であつたのに鑑み、専門的な智識に請ふて定讀に努めた。著者の意を諒とせられ、ば幸甚である。

昭和十七年春

著者

現代印度の諸問題

前書

第一篇 農民

- 一 農村社會の現實と貧困問題……………一
- 二 農村組織の崩壊と農民運動……………一五
- 三 農民運動と國民會議派の立場……………二二
- 四 農村の改良問題……………二七
- 五 農村工業化問題……………三四

第二篇 労働者

- 一 労働社會の現實と住宅問題……………四
- 二 労働條件の封建性……………三二
- 三 工場法の改正と労働運動の變遷……………五九
- 四 大戦下の労働問題……………七五

第三篇 智識階級

- 一 印度の教育問題……………八五
- 二 民族運動の展開……………九七
- 三 ガンデー指導下の國民會議派(その一)……………一〇三
- 四 / (その二)……………一〇九
- 五 / (その三)……………一一〇
- 六 ガンデー批判……………一二八

第四篇 藩王國の君主

- 一 藩王國政治の封建性……………一五二
- 二 英國の對藩王國政策……………一五六
- 三 國民會議派の對藩王國政策……………一六六
- 四 君主體制の本質と英國的影響……………一七〇
- 五 藩王國最近の民族運動……………一七七

第五篇 印度在任の英國人

- 一 統治方針の史的變遷(その一)……………一八一
- 二 (その二)……………一七〇
- 三 印度搾取の諸形態……………一九五
- 四 英國人社會構成要素……………二〇一

附 録

- 大戰下の印度と東方植民地の關係
- 一 東方植民地と英本國の關係……………二二九
- 二 英國東方植民政策に占める石油の意義……………三三一
- 三 今次大戰下に於ける印度の地位……………三三九
- 四 結 論……………三三三
- 大東亞戰爭の推移と印度の戰略的地位……………三三五
- 日印關係の將來……………三六一

第一篇 農 民

一、農村社會の現實と貧困問題



「英領印度の農村政策」中に、次の如く述べてゐる。

「印度政府の最初の、そして最も重要な仕事は、結局その民衆をして最小限度の生存を保たしめて死なぬやうに工夫する事である」と。

廣袤實に百五十七萬五千二百十二平方哩(註一)——北はエヴェレスト、カンチユンジャンガ等海拔二萬呎の障壁聳ゆるヒマラヤ山麓から 南黒潮の洗ふコモリン岬迄——その巨大な三角形をなす印度大陸の三分の一迄(註二)が所謂五千年の古き文化の歴史を持つ印度平原で、春來れば必ず風にそよぐ豊かな五穀の實りガンヂスの兩岸を色彩する。恐くは東洋で最大なこの平原からは世界總産額の九割九分三厘に達する黄麻、四割四分の小麥、一割四分七厘の棉が年々收穫せられ、その收穫に孜孜と勤める農民數も全人口三億八千八百七十萬(一九四一年調査概算)の八割九分と云ふ巨大な數字を示し、その増加率も都會人口の停滞性に對して増加の一路を辿つてゐる。

印度は、その遅れた状態が示す如く、實に農業國である。農業は依然として印度産業の生命線であり、蓄積された印度の富の殆んど全部が土による收入(註三)である。

(註一) 英領印度八六萬二六〇四平方哩、藩王諸國七一萬二五〇八平方哩に二分することが出来る。

(註二) 全耕地は一九三六年の調査で、純耕地二億一三七六萬三二五八エーカー、休耕地四四八三萬五四三三エーカー、合計二億五八五九萬八六九一エーカーで、全面積五億二二一〇萬四九八三エーカーの三分の一に當つてゐる。

(註三) 一九三七—八年度輸出貿易額一八億〇九二四萬ルピーの中一二億一四三六萬ルピーは實に土による生産品であつた。

かくの如く我々が過去に於て榮え、今なほ東洋の巨人としての地歩を占める印度を念頭に置く時、これをその社會の大宗たる農業社會と切放して考へることは不可能であり、その社會とは即ち農村であり、その國民とは即ち農民であると云つても決して過言ではないのである。

然しその農村の現状はどうであらうか。例へばカルカッタ或はボンベイ等の都會から、その農村へ行くとする。すると我々は直ぐその旅程が如何に困難なものであるかを經驗するであらう。何故なら舗装した自動車道路と鐵道の建設をその植民地經營の要諦と考へる英國は、成程印度に於ても延長六萬九千哩と云ふ延長距離に於ては世界第三位の鐵道網を張り巡らしてゐる。然しそれは要するに鐵、石炭、棉等の本國の必要とする物資を輸送し、或は又軍隊輸送の目的で敷設された極めて片寄つたものであり、我々の目的地たる農村の事などは一向お構ひなしであるからである。其處には砂利を敷詰めた簡易舗装路すらない。あるは唯昔ながらの原始的交通路——六月過ぎから十月迄一日も休まず雨の降る雨季には忽ち泥海と化し、十一月から六月迄の乾季には蒙々たる埃と塵に埋まる所の——のみで、印度の都會に通常見かける一頭立の馬車も其處へは敬遠して行かないので、結局汚い牛車が唯一の交通機關となつてゐる。而もその牛車のガタ／＼揺れて走る沿道には、立木一本ないのが普通で、カッと照り返す岩山や水の一滴もない

河、次ぎ次ぎ眼に映る姿と云へば、灼熱地獄の底から浮び上つて來るかと思はれる荒涼たる沙漠のみで、印度の旅行に慣れない我々には、恐らく一哩と行かない中に窒息しさうになるのである。

然しその沿道の苦しさも、我々がイザ目的地に着いてそこに見る餘りにも悲惨な農村の姿の前には、一瞬にしてケシ飛んでしまふであらう。我々の前には、たゞ荒壁造りの牛か豚でも住みそうな小さな小屋の一群——それでもベンガル州だと流石木の柱と藁或は鐵板の屋根を持つた——が横つてゐるだけで、雨と風に甚く荒れた壁の隙間から覗く時、そこに吊床をあちこちへ動かす農民の姿を發見し、始めて人間の住家かと氣附く程である。荒壁に白く白灰で土塗りするとは、印度農民にとつて到底その費用の支出に耐え得ない贅澤であり、家の周圍には黒く固つた牛糞の壁が風除けの役目を果してゐるのが通常である。家の中には家具らしい家具のないのが特徴で、精々あるのはチャルボイ (charpoy) と呼ばれる繩をよつて造つた吊床位である。然しこの吊床も通常は家長の獨占物で、家族の者は一段高く土を盛り上げた場所で食つたり、飲んだり、眠つたりするので、この場所は言はゞ印度の農家の俱樂部とも云へるであらう。然しこの俱樂部の夜を飾る光と云へば、僅かに芥やニーム (註一) 製の油が細氣に燃える泥製のランプ一つがあるだけで、電燈とか石油ランプと云つた近代的設備のないのが通常である。然しこの泥製のランプでも燃さうものなら大變である。何故なら印度の農家には換氣孔の役割を果す窓とか煙突とか云ふ物は一切ないので——これは氣候の關係もあつて、印度の最も富裕な農村に於てすら稀れである——忽ちの中に部屋中が蒙々たる黒煙に包まれ、十分と家の中に留つてゐることが出来ないからである。従つて火と云へば、僅かに臺所の片隅にある小さな窯に燃えてゐるだけである。

(註一) マーゴサとも云ふ西印度特産の樹で、これより樹脂及強壯劑をとる。

この室内の息苦しさに耐え得なくなつて思はず外へ飛出すとしても、そこには矢張りゾツとするやうな光景が待受けてゐるだけである。牛糞の壁のことは前にも述べたが、この外にも家の前に通ずる小路は農家の臺所から吐出される溝水の下水孔になつてゐるため、ありと凡ゆる種類の汚物がそこに集積して鼻持ちならぬ悪臭を放つてゐる。又その横には肥料壺や池があつて蚊と蠅の養成場となり、その池は時には下肥の貯水場としてその中を豚が泳いでゐることもある。殊に非衛生的なのは牛がその池の水を飲み、一家の主婦が洗濯をし、それがヒンズー教徒の農家であれば一日一回は必ず一家の者が揃つて裸になつて行水することである。同じやうに遅れた状態にあるとは云へ、この印度の農家と比較すれば、どれだけ支那の農民の方が幸福であるかも知れない。

又印度農産物の收穫高は世界的であるが、その耕作法は極めて原始的で、三億一千万の農民に對して僅かに千七百萬の犁と二千五百萬の草刈鎌、それに一萬二千の鐵製碾臼と五百萬の車しかないと云ふ事實が示すやうに極めて貧弱である。通常農民の所有する全財産と云へば使用する鐘銅(錫と銅の合金)、その他の安價な金屬製裝身具、陶器乃至は眞鍮製の若干の器具、小さな粉碾き、一二匹の仔牛、それに尖端に僅か鐵をつけた木製の犁か、バクハール(bakhar)と呼ぶ原始的な廣刃の犁位である。

その食事も魚を常食とするベンゴール地方を除けば、一般に小麥や稷を焦がして造る鹽味の粥だけが常食で、極めて單調な生活を送つてゐる。農民が自己の生産した野菜を食べるのはお祭の時だけで、砂糖など到底彼等の収入からは支出し得ない贅澤品である。

又農民の大部分は集約的農業なので、乳牛を飼ふ者があつてもその乳から造るバター、チーズ等の酪產品は結局彼等の主人である英國人達に献上しなければならぬので、結局最後に残るは絞り滓の乳だけである。そしてこの粥や乳さへ飲めない飢饉時には、小麥製のチャパティ(chappaty)と呼ぶ印度獨特のパンの皮だけを食べて、數ヶ月壽命をつなぐのである。

マハトマ・ガンデーの着る着物は通常値段の安い毛織木綿であるが、それさへ買へぬ農民は裸で歩くことを許された過去の苦行者ブハガをしきりに懐しがつてゐる。どんな寒空とは云へ彼等には殆んど着る物となし、毛布や掛布團等の寒さを凌ぐ物も一軒に一枚以上あるとは限つてゐないのである。

又印度の冬は第三者の想像する以上に寒く、或る地方では依然毛皮や冬のオーバーが必要であるが、かうした時着るもののない印度の農民は止むなく山と積んだ牛の糞を燃やしなが、夜中の寒さにふるへて起きてゐるのである。時折、着物を持つてゐるとしてもその物はボロ／＼になつて居り、萬一病氣で倒れるやうなことがあつても、それを看護する醫者が僻地の農村にゐるやう筈がない。又彼等が全財産を抛つて町の病院へ行くやうな事があつても、彼等の世話を焼くやうな人間のゐるやう筈もない。かうした無智な農民は例へ醫者から處方箋を貰つてもどうして好いか判らず、結局町の病院の待合室で途法に暮れてゐる姿は印度の到る所で見ることが出来る。

かくの如く農村に於ては粗食、貧困、無智が支配してゐて、その上村の衛生設備や健康状態に關して科學的忠告を與へる人間を配置することは英國側で忘れてゐるので、結局農民は頑強な體軀を持ちながら蠅のやうに死んで行く。農民の子供達も年の割に小さく、眼は落窪み、腹は突出し、嬰兒の死亡率は支那やイランよりも高い。王室農業委員

會 (R. A. C.) に於て、印度の農民が凶作や傳染病よりも寧ろ營養不良が原因となつて死ぬ者の方が遙かに多いと述べた者もゐる程である。

印度人の平均壽命は、英國の男四六・〇四才、女五〇・〇二才に對し男二二・五九才、女二三・三一才と云ふその半ばにも満たない壽命である。勿論、農村娛樂などのあらう筈はない。全國に二萬二千しかない郵便局も彼等の村からは程遠い。全國に六萬四千八百校しかない小學校も、今後教員が五十萬人増えなければ到底一村一校の割合にはならないので、彼等の村から云へば一體何處にあるかも知らない程である。人間に斷ち切ることの出来ない生存の本能がなかつたら、恐らく印度の農民は生よりも寧ろ死を選んだであらう。従つて彼等は唯息をしてゐると云ふに過ぎないのが、その現状とも云へるであらう。然しその垢じみた營養不良の農民の中にも、歐羅巴人も到底及ばない程立派な顔をした種族もゐる事や、汚い小舎を實に巧みに明るい原色で飾り、優れた頭腦の閃きをみせてゐるのを見ると、思はず感動させられる。

かうした種族は南印度に多い。それといふのも印度の農民にとつて藝術は決して外國の遺産でないからであり、五千年來の昔から彼等自身の民謡及舞踊と云ふ優れた藝術を持つからに外ならない。然し通常の農民は耕作の可能な雨季には宛も馬の如く朝から夜半まで働き續けるものゝ、耕作の不可能な乾季ともなればさうした藝術的意欲も何處へやら、徒に腹を減らしてボンヤリしてゐるより外はないのであつて、その擧句の果は彼等の努力の唯一の收穫である實つた稻を誇らしげに眺めて僅かに慰めるだけである。然しそれも長くは續かない。何故なら實つた稻を見ると早速地主がやつて来て彼等に地代を喧しく督促し始め、又別の債權者がやつて来て、法律の名に於てその稻を差押へるか

らである。

かくて農民の唯一の汗の結晶である稻が、彼等の家へ運ばれないやうな事件も屢々起きる。かうした場合でも農民は生きんがために借金迄して翌年の收穫に必要な種を手に入れる。そして不當な地代を拂つて又新たな土地を借入れ、來る雨季を迎へてこれも借物の牛と農具で再び耕作を開始しなければならぬ。然し今一度稻が實つても、結局増へた借金や地代のために、再びそれを失ふだけの話である。一年又一年、農民は宛かも籠の中の鳥の如く、互ひに害を蓄積し合ふ環境の中にあつて徒にその不運を激化するのみである。

かくの如く穀物の生産者である印度の農民が、充分食ふ物も碌にないと云ふ状態は、丁度印度の棉の栽培者が年額四億四千四百四十萬ルピーと云ふ巨額に上る棉を生産し、その中國内の紡績工場へ供給する量を除いても二十四億四千二百六十萬ルピーと云ふ莫大な量を日本へ、六千十萬ルピーを英本國へ供給しながら、自らは着る物も充分でなくて慄えてゐると云ふ現状と同様の理由を持つもので、印度が植民地印度である限りは到底避け得ない所の運命であらう。従つて王室農業委員でも、この農民の貧困に就ては次の如く述べてゐる。

「我々の中何人と雖も、その民衆が借財の中に生れ、借財の中に生き、借財の中に死に、そしてその重荷を次の後繼者に譲るが如き制度を繼續せしめんと欲する如き者はないであらうと信ずる」と。

かゝる状況の繼續する下にあつて、人間の素質の低下することには何等の不思議もない。印度特有の宗教的な傳統のみが、農民達をして僅かにその生存に耐へしめ、その悲惨な運命を甘受せしめてゐるのである。然し本質的には不平滿々たる農民が英國支配と云ふ舊秩序に對し、やがて厥起して時計爆彈の如く爆發する日の來るであらうことは容

易に豫想し得る所である。

(註) 一八二八年立法議會議員プールセル氏は次の如く述べてゐる。
「印度の當面する困難は、胃袋の困難である……一家の収入に於て一日一ペニイ増加するだけで、非常な改良を意味するこ
ととなるであらう」

又印度に自治を許すべき可能性を調査すべく一九二八年に印度へ派遣されたサイモン委員会は、一九二二年度に於ける一
人宛の印度に於ける収入は、英國の九五磅に對し、八磅相當額以下であつたと述べてゐる。然し現在は當時より遙かに悪い
状態となつてゐる。

一九三一年の或る政府調査委員会は、一人宛一年の平均収入が僅かに三磅を超へる程度であると述べてゐる。事實人間が
一日二片、即ち十三錢以下ではどうしても生存して行くことが不可能である。

印度の農民が自分の力で條件を改善し得るかの如き印象を興へる一連の著書もあるが、それ等聯合州、ビハール州その他
に見られる農業企業者、高利貸、金のかゝる水路計畫等の經濟條件の下に於ては、その眞實性を疑はざるを得ないであら
う。

又夥しい回数に上る凶作と飢饉、その度に餓死すると報告される農民の夢のやうな數字、事實これ等も何れの印度
問題の場合にもぶつかる英國の政治的支配と言ふ障害の解決がない限り、それ自身の解決もない事は明かである。然
しこれを唯一の理由とされる事を恐れる英國側としては、この外にも色々の理由を擧げる努力が懸命に試みられて
る。従つてこの貧困問題の場合にも、一應農民の無智を取上げて彼等自身の責任をも一應考へて見やう。

事實一家當て三十五エーカー以上を必要とする土地が、印度に於ては一人當り〇・八九、一家當り四・四エーカ
ーと云ふ小さな數字に零細分割された上、犁と水牛だけの、雨が降れば耕すと云つた原始的方法で耕作されてゐるの

である。その灌溉面積も全耕地の五分の一に當る五千八百八十六萬エーカーに及んでゐるが、その大部分は三米乃至十
米の井戸から水車で悠暢に水を汲上げる式のものである。又農民の頭腦も極めて非科學的であり、傳統的な社會的惡
習慣がそれに拍車をかけてゐる。然しこれ等の點もそのまゝ鵜呑みにすることは危険で、一應検討して見る必要があ
る。

確かに印度の耕地一エーカーからの收穫高が、他の諸國に比して劣ることは事實である(註二)。然しこれに就て
は印度の耕地が紀元前三千年(註二)と云ふ我々の知らない大古から生産を續けてゐると云ふ事實を記憶しなければ
ならないであらう。事實バンジャラ州の新に開拓された耕地は、聯合州の古い耕地よりも遅れた耕作法を採るにも拘
らず、一エーカー宛の收穫は多いのである。そしてこのことはニュージーランドやアメリカの耕地が、印度のそれより
も遙かに高度の收穫高を産んでゐる理由が、何れも印度より遙かに新しい耕地であると云ふことによつて説明出来る
のである。事實或る意味では自然農業を續ける印度の耕地が今なほ現在の收穫高を持つと云ふこと自體が一つの驚異
であり、その小麦と米の一エーカー宛收穫高がメキシコのそれに優り、優に他の諸國と匹敵すると云ふことは奇蹟に
近いとも云へるのである。

(註一) 事實、一エーカー宛の生産額は年々減少し、日本との比較に於て次の如き數字を示してゐる(單位ポンド)

小麦	日	一三一八	米	日	三三三三	棉	日	三四七	茶	日	六四〇
	印	六七七		印	一三三六		印	八九		印	五一八

(註二) 紀元前二千年乃至千五百年前に、自らをアーリヤ(高貴)と呼ぶグベッタ族と推定される種族が、印度バンジャラ

地方で農耕を行った事實がある。

更に土地に加はる壓迫の加重は、耕作者をしてより生産能力の劣る土地に直面せしめることとなり、このことが印度耕地の平均收穫高を減少せしめる最大の原因であると共に、その老大な内陸を擁する事によつても印度に不可欠な灌漑も英國側の宣傳ではアメリカの二倍に及び、マイソールのアーヴィンとメツツールの灌漑が完成すれば百萬エーカーの耕地三つが出現すると云ふものゝ、その大半は依然舊式な井戸か池である事が指摘される。又その露す耕作面積も全耕地の僅か一六%にしか過ぎないので、彼等には如何に收穫高を増加しやうと思つても——彼等の貧困に基き印度の耕地に必要な有機肥料の購入の不可能な場合を除いて——全く手の下しやうがないのである。

然し更に重要なことは、例へその收穫が増加しても印度の現在の經濟條件の下に於ては、決して農民の生活を好くしないと云ふ事である。勿論近代的な資本主義國家に於ては、必要以上に農業を増やすことのため、資本及人間を制くことを利益と考へないでこれを制限してゐる。事實これ等の國に於ては過剰生産の穀物を焼き捨て、農業生産の人為的制限（例へば英國の市場操作局とか、馬鈴薯の規格及重量の制限等）さへ行はれてゐる。印度に於ても、これと同様の手段を採るべき必要が一九三二年に起き、聯各州に於ける砂糖黍の大豊作は原糖價格を一マウンド四ルピー（邦貨約五圓二十錢）から一舉一落一〇アンナ（邦貨約一圓三十錢）と云ふ未曾有の暴落に突落し、政府は止むなく外糖の輸入防遏に努めなければならなかつた程で、此處にも資本主義經濟の多くの矛盾に縛られた印度人農民の姿を我々は發見するのである。

又印度古來の原始的な耕作方法も、一般の印度研究者が指摘する程非合理的でないことが擧げ得るであらう。事實、王室農業委員會も幾度か繰返して、「印度一般の耕作者がその下で労働に従事する所の方法には、農業専門家も改良を提議することが決して容易でないことを知つてゐる」と迄極言し、印度の農民に信頼を置いてゐるのである。又その耕作法の優秀性については、オリッサ州の「巧みな耕作法」や、「世界の何處にも負けぬ」ゲジェラティ農民や、「優秀」と折紙付の「過激な労働を些かもいとほぬ、辛棒強いデカン地方の耕作者」など、同委員會の報告書から幾多の實例を引證することが出来るのであつて、長い木の柄のついた至極原始的な印度の鋤にも、特殊な理由があつて賞讃が與へられてゐる。従つて我々としても、印度の農業方法も歴史的には成程古いが、決して印度の土地の特殊性を無視する程非效果的なものでなく、又第三者の想像する程非科學的なものでもないと云ふことを結論として擧げ得るであらう。如何なる場合に於ても、印度農業の改良の缺如は決して農民貧困の原因をなすものではなく、寧ろその結果なのである。

又この貧困の重要原因である零細土地の併合も、結局巨額の費用を要して少く共印度の現状には採算が採れないと専門家達に云はれてゐる。然し土地の細分化が今後の農業發展上一大障害である事は事實にせよ、土地の併合が、直ちに農民の救済になるとは云へない事も指摘される。印度の土地の酷使は、更にその零細耕地の分割が行はれないと云ふ何等の保證もない程苛酷である。従つて現在の印度の相續法が改正されない限り、それを到底防止出来ないことは事實である。ビルマに於ても長男が親の財産を相續する時には、他の兄弟達にも一定額の現金を支拂はなければならぬと云ふ相續法が、大衆の貧困に拍車をかけてゐる事實が發見せられて論議的となつてゐる。土地の併合は地主制度によつても妨害せられ、時として土質の均一でないと云ふ事實によつても更に事情を困難にせられてゐる。パン

ジャブ州に於て土壤の比較的質なこと、借地形態の單一性によつて比較的土壌の併合が容易であつたことは、王室農業委員会も認めてゐる。

これ等に加へて更に印度の農民を、飢餓線上に追詰めてゐる今一つの原因がある。人口問題がそれである。一八九一年から一九〇一年の間、英國の人口増加率は一二・一七%であつたが、印度に於ては僅かに二・四%であつた、又英本國に於ける一九一一年から一九二一年に至る間の増加率は一四%であつたが、印度に於ける一九〇一年から一九二一年に至る十年間の増加率は僅かに七%であつた。これ等の事實は前後十年で現在人口の二倍となると見られた印度人口の増加率を裏切るものであり、今世紀に入つてはこの増加率の低減が、印度に於て常に論議的になつてゐるのであるが、皮肉な事にはかくの如く人口増加率の少い印度の方が、英本國よりも一層貧困となつたと云ふ事實である。

而も印度は食料品が自國の消費に有り餘つて海外へ輸出してゐるのであり、英本國は自國で消費する食料品すら常に輸入に待たなければならなかつたと云ふ事實も、これに追加すべきであらう。

又印度の人口密度は、歐羅巴の平均密度四六・一の約二倍に當る八七・九人で——勿論これは全國の平均數でベンガル州に於ては日本の平均密度を凌駕する二百三十七人であり、場所によつては五百人を突破する所もある代りにタール沙漠に位置するラジプタナ地方となると平均五乃至六人である——A・O・レイの人口密度表によると、世界で第七位を占めてゐる。然し自國の現在有する人口より遙かに多い國民を扶養して行く事の不可能な國が世界にないと同様に、印度も又過去に於て國民を扶養することに極めて餘裕を持つてゐたのであるが、それが英國支配に移つてか

らは、飢え死せんがためにその子供達が生れてゐると云ふ事實は非慘である。又出産數は決して貧困の原因にならないのであるから、若し他に原因がないとすれば、これ等子供が成長して幸福になつて不可ない理由はない。そのためには今少し高い教育と生活程度さへあれば、恐らくは産兒制限論が生存權の主張として權威を持つてであらう。印度の著述家は事實印度の過去に於て妊娠調節や出産兒制限の傳統のあつたことを指摘してゐるが、此等の傳統も現在は既に姿を消して彼等の貧困を倍加してゐるのである。

又氣候其他の自然條件に就ては、如何に自然農業に忠實な印度人農民達とは言へ、無條件に「雨」と言ふ天の恩恵のみに頼つてゐる譯ではない。印度には古くから井戸或は小規模な運河と言つた人工的な灌漑のあつたことが知られてゐる。然し印度の平均降雨量は三十七センチで量としてはそれで耕作に充分であるが、印度の灌漑に關する一報告書は此等の雨水もその三割五分以上が海へ流れて了ふので、結極水に不足すると述べてゐる。又全耕地の八割四分以上が依然として人工的灌漑の恩恵を受けず、或る地方に於ては數十年昔の「タンク」が、荒廢したまゝ、農民の貧困に基いて修理も加へられず、その儘拋棄されてゐる所もある。セイロン島は嚴格に言つて印度ではないが、その乾燥した沙漠地方には誰しも一驚を喫するであらうが、其地方も嘗つては同島切つての肥沃な土地として聞こえ、その地の灌漑計畫に於て植林のみが強調せられ、井戸或は水槽の事が全く忘却せられた爲、結局自然水が其の表面を濕すのみで海へ逃げて了ひ、遂に今日の沙漠状態を現出したのであると言はれてゐる。

又遅れた國の通有性として傳統を尊ぶ印度人農民の浪費が常に問題となり、彼等が一年の收穫を全部注ぎ込むと言はれる結婚式や、メラスと呼ぶ宗教的儀式などが非難せられるがそれに費やす金は決して第三者の想像する程多額で

もないし、農民の生活の激しい労働と、不足する慰安のことを考へれば寛恕すべき問題とも言ふべきであらう。これ等の事は言はゞ彼等にとつて沙漠のオアシスであり、彼等として人間である以上時折の生活の苛酷から逃避する事が必要であり、同時にこれ等に許された社會的習慣も、倉廩満ちて家畜又豊富な、言はゞより遙かに幸福な時代からの遺産である事も忘れてはならないのである。而も農民達は現在の悲惨な生活に直面しても、依然保守的であるため、過去の古い習慣を捨てる事が困難であるし、何かそれに代るべき物を彼等に與へ得ない限り、その習慣の破棄を要求する事も不可能であらう。一九三一年の銀行調査委員會もこの農民の浪費問題を取上げ「社會的、宗教的習慣も彼等の負債總額の上から見れば全く問題とならない」とその状況が如何に誇張されてゐるかを述べてゐる。

又高利貸が農村生活の平和攪亂者としてその跳梁は極度に恨まれ、彼等の役割が決して愉快なものでないことは否定出来ない。然し印度には現在十八の銀行よりなく、その金融機構の中心も外國銀行の手に握られてゐる現状の下に於ては、家に犁と耕牛しか持たぬ農民には安い利率でクレジットを得る事など全く夢でしかない。事實聯合州に於ては協同組合ですら極く最近迄一割五分の利子を徴収してゐた程である。またその牛車は既に借金の抵當となりその土地も既に收穫を見越して借金の低當となつてゐて、收穫後支拂ふと云ふこの條件の下で、金を貸すのは農村高利貸のみである。その上抵當として差出す家すら持たぬ小作人は、一體何によつて金を借りたら好いのか。翌年の收穫だけが唯一の形ある抵當物である。これを承知で金を貸すのは銀行でもなく信用組合でもなく獨り高利貸(註一)のみである。通常彼等はフンディ(約手)ブローカーを通し、銀行割引率より二分の一乃至一步高の廉價も承諾して呉れる。利子の高率は、農民の貧困によるものである。従つて社會正義觀の上から高利貸は許す事が出来ないにせよ、現

在の資本主義的全機構を變革せぬ限り、彼等の絶滅は絶対に不可能である。國民會議派選出の州内閣が現實に政權を握つてゐた當時は、立法議會を通じて高利貸統制の法案成立を圖つたが、結局それも農民の生活が現在の如く長い一つの投機生活である限り、何時かは負債を背負ふ事は避け得ないことが明かとなつた。勿論英國側でも、農業施設の部門に、百三十萬ルピー(邦貨約百七十萬圓)の補助金を支出し、凶作には返済期間二年乃至三年、利子率は七分五厘の條件で金を貸した事もあつたが、これでは高利貸の利子と隔ることも遠くなく、取立ては却つて彼等より苛酷であつた。農民が貧しくなければない程、借金も少なくて済む道理は説明する迄もないであらう。

(註一) この高利貸の種類は極めて多く東印度のベニヤ、南印度及ビルマのチツテ、西北印度のマハジャン、中央印度のベニヤ、中央及び西印度のシユロツフ、西印度のショーカー等がそれで、この中シユロツフ乃至はベニヤが最も多く、このシユロツフにはマルワリー或はシャプルを本據とするマルタニー族が多い。

二、農村組織の崩壊と農民運動

然し印度の農民生活に於てこの苛酷な貧困だけが、何時も彼等に定められた運命とは決つてゐなかつた。事實、ヒンズーの諺にも「凡ゆる職業の中で、農業が最も好い職業である」と言ふ古言があり、農業に従事するのも從來ヒンズー社會で第三位を占めるヴェシヤ(Vaisya)階級であつた。古代の農村は孤立こそしてゐなかつたが、必要とする一切の物を現實に生産して自給自足を本位としてゐた。凡ての農村は「協同體」の形をとり、土地の私有は無かつたと言はれてゐるが、この私有地の有無問題は現在なほ激論的となつてゐる。然し最近の専門家の意見は、土地の

私有が行はれることは行はれたが、それは高度に集権化された國家の嚴重な支配下に置れてゐたと言ふ事に一致を見
てゐる。然し時を経るに従ひ、土地は實際に分配されるやうになり、共有地の一部は共同牧場に宛てられて、乳牛の
飼育に使用せられた。太古は自然の恩恵が餘りに豊富であつたため、土地も或る場合には三年に一度しか耕されない
で済んだと言はれてゐる。然し當時は例へん凶作が起きても容易に穀物を他の村から得る事は出来なかつたので、各村
落毎に穀物倉庫の準備のあつた事は事實である。穀物の一部は村落の支配者に與られた。寺院や村當局の官吏に與ら
れる土地は、無税乃至は彼等の私有地であつた。農村の必要とする穀物以外の物資は、その製造を親代々の職業とす
る地方職人の手によつて供給されるだけであつた。かくて今日なほ、製革業（Leather）といふ職業のために輕蔑されてゐるその
名残りの地方職人も、最近海外から大量に輸入される安價な靴との競争に直面して、安閑として居れなくなつてゐ
る。

印度に於ては現在なほ封建社會の崩壊過程が進行中である事を見る事が出来る。農村の工業製品も十八世紀以降は
商品として自給自足の域を脱し、地方市場へ小量宛持出されるやうになつた。元來村の行政機構を構成するのは村長
に相當するパティル（Patil）、警官の役割を勤めるチョーキダール（Chovikdar）、會計を勤めるパットワリ（Patwardi）等
の一群の人間であつた。又各部落には村會に相當するパンチャエツト（Panchayat）といふ機關があつて、パティル以下
はこのパンチャエツトの支配を受け、職務の遂行上不満の點はこのパンチャエツトによつて黒白をつける事が出来た。
パティルは人格本位で全村一致の賛成を得た人間が選ばれ、彼の職能は極めて廣汎であつた。パンチャエツトは一群
の委員を以つて構成せられ、その委員の選挙法は完全に民主主義的方法によつた。植民地支配に於ける英國の巧妙

さはその初期に於て、地方統治の一切を擧げてこのパンチャエツトに委任した事で、その際それには一切干渉すべか
らずと一應規定されてはゐるが、マツタハイも指摘する如くパンチャエツト制度に反對する相當強い感情が、當時の
東印度會社の社員中にあつた事を否定出来なかつた。然しパンチャエツトは誰かも言つたやうに、單に部落間の争論
やカストに關する問題の解決のみならず、衛生、其他公共的施設に關する一切の事業監督にも當つたのである。

これ等の農村協同體は、紀元十二世紀のモガル王朝時代——即ち回教徒の支配時代にも、彼等から課せられる租
税の献納を除ては、多かれ少かれ自治を許容せられてゐた。然し東印度會社の君臨は、農村印度の崩壊を意味し、こ
れ等の部落官吏も今に残つてゐる事は事實であるが、彼等は最早や政府の奴隸以外の何者でもなくなつてしまつた。
現在印度人大衆は彼等を警察のスパイと考へ、最早や彼等と血を同じくする同族であると感じなくなつてゐる。パッ
トワリも、大衆の費用で活動するのではなく、彼等の所有にかゝる各部落の新聞も、果して正しい内容を持つもので
あるかどうかを、大衆は疑問に思つてゐる。事實、部落發行の新聞を維持して行く事は現状に於て極めて困難なので、
結局パットワリがこれを政府へ賣り物とし、その公共的性質は敢へて農民壓迫の官僚的機關に轉化してゐるのであ
る。かくて過去に於て輝かしい業績を持つ部落官吏も、現在では政府支持の奴隸的組織の中心機構をなし、村民達は
絶へず彼等を恐れて憎惡するだけである。然し今一つ農民生活を困難ならしめてゐる現象は、法廷の發達であると言
へる。無智な農民にはこの外國式な複雑な機構を理解する事の出来る筈はない。萬一正義を法律に依つて決定しやうと
思へば、多額の訴訟費用が必要であつたし、辯護士も必要である、而も巡回裁判で事が決定しなければ、その上に高等
法院と樞密院があるのである。かくて農民が恐るべき複雑な訴訟關係に入込まなければならぬし、正義の量もこれ

迄と違つて金の量に比例する事實をいやと言ふ程見せつけられてゐるのである。現在の英國流の法律は、田舎の現實生活に何等根據を置くものでなく、農民の救済乃至は向上を企圖する法令は一項も持つてゐない。従つて農民は結局墮落し、時としては不正直にならざるを得ないのである。この點は、これ迄も印度人辯護士の側から幾度となく猛烈に抗議が繰返されてゐる。政府の高級官廳及高等法院の費用による負債が、農民の生活を一層貧困に迫込んでゐる事は今や蔽ふべくもない事實である。又土地も現在は最早や農村協同體に屬してゐない。地主もモガール王朝時代には單なる租稅徵收人に過ぎなかつたが、英國支配の下にあつては地主に昇格し(註一)たのである。彼等が苛劍誅求の點に於て、如何に慘虐であるかを示す實例は兩手に餘る程ある。概括的な敘述は避けなければならないが、嘗つてはその收穫の一部を政府へ貢物する限りに於て、土地は飽く迄も農民の所有であつたが、今日では餘りにも苛酷な地代が、彼等から土地を續々剝奪してゐるといふ一事を挙げれば事足りるであらう。かくて遅れた印度に於てもその聯合ビハール州に於てはまぎれもない農民と地主の階級闘争が激烈を極めてゐる。然し土地課稅の負擔と借財による土地の讓渡がこの種農民の運命を極めて悲惨なものにしてゐるにも拘らず、リヨットワリ制度(註二)の上にも租稅徵收人が同時に又農業企業者であるといふ事實は記憶されなければならない。

(註一) 如何なる専門家の意見も、ヒンズー及回教時代には土地の合法的所有權が、國家或は耕作者或は農村協同體の何れかに屬してゐた事に一致してゐる。耕作者と國家の間には、租稅徵收のための仲介人が存在してはゐるが、彼等には絶對に土地の所有權がなかつた。彼等の多くは、單なる租稅徵收人に過ぎず、彼等はこの責任をとる事に依つて政府の信頼を受け、それに對する豫約された報酬として彼等の集めた稅總額の一部を受取るのであつた。租稅を納入する農民は、モガール帝國

の到る所に見られたが、帝國の衰亡とそれに伴ふ中央政府の弱化によつて彼等の支配下にある土地の德義上の所有者たらしめた。彼等の中の少數だけが田舎出身者であつたが、その大部分は何等の階級的上下のない人達で、政府の困難な時代、或る時は詐欺により、或る時は賣却、暴力行爲によつて正規の土地所有者になつたのである。又英國が印度人の統治權を確保した時、土地所有形態が恐ろしい程錯雜してゐる事を見し、彼等もベンガル、ビハール、聯合、北部マドラスの各州に於てはザミンダール或はウード族の土地所有者たるタルクダールを眞の土地所有者と認める事に依つて、現在これ等の租稅徵收人も自己を「地主」と考へ、この重要階級の忠勤を獲たのであつた。又政府も或る地方に於ては、耕作者と直接稅協定を行つた。ザミンダール制度の下に於て、農民はゼミンダールが大きな勢力を持つ故に壓迫せられ、耕作者を極端に搾取する彼等に對し、小作人と小作下請人の提携が發達した。小作料の吊上げや強制追出しが日常茶飯事となつた。政府は二三の小作法を發布したが、事實は無力で今日どんな状態であるかは、我々の知る所である。リヨットワリ制の下にある土地が上記の理由に依つて大地主或は高利貸の手に移りつつある事も忘れることが出来ない。

(註二) 英領印度の五%がこの制度で、地租は週期的に引上げられ、租稅納入の責任は直接その土地の所有者が負ふてゐるので、納稅遲滞の時はその所有權を法律的に失ふのである。又この基礎の上に立つリヨットワリ村落もある。

ガンデイ・アーウィン協定後、間もなく發表せられた一九三一年度國民會議派聯合州委員會の報告書は、この意味で今なほ研究に價する。事實この時の物價は未曾有の下落を示し、前後二十五年間に十八回の飢饉が襲ひ、二千六百萬人の死者を出して一八七五年から一九〇〇年に至る間より甚かつた。英國支配による農産物の商品化や、資本主義的植民地栽培が既に支配的となつたため、これ迄の農村經濟の根柢が動搖し、免稅の特權を持つ自作農ですら再び立上れない程の打撃を受けた。當時の聯合州知事マルコム・ハイレイも、現存する小作料の基礎は既に崩壊したため廣範圍の變革が必要である事を認めた。然し當時の中央政府には何らの處置に出る準備もなかつたので農民の憤慨は

激化し、國民會議派では地租不納運動を開始すると政府を脅かし、農民は文字通りその恐喝を實行した。マハトマ・ガンデーは農民のため、せめて最小限の救済を獲得しやうと努力したが餘り成功しなかつた。彼は農民と地主の兩者に耐え忍ぶやう訴へた。然し政府が、結局地主を支持したので農民が敗北した。檢束と彈壓のみが、當時の秩序を維持した。官憲の農民壓迫に就ては幾多の慘虐な物語が傳へられた。彼等は鞭打たれ所有する動産は全部差押へられ、婦人は恥すべき凌辱を受けた。地主には特別の免許證が與へられ、警官と稅務署役人がその支配下に立つて活動した(註一)。

(註一) 印度の無警察地方や官吏の勢力なき村落に於ては、地主に司法權を與へこれを通じて間接的支配が行はれてゐる。

然し農民はこれ等の壓迫に依つて次第に自己の力に目覺め始めた。一九二一年の過去に於てさへ、農民達が一枚の切符も持たずに公然團體旅行をしたとネールの自敘傳中に書かれてゐる。一九二二年には、早くも一種の農民暴動が國民會議派の手に依つて計畫せられた。マハトマ・ガンデーはビハール州のチャムバランとグジエラートのバルドリイに於てサツチャグラハ(眞理の把握)運動(註二)を實行したが、暴動の新らしい一頁は實にこれ等の絶望がそのドソ底に達した時、人知れず開かれてゐたのである。従つて當時の聯合州農民には勿論地租支拂ひの意志はなく、妥協的なガンデー一派の説得に耳を傾ける意志もなかつたのである。

(註二) ガンデーにとつて彼の行ふ獨立運動の目的は勿論スワラチ(自治)であつたが、これに到達する道程は即ちサツチャグラハ(眞理の把握)であり、その方法としては非暴力でなければならぬと言ふのである。一九三〇年彼が二回目の大衆運動を展開した時は、先づ七十五人のサツチャグラハ團を率ひてガンデー海岸へ行進し、國禁を犯して製鹽を行ふ事によ

りその口火を切つた。

三、農民運動と國民會議派の立場

國民會議派では、この世界的不況に對應する一九三一年以後の農民運動の擡頭に呼應して、その一九三七年度大會は、ボンベイ州フアイズブルと言ふ一農村に開かれ、農業綱領を起草すべき委員會が始めて任命せられた。その綱領制定の要求は一九三六年度のラックナウ大會に於てなされたもので、その内容は次の如きものであつた。

- 一、小作料及課稅額の減額
- 二、採算のとれぬ土地の小作料及土地稅の免除
- 三、最小限を條件とする農業收益への課稅
- 四、水路、其他灌溉稅の低減
- 五、一切の封建的徵稅、賦役及強制勞働の廢止
- 六、相續權を持つ借地の固定化
- 七、協同耕作の獎勵
- 八、負債モラトリアム
- 九、未拂ひ小作料の一掃
- 十、共同牧場地の設定と井戸、池、森林、その他認められた同種のものに於ける市民の使用權

- 十一、未拂小作料は市民の負債と同様の方法で返済し、追出し方法によらざる事
- 十二、農業労働者のための最低賃銀と適当な労働条件を規定する法案の設定
- 十三、農民組合の承認

これ等の改良案は多方面に亘つてゐたが、國民會議派としては地主制度の廢止を率直に提議しなかつた事が、特記せられる。然し同年印度に始めて行れた州總選舉の折は同派の議長ネールも全印を駆けめぐつて農民の經濟的要求を強調し國民會議派が選舉に勝利を獲た自治十一州の中八州に内閣を組織した時も、その劈頭に飾られた綱領が又農民問題であつた。選舉戰の折、農民は國民會議派への信頼を表明し、新たな内閣の統治に最大の期待をかけた。當時國民會議派の左翼は、農民組合の組織に没頭してゐた。聯合州とビハール州では特記すべき農民大會が開かれた。それ等二州の或る地方に於ては、初期の國民會議派委員會が即ち農民組合といふ形をとりその農民の政治的進出には重大な意味があつた。然し聯合州は比較的都會化せられた都市を有するため國民會議派の同州委員會が左翼化した中産階級の下層を背景とするのに對し、ビハール州は都會も少く純然たる田舎と言ふ事が出來た。その州首都バトナも聯合州の小さな町より人口が少ない程で、國民會議派委員會も當然地主階級を中心な背景としてゐた。従つて同州に於ける農民組合の發達は、到底國民會議派のそれと歩調を一にする事は不可能な状態にあつたのである。事實當時の國民會議派内閣はその出現によつて印度市民に自由な新しい空氣を齎したとは言へ、その中には純然たる社會主義者や×主義者と共に、農民達を結局彼等の目的に向ふ事を妨げる要素ではないかと疑ふ分子もゐたのである。そのため各州の農民達は、小作料の不納運動を實行するやう煽動せられるかと思へば、現行の法律改正が實現する迄は、結局そ

の法律は地主に有利に出來てゐるのであるから、下手に動けばその土地から追放される事を意味するに過ぎないと警告して、その間に何等の一致した方針もなかつたのである。又中には地主から土地を剝奪せよと説く閣僚もゐたため、ビハール州の地主は慄え上り反動的な眞理の把握運動を行ふと、負けしみの脅喝を言つた程である。

事實國民會議派は、各種の社會層を背景として單に獨立といふ政治目的の下に集る民族主義者の政治團體に過ぎないのであるから、純然たる社會主義的闘争を採用したり、完全な土地の國有を斷行して、地主制度を一掃したりする事は到底期待出來ないのである。彼等はこの原理を今迄に一度も犯さなかつたし、今後とて矢張り同じであらう。従つて當時の農民層の指導者は、急激な加速度を以て發展する農民運動に負けまいとし、各州大臣の微温的な態度を深刻に批判し始め——この過程に於て最左翼のチャンドラ・ボースは、一九三七年度の議長に當選した——農民の要求こそ反帝國主義闘争に於ける「共同戦線」的武器の最も重要なものであると主張し、當時の州閣僚達は、國民會議派以外の大衆組織に對し、極端に臆病となり始めたのである。當時、彼等に依つて提出せられた農民に關係ある各種の法案が、何れも穩便な性質のものであつた事は、その間の事情を物語つてゐた。然し反動的性質の強いビハール、ベンガルの各州に於ては、農業問題が等しく虐待せられ、特に國民會議派内閣のなかつたベンガル州に於ては、農民の狀態が悲惨なものであつた。即ち、一九二七——八年度のベンガル州衛生報告書にも、次の如く述べられてゐるのである。

「現在ベンガル州農民の大部分は、鼠すらそれを以て五週間以上生存し得ないやうな食物を攝つてゐる」と。
然しこれ等の中で最も活動と論争の激烈を極めたのはビハール州であつた。事實このビハール州は、小麥の集散地

として、過去に於て印度で最も農民運動の盛んに行はれてゐる地方であると共に、その激烈な闘争の先頭に地主側を代表してガンディ派の巨頭ラジendra・ブラサド（前會議派議長）、農民側を代表してスワミイ・サハジャナンド（印度農民組合書記長）と言ふ立場の全く異なる二人の全印度的人物を國民會議派内に有し、現在の國民會議派の持つ階級的、社會的矛盾をそのまま集中的に表現する地方でもあつた。

このサハジャナンドは四十過ぎの頭を丸めた貧弱な男で、その名サンヤシイは袈裟をかけて宗教に一生を捧げる男の意である。然しその小さな體軀には燃ゆるやうな激情と闘志が溢れ、ネールをして「印度で最も闘士らしい」闘士と言はしめてゐる。最も彼に強い社會主義的傾向は、彼の率ひる印度農民運動の目指す方向を暗示するとも言へるであらうが、それは兎も角印度の農民運動が彼の出現によつて、始めて一九三五年頃から組織化せられ、所謂組合運動に發展した事は見逃せない功績と言ふべきであらう。

然しこのビハール州に集中的に表現される會議派の矛盾は、同時に會議派が全國的に持つ矛盾でもあるので、この階級對立の問題は前後四回これ迄全印の注目を浴びる舞臺で二人の間に闘はれてゐる。即ち、國民會議派がネール達の努力により、これ迄の中産階級の運動から一大轉換を行ひ、始めて農民及労働組合代表の正式参加を求めて開かれた一九三六年のラックナウ大會、同七年のファイズブル大會、同年のバトナ州大會、同八年のハリブラ大會と引續く四回がそれであつた。この中既に述べられた前二者を除き、バトナの州大會の経緯を述べると、この時問題となつたのはサハジャナンドが會議派左翼と策動して農民組合を組織した事がガンディの主張する非暴力の理想に抵觸するか否かの問題であつた。この場合ブラサドは抵觸せずと主張するサハジャナンドに對し猛烈に攻撃し、農業労働者が州大

臣に向農民の利益を擁護しないと云つて騒ぎ、彼等のダンダス（農民の持つ棍棒）を地主にお見舞するやう主張する事によつて非暴力の理想を犯さんとしたと述べた。又その時彼等が用ひた「どうしてお前達はその小作料を獲つてゐるか。私のダンダス萬歳」と言ふスローガンをその席上暴露し、かゝる煽動のある限り農民と地主間の衝突となるは當然なので、政府は州會議派の勸告で止むなく防衛手段を探り、某地區委員會の組合脱退を承認せざるを得なかつたと述べた。事實、國民會議派が自治八州に内閣を組織して以來も百人以上の農民がこれ等の事情によつて逮捕せられた事は特記に價する事である。又、ラジendra・ブラサドは國民會議派が選舉當時、地主階級へ身賣したと言ふ非難を受けた時、國民會議派に對して如何に「いやらしき宣傳」を行つたかを追想して注意を促した。これに對しスワミイ・サハジャナンドは、右の如きスローガンを作つた覺えもなければ、農民がそれを口にするのを聞いた事もなかつたと主張したが、若し必要なら武器を以て自衛手段をとり、地主階級の暴行に對抗するやう農民に説いた事はあつたと述べた。然しこれは暴力行爲ではなく、印度刑法にも承認せられた行動であると主張した。即ち彼は暴力を説く所か、逆にそれを防遏したとも言へると主張して、これ迄も地主階級の手先となつた暴漢達が傍若無人に家宅侵入罪を犯し、甚だしい時には婦人の凌辱さへ意としない事が印度の農村に於ける日常の事であると述べ、彼は寧ろそれを誇ると答へた。又地主達も現在農民のこの自然發生的な行爲により政府から一定の代償金を貰つてその租稅徵收權を譲渡せざるを得なくなつたのであるが、何故彼等に代償金を與へなければならぬかとも、痛烈に攻撃した。事實一九三三年コーンウォリス總督が永代地租制度を發布する迄は土地も農民の所有物であつた。又其名前から言へば宗教に一身を捧ぐべき彼が、何故農民運動と言ふやうな仕事を始めたかと言ふと、或る時彼が火葬場にゐると見る

も哀れなボロ切れに包まれた一個の死體が運ばれて來た事があつた。所がその死體の主は一人の農民で、彼が生れ落るなり最後の息を引取る瞬間迄、何百何千人といふ印度民衆のために食物を生産し続けながらいざ死ぬ時は屍を包む着物すらなかつたといふ事情が判つたので痛く憤慨し、神は人を育むと言はれながら、その事實を未だ見た事がないと怒り、その労働によつて獲た穀物を以て何千、何百萬の人間を養ふ農民こそ神の姿ではないかと考へたのである。そして、その名の如く神に奉仕する身であれば、農民に奉仕する事こそ神に奉仕する事であると堅く決心したのであつた。

以上の意味でブラサドとサハヂヤナンドの間に展開された論争は——その結果却つて事態を悪化せしめたが——教訓的であつた。その激論によつて會議派に分裂の徵候現はると主張した一部分子もあつたが、さうはならなかつた。それは過去の人間には受け容る事の出来ない階級意識の激化の徵候であるのに過ぎなかつた。我々はこの物語りの結果を一九三八年度のハリブラ大會に見る事が出来る。その大會に於ては農民組合に就て激論を戦はすものが多數現れ、會議派ではこの農民組合加入を正式に禁止するであらうとの豫測も行はれたが、丁度その時起きたビハール、聯合兩州の内閣辭職といふ政治的危機が同派を見舞つたため、遂にその問題を忘れて了つた。今は分裂すべきでないといふ空気が大會を支配したからである。そしてその大會決議は豫想以上穩健な内容のものとなり、その決議文は農民組合が國民會議派に從属するものである事を忘れないやう警告を發すると共に、各州委員會に對し農民の利益擁護のため努力を倍加するやう要求するに止つた。

一九三七年八月二十三日、ビハール全州から集る農民が、彼等の要求を掲げた組合旗や會議派黨旗の下に、パトナ

へ向つて五萬人の行進を行ひ、十二月二十六日には更にそれに倍加する十萬人の農民が裸足となつて激烈なスローガンや歌や自作の民謡を歌ひつゝ、同市へ雪崩込んだ。一九三八年二月には聯合州の約六萬の農民が一糸亂れず、ラツクラーへ行進を行ひ、州議事堂正面で靜肅にネールの挨拶を受けた。

然し農民組合の指導者も、地主階級に對しては、結局大衆煽動が情勢を有利ならせしめると信じてゐたのであるが、事實はこれに相違した何故ならビハール州の國民會議派運用委員會は農民組合との共同戦線案を否決し、會議派所屬の労働者に農民組合運動とタッチしないやう指令を發して、それを裏切つたからである。事實ビハール州に於ては、州政府が地主階級の諒解を得てのみ新法律を發布することが出来る程で、農民組合がそれを攻撃これ努めて、漸くその被害を避けてゐる程である。又地主階級は國民會議派のファイズブル大會に於ても、かうして好條件の取引に成功してゐるので、このビハール州の係争問題は、なほ詳細に論ずる價值があるやうである。事實その後もその傾向は大戦下に於て益々顯著となる一趨勢にあるからである。聯合州政府が新に新小作法の制定を準備した時も、その州議會に於て一閣僚が地主を單なる租税徵收人と見做したため、猛烈な攻撃的となつた。然し結局過去の地代や負債を或る程度免除しても、農民に繁榮を齎す事は到底出来ない。それを齎すためにはなほその地主階級の背景をなす英國資本主義と言ふ大きな問題が横つてゐるからである。

四、農村の改良問題

古代よりモスリン、絨氈、綿布の産地として知られ、嘗ては歐洲市場に覇を唱へてゐた印度産業も、十八世紀中

業に始まる英國資本主義の印度侵入によつて一舉に崩壊し、ダツカの如きは人口四十五萬から忽ち十五萬に減少した程であつた。然しこの印度農村工業の崩壊は、同時に又土地に對する巨大な壓迫を招來し、印度は他國へ原料を供給して精製品を輸入する完全な資本家の隷屬國となつた。その農村人口も工業従業員の農村復歸によつて、一八八一年の五八%から一八九一年の六一・〇六%へ増加し、更に一九二九年には王室農業委員會の調査によつて七三・九%、現在は實に八九・一%と云ふ反世界的現象を呈してゐる。従つてそれを例へば一八八〇年から一九二一年間に七一%から五七%に減少した農業國デンマークの農村人口に比較すると、極めて興味深い點がある。事實このデンマークその他先進國の例は何れも工業國への轉向の道を進んだことを示すのであるが、獨り印度のみは不斷に増加する農業國として取殘され、その所有耕地も七六%迄が十エーカー以下と云ふ慘狀で、農業企業的にも極めて遅れた状態に置かれてゐるのである。従つてこのことは印度の工業と農業間の均衡に——即ち、土地によつて生計を營む農民數が多過ぎると云ふ重大な産業上の缺陷を意味してゐる。

然し世界の現象は同時に又遅れた國印度にも影響するのであつて、我等は既に深刻な不況の場合それが如何に聯合州の農民に影響を及ぼしたかをみた。又中央政府はルビー價格の維持に或る種の方法を採つてゐるのであるが、一九二六年から一九三〇年に至る間は顯著な通貨の收縮が続いた。この時印度は半製品の輸出國であるから、低價格の維持は取りも直さず第三國人の利益になるものゝ、國內の農業經營者には何百萬ルビーかの損害を意味してゐた。然し印度は最初から独自の金融政策を英國から許されてゐないので年平均一億ルビーの輸出超過(註一)による巨大な財源も、悉くスターリング・ブロックの一構成分子としてルビー貨植の人為的比率維持のため、浪費せられてゐるのである。

ある。(註二)この植民地國家故の悲哀は又農業經營者にも現在より遙かに安價に賣ることを強制してゐる。英本國が金本位制を拋棄した時も、ルビーは自己の水準を見出すことを許されず、これ等のことも又農民の損失を意味してゐた。

(註一) 商品貿易上から云ふと過去二十年印度は龐大な出超國で、一九三〇年の世界恐慌前はその額八億ルビーを突破した事もある。一九三一年以降はやゝ衰へたが最近また反撥し、一九三七、八年度は輸出一八億〇九二四萬ルビー、輸入一七億三七八七萬ルビーであつた。

(註二) 英國資本主義の巧妙さは、蓄積された富を本國費その他の名目で巧みに捲上げ、印度が過去に於て蓄積した一億四五〇〇オンスの金が年々龐大な金輸出となつて本國へ吸収せられてゐる。その額は年百萬磅乃至四千萬磅と云はれてゐる。

かくて安價な金を利用し得る時でさへ英蘭銀行の割引歩合の高い事や、政府が民衆の承諾もなく本國から高い利率で借款する態度は、如何に植民地に對する態度とは言へ響登に値する。國民の貯蓄も結局國庫へ納められて、新規工業乃至は農業發展の企圖には使用されない(註一)。我々の知る範圍では印度政府が自國の農業に生産奨励金や補助金を與へたと云ふ例を聞いたこともなく、他國の如く關稅障壁を以て農業生産者を保護すると云ふことにも餘り熱意がないことを知つてゐる(註二)。然しこゝではたゞ印度の最も特徴的な點のみに觸れたので、王室農業委員會の次の如き言葉も一應はもつともらしく聞えるかも知れない。

「印度の農業發展は今後の教育普及なくして些かの進歩も望み得ないであらう」

(註一) 一九三九—四〇年度の通常豫算四億八八三四萬ルビーの中、農業費は一三〇萬ルビー、工業費は三一萬ルビーと云

ふ少額で、その時の軍事費五億四八五七萬ルピーから見ると正に曉天の星の感がある。

(註二) 一九二二年關稅局が設置せられて保護貿易を行ふことになり、候補種目八種が擧げられた時も結局採用されたのは英國側に餘り打撃にならない種目だけであつた。

然しこれは、今少し印度を注視すれば、全く無意義な主張である事が判る。事實、印度農村の少年達は教育を受けるとしても現在の農村に於ては無用の長物であり、場合によつては一家の荷厄介にさへなるのである。そして高等農林等の高級學校卒業生ですら、徒に失職する機會に恵まれてゐるだけである。従つて王室委員會も、次の如く述べてゐる。「小學校へ通學する學齡に達した少年の比率は、なほ失望するに足る程少數である」

従つて月謝無料の義務教育は印度發展上の必須條件であり、その意味ではガンディによつて始められてゐる「ワルダ・スキーム」と言ふ教育法が注目せられてゐる。勿論その計畫は漸く一學年二組の教育を開始したばかりなので批判はまだ早過ぎるが、それは故郷の言語とヒンズー語を含む七ヶ年の基礎教育を中心とし、その目標を基礎的職業の訓練に置いてゐる。然し現状に於て印度とアメリカの教育状態を比較することは極めて興味がある。印度に於て文字を知る者の數は二二% (男) と、一・八% (女) であり、アメリカは百人中七十一人の子供が通學し、一九二九年には都市に於て九八・四%、農村に於て六六%であつたが、その數字は今日遙かに高くなつてゐるであらう。今次大戦前印度の數字は男三七・九%、女二二・五%で、この驚異的增加は、凡ゆる障害に直面しながら獲ち得られたものであつた。だがそれでもなほ印度の通學兒童の比率は極めて小さく、サイモン委員會も二十一歳で文字を知る者は百人中十七人、女百人中二人であると述べてゐる。

然し過去に於て印度は、決して教育問題を閉却してゐたのではなかつた、ヴェーシヤ (農民階級) が經典を學べば不愉快な刑罰に處せられたことは事實であつたが、普通の勉學は許されてゐた。又アッシュヴァパティ王は自國に一人の文盲無學の者があつてはならないと要求し、マツトハイは我々に學校教師が農村經濟に於て優先的地位を與へられてゐた事を告げてゐる。即ち、學校教師はその俸給として租税を免除せられ、土地と穀物の贈物を與へられたのである。中央政府でも最近ヴィドヤ・マンディルス (Vidya Mandirs) と云ふ新教育計畫を樹て、州政府經營の學校に土地私有を許可し過去の農村制度を復活しやうとした。僧侶も又教育を司り讀書、習字、算術、時にはサンスクリット、詩、文法等を教へたと傳へられてゐる。印度には昔から學校があつて婦人も決して閉却せられてゐなかつたのである。然しその灌漑施設の場合と同様印度固有の學校は漸次減びる一方であつたが、新しい學校施設が彼等の貧困と英國側の無關心によつて忘却せられただけの事であつた。

然し無智な農民に、複雑な近代社會の生産問題が處理され得ない事は自明の理で、事實彼等は現在我々から見て可笑しい程英國資本主義の魔手に欺かれ、壓迫せられ、その耕作及農産物の販賣には新式方法の利用を知らないのである。又保守的な農民は、例へば農業専門家に遭遇しても、それが自分達と同じ世界の農民でない限り決して信頼しやうとしないし、事實英國側の派遣するこれ迄の専門家には耕作者との密接な接觸が忘れられてゐた。この點ビルマのピインマナにある浸禮派教會經營の農學校は注目すべく、そこに學ぶ少年達は實驗を通して彼の力に及ぶ資源をどうすれば最も好く開發し得るかを研究してゐる。ベンガル州アサンソール縣の農村協同體ウシヤグラムもこの實際的準備を忘れぬ好き例のやうであるが、ダーリング氏がバンジャヤ農村の復興問題を取扱つた著書中に、印度の農業支出が

外國のそれに比較して極めて少ないと述べてゐるやうに、印度は結局農村教育の基礎をつくるべき重要な機会にさへ恵れてゐないやうである。従つて前記農業委員会の主張など全く物の表面のみ見てその本質を失ふ一例と言へやう。又農村の改良問題は現在印度でも一種の流行となつて、總督と種牛の並んだ寫眞が撮られたり、凡ゆる種類の机上プランが次々に發表せられたりしてゐる。然しそれも官僚と農民間のギャップによつて飽く迄も机上プランに止まることは、如上の事情によつて明かである。又産業組合も政府の宣傳によつて相當大規模に始められてゐるものゝ、これまた官僚獨善の惡罵を雨の如く浴せられてゐる。何故ならこれ等産業組合は農民の負債問題さへも解決出来ない馬脚を現はし、或る場合など銀行利率より一分乃至一分半高で金を貸す高利貸の方が遙かに安く、取立てもまた嚴重でないと云ふ事實が起きてゐるからである。飢餓線上にある農民にとつては金を借りる経路及形式は問題でなくて、金を確實、迅速に手に入れると云ふことゝ返済方法が餘り嚴格でないと云ふことが問題の核心である。従つてそれが政府組織である限り、産業組合の思想は到底農民に理解される筈もなく、現在では漸次信用組合へ變質するやうになつてゐる。若しこれ等の産業組合が農民の實際生活に即して生産改良、新技術の普及、販賣の合理化を行へば多少農民の注目を惹いたであらうが、結局その組織者の缺陷によつて失敗してゐるのである。

又印度の農村問題に於ては生産品の販賣問題が重要地位を占めてゐるのであるが、この上に立つて常に問題となるのは鐵道である。印度の鐵道は一八四五年の過去に始つて現在六萬九千四百五十九哩の哩數を持つてゐるが、これは元來一八五七年の印度兵叛亂に懲りた英國側が、自己の軍隊輸送と本國の必要とする物資開發の必要上つくつたもので、或る意味では英國の印度支配の中心をもなすものとも云へる。従つてその經營には赤字の場合が多く、近年漸く三

億ルピーの利潤を擧げるやうになつた程度である。

然しその利潤を擧げるための更に極めて高い運賃が、農民をして殆んどその利用を不可能ならしめてゐる。従つてもし農民にも恩恵を施さうとすれば、現在の鐵道を全部經營するに必要な機械の輸入を避けて、部分品を全部國內で製造するやうに（註一）ならなければならないであらう。然し現在ではとも角この高運賃のため、農民は極めて安い船賃による外國品との極めて不利な競争を餘儀なくされてゐるのである。事實、鐵道の發達は印度に於て却つて農村の恐慌の原因とさへなつてゐるのである。一九二九年から一九三一年に至る間、印度奥地で生産される小麥は、ボンベイその他の諸港に於て遙々外國から輸入されるカナダ小麥の建値よりも高かつた程である。又ジャバと印度諸港間の砂糖船賃は一マウンド八アナ（邦貨約六十四錢）であるのに對し、聯合州ミラットとボンベイ或はカルカッタ間の鐵道運賃は、ニルビー（邦貨約二圓六十錢）と云ふ馬鹿化した値段である。この鐵道運賃の高價なことに就ては王室農業委員會も燃料消費の高價なことを擧げてゐるが、例へそれが如何に高價であるにせよ、印度の農民がその高價に災ひされて採算のとれぬため、貴重な肥料を幾度か大量に焼却してゐる事實を想起しなければならぬ。

また印度には全國に亘り六千八百萬三千九百九十九エーカーの大森林があるのであるが、これも鐵道運賃の高價に災ひされ木製品は一切を輸入に仰ぎ、最近迄は鐵道の枕木迄が同様であつた。かゝる高運賃は農具の輸送とその普及をも困難ならしめ、印度の土質には不可缺の人造肥料——例へば國産の骨肥、硝石、或は森林地帯から發見される高價な植物性糞土等を手に入れることを不可能ならしめてゐる。また貧困な農村は精巧な冷蔵法を知らぬため、バター、チーズ等の牛乳製品を輸送することも不可能で、甘蔗のみに特別の運賃割引があるだけである。

(註一) サー・トマス・アインスコッフの報告によると、今次大戦下に於て印度は機關車、車軸、精密部分品を除いて一切の鐵道用品を自給するやうになつたと述べてゐる。

然し印度の電力のみは民族資本の經營であつて、漸く開發に着手したばかりなので將來の期待も大きく、農村がやがて電燈を使用し、安價な電力が農村工業に惠まれる日を想像しても強ち空想とはならないであらう。ソ聯は既に農業部門に於ける電力の重要性を認めてゐるし、安價な肥料の生産、效果的な灌漑、それに電力の三要素は何れの國の農業に於ても不可缺である。

五、農村工業化問題

また三百萬の手工業紡績者を中心とする印度の農村工業問題は、ガンデイの最も關心を持つ問題で、彼のカデイ(Khadi)、即ち國産布運動は既に一九二二年以來続けられ、その機關たる農村工業協會の努力によつてグル(Gul)即ち粗織や搾油等の新たな工業部門が農村に發達し、國民會議派としてもボンベイ、聯合兩州に發電所、ボンベイ市に自動車工場を計畫した。然しガンデイの運動は近代的機械の使用や、それによる大規模生産に偏見を持ち、過去の生産様式へ復歸の形式をとつてゐる。事實その運動の最大限或は最小限を示す事は難かしい問題である。彼は印度が完全に解放せられた時始めて計畫經濟を實行に移し、これによつて工業の地方分散を行ふと共に、二三の大規模工場を都會に設立して必要な生産行程を負擔せしめる計畫であるため、現在は殊更可能な範圍を強調するに留つてゐるのかも知れない。従つて彼の運動には各種の解釋を行ふことが可能で、この運動方法に同情する一派は、最早や倫敦、紐

育の如き巨大な人間の集合體は健康な生活様式でなくなり、空中戦の時代を迎へた現在では極めて危険な弱點を暴露してゐるからであると主張してゐる。

然しまたガンデイ一派は近代工業の複雑精緻な生産行程を、例へば自動車の部分品が無数の小工場に於て分業によつて生産され得るやうに、分業によつて解決することが出来るかと考へてゐることも事實である。この點は彼等も明かに近代工業技術の複雑な有機的機能を理解してゐない失敗であると言へやう。

然しガンデイの思想には、又一面近代的な大量生産に飽く迄も敵意を抱く點があつて、その主義の遵奉者の中には事實、蘆製のペンと手漉きの紙を使用して、近代發明を馬鹿々々しい程白眼してゐる者もゐる。かうした反時代的な行爲は當然避け難い矛盾を暴露するのであつて、例へばガンデイは時々自動車に乗りながら、何時もその近代機關に乗せられたことを零し、牛車に乗つて農村を廻つて見たいと云ふのである。彼がこの先だけ生きるかは疑問である。然し現在國民會議派の持つ勢力の大半は、彼に次ぐ巨頭ネールが自動車や汽車や飛行機や、さては牛車の力をも借りて直接民衆の中に活動する精力と熱情の賜物である。又この偉大な亞細亞大陸が統一ある國家となる日も遠くないと云ふ事實も、近代輸送機關の發達に負ふ所極めて大なのである。

又ガンデイは病氣の折外科技術のお蔭で命を拾つた事もある。最近彼の血壓を測るためアメリカ製の極めて高價な器具も使用せられてゐる。然しこれに對して彼が人間の弱點への讓歩と感じてゐることに疑ひがないが、或る側からは又その反對も考へられてゐるので、若し彼が近代發明の價值迄否定するとしたら、それは確かに間違つてゐると云へるであらう。彼とて農村に電氣の恩恵が普及し、農村工業の目覺しい發展の招來されることは歓迎するのであ

る。然し、例へば縫用ミシンは承認しても、機械による個性の没却と大量生産には飽く迄も反対するのである。だが彼は決して理想主義者ではない。どこまでも哲學者の衣を着た小さな功利主義者である。彼には一千年先のことを考へる氣は毛頭ない。彼はたゞ粗末な手製の木造機械——即ち手紡車——によつて大した金もかけず、英國支配下の現狀に於ては如何ともし難い農民の運命を、少しでも好くすることが出来るかと考へてゐるだけである。

全印紡績工協會の責任ある地位に立つ人々は、このガンデイの趣旨に基きチャルカ (Charka)、即ち手紡車を使用すれば農民の生活も好くなると思ふに叫び、協會所屬の勞働者に最低賃金を保證してゐると云つて自慢してゐる。成程カデイ、即ち手織木綿の丈夫なことは否定出来ないが、同時に又林立する煙突や組織された力を強く感じさせる巨大な機械の集積に近代的な生活感情を感じる人々には、恐らく何等の魅力のないことも否定出来ないであらう。

鋼鐵とガラスの集積するX光線は、確かにゴシック寺院の美を有してゐる。然しガンデイ等は機械化した工場生活を個人生活の破壊者と考へ、それが結局階級闘争に導くと共に人間生活に最も貴重な精神活動や道徳的反省を破壊するとの偏見を抱いてゐるのである。従つてその東洋哲學的偏見を捨ない限り、我々に内容の充實した生活を與へんがための機械使用と自然法則の支配——それ自身の中に深刻な精神的要素を含んでゐる所——を理解することは不可能であり、それが資本主義社會に於てはたゞ少數者の手に利潤を集中せしめる手段に悪用せられてゐるだけであると云ふ方法的誤謬を認識する事も到底出来ないのである。

事實ガンデイはハリブラ國民會議派大會の終了後、次の如き失望を世間へ發表した。

「カデイ (國産布) はアヒムサ (Ahimsa)、即ち非暴力の基礎及其の形象と解されてゐる。眞のカデイ (國産布)

着用者は、眞實ならざる事を口にしないであらう。眞のカデイ着用者は、暴力、偽瞞、不純を心に宿さないであらう……グイサルナガ・ハリブラに國民會議派が大會を開くため開いた町の建設によつて、七十五萬ルピーが浪費された。其處には私の好む多くのものもあるが、それはカデイの精神を缺いてゐる……カデイの精神を充足せんとする意識的努力の行はれる所には、七十五萬ルピーの經費をかける餘地はない筈である。私は、我々が外部にかける費用として五千ルピーで農村集會を催し得るやうにならねば不可なりと言つたことがある……然り、その考は未だ私の心を離れないでゐる……農村熱と電燈のイルミネーションは相容れない。そこには自動車やトラックを容れる餘地もない。彼等は私を自動車に乗せて、ファイズプールへ連れて行き、ハリブラへ連れて行つた。彼等は私を牛車に乗せやうとはしなかつた……若し我々にカデイの精神があれば、此處に七十五萬ルピーも費されるやうなことはなかつたであらう。此處にはガソリンもあれば、石油もあり、給水管やストーヴや電氣などもあつて、齒磨粉や匂ひ入りのボマーDを含む近代的都市生活者の快樂の大半が備へられてゐる。村民は此等のものによつて損はれないし、又損はれては不可なり。村民の齒磨粉は新鮮な樹の枝であり、その齒磨粉は鹽と炭である……或る社會主義者の同志は我々と行動を共にするに耐へず、ガンデイの時代は過ぎ、新しい時代が我々の上に訪れてゐると云つてゐる。私は率直に云ふことを歓迎する。若し諸君が私の云ふ所を排撃するに足ると考へるなら、凡ゆる手段に訴へても排撃し給へ。諸君は私のためでなく、印度のために實行し給へ……若し我々がカデイの精神を誤り、それを靈物視するなら、我々は下賤な偶像崇拜者と異なるのである……私の心の中の或る物が、此處に私の間違つてゐないことを私に告げる」(一九三八年二月二十六日附「ハリジャン」紙)

この中にはガンデイ主義の眞諦が含まれてゐると思ふので、敢へてこの長い引用を必要と考へた。然しかうした彼の理想が完全に現代生活と相容れない事は、ネールも認めてゐる。事實、國民會議派のフアイズブル大會に於ても、その費用が問題となつたが、それでなほ集る群集に飯を食はせることも出来なかつたのである。ましてこれ等大衆の衛生施設や印度特有のベスト、コレラ、チフス等の危険防止に手が出なかつたことは勿論である。

又ガンデイの言葉に哲學的な衣を着た比喩や誇張のある事も事實で、それによつて會議派メンバーを合理的にその目的へ接近せしめるため、わざと極端な位置に立つのではないかと思はれる節がある。事實、彼の持論であるサツヤグラハ（眞理の把握）はこれによつて獨立運動の中心をなす指導者自體の鍛錬を企圖し、チャルカ、即ち手紡車を廻す事によつて印度に二千五百五十萬人からゐる印度人寡婦の救済に努める一方、會議派メンバーにもこれを強制することによつて、所謂中産階級と大衆間の階級排除を企圖するとも考へられるからである。然し、その理想には餘りにも衣が着せられてゐるため、そこ迄好意的に考へぬ連中には常に不満を持たれるのである。

然し又ガンデイの教訓の底には、常に苦行の強調と人間欲望の滅殺と云ふヒンズー教と佛敎的影響が潜んでをり、彼の思想には何等邪心なく、常に虚心坦懐と自尊心を民衆に要求してゐる。時として彼はその手段として町の清掃を行ひ、民族資本家階級にも奴僕の仕事を尊敬するやう要求してゐるので、ハリブラ大會に於ても教育あるグジュラテの青年達はその衛生活動や町の清掃を擔當し、カスト（身分）制度の厳しい印度に於て非常な驚異的となつた。事實、かゝる仕事は印度に於てこれ迄不可觸と運命づけられた不可觸階級に委ねられる仕事であつたのである。

然し極めて簡単な、同時に又極めて遅れた手工業を農民大衆に與へんとするガンデイの政策に就ては、王室農業委

員會も「農村工業の設立によつて農村大衆の状態を改良し得る可能性は、極めて限定せられてゐる」と述べ、この主張が多く専門家によつて支持せられてゐることを、想起する必要がある。又工場の地方分散計畫もその企圖としては將來性のある問題かも知れないが、現在の農民大衆が最も深刻に要求してゐるのは、何よりも先づ借地所有權の確保によつて生活の基礎を安定させたいと言ふことである。そのみが先づ國家全體の經濟發展を圖る計畫的プランを可能ならしめる基礎的條件でもある。又周到なる計畫は常に必要であつて、國營農場も印度の或る地方には可能であるかも知れないし、文盲の急速な撲滅は更にも緊急を要する問題である。

かくて印度は自然的資源に富むが故に、その大衆の苛酷な貧困は罪惡であり、不必要である。然し國民會議派では、その生産力を組織化することによつて農民にも食糧を保障し、衣類を與へ、計畫的教育を開始してゐる幾つかの國の實例が、常に一定度の暴力を前提として行はれる傾向があつたため、その計畫を印度へ移植することを拒否してゐるのである。従つて二億一千萬の印度農民は、未だ救はれずして暗黒生活のド心底を這ひ廻つてゐるのである。

第二篇 労働者

一、労働社會の現實と住宅問題

印度には、労働者がゐないと言はれてゐる。蔣介石の第一次北伐當時、ボローヂン等と共に武漢政府のコミンテルン顧問として活動した印度人の共産主義者M・N・ロイの如きも「印度には一人のプロレタリアもゐない」と明瞭に述べてゐる。

然し王室農業委員會と並らんで、依然王室労働委員會が組織されてゐるし、嘗つてはモスリン、絨氈、綿布の國として世界市場を制覇した名残りは、一九三七年度の調査に於ても依然工場數（労働者二十人以上）八千九百三十、労働者數百六十七萬五千八百六十九人、手工業者三百六十萬人以上と言ふ數字になつて残つてゐるのである。

然しこの近代的な動力を使用し、複雑な機械構造を理解する所の労働者は、一體この遅れた國のどの部分から生れて來るのであらうか。

印度は事實一九三七年度の統計に於て、十億ポンドの綿糸と四十億八千四百二十七萬ヤードの綿布、十二億千八百萬ヤードの黄麻製品、百五十五萬二千トンの鉄鐵、百四十七萬トンの鋼鐵及製品、九千八百八萬ガロンのガソリン、九十九萬トンのセメントを生産してゐるのであつて、この老大な近代的國家力の源泉もその實我々が今迄見て來た所の

農村の中にあるのである。農村に展開されてゐる地獄繪圖——即ち一日二アンナに満たない一家収入や零細土地からはみ出した農民大衆が意外にもこの近代産業の豫備軍を構成してゐるのであるから、我々は再び農村へ戻り、その遅れた農民が近代生活の頂點へ鍛え上られて行く過程を見なければならぬ。

印度の農閑期は乾季に當る三月から六月迄で、この期間には白熱的な太陽の下に家も、畑も、人も一齊に荒涼たる沙漠の中へ置捨てられる。さうした時農村には珍しい都會風——都會風と言つても背廣の上着に白い腰巻、それに蝙蝠傘を持った姿の男が、姿を現はす事がある。如何に貧弱な都會姿とは言へ、兎に角背廣の上着を着た彼は、年中殆んど裸で暮す農民達には何んとスマートに見え、年中鹽粥を啜つて青黒い顔をした彼等から見ると何んと榮養の好い顔をしてゐる事であらう。やがてその男は物珍しげに集る農民達に、若し彼等も都會へ行くとすればどんなに素晴らしい生活を送られ、どんなにうまい収入にありつけるかを話して聞かせる。若し都會へ行けば現在に數倍する賃銀を貰つて借金を支拂ふことも出来るし、歸れば新しい土地を買ふことも出来るのである。それに何より都會生活は、豪壯なビルディングや興行物や酒や女に恵れてゐて、實に愉快であると説く。農民達は次第に子供のやうに話へ引入られて眼を輝やかし、話が一應済めば急にホツとしたやうに我に歸り、このユートピヤに就てその可否を議論する。

かゝるユートピヤ境の生活は、借財から借財へ、高利貸と地主の壓迫に脅えながら送る彼等の生活よりも遙かにまじであることは事實である。その背廣の上着を着た男は、若し都會へ行く氣があれば旅費を立替へ、責任を以て到着後の就職口を見付けてやらうとも云ふ。かくして話を信じた農民の一部は、この新しい冒険に出發する準備を始めるのである。

この期待と希望に胸を躍らせる農民の一部は、暑さと濕氣に死にさうな目に遭ふ長い汽車の旅を續けて、漸く都會へ到着する。然し一步停車場から出た瞬間、田舎の賑寂とは打つて變つてガーンと響く電車、自動車、馬車、荷車の喧騒、それ等は恐らく彼等の堅い決意で來た足をもすくませ、例へ救ひを求めらるやうな眼を周圍へ向けても、通行人はこれ等田舎者の一團に冷淡で傲慢で無遠慮である。彼等も思はずそこにジツと坐り込み、何故自分達がこの喧騒の中にあつて孤獨なのかを考へ、その孤獨の故に都會に着いた最初の夜は、驛前の歩道にゴロ寝して送らなければならぬのである。

翌朝、漸く警官と驛員の力で工場へ行く道も判り、辿り着いた工場で始めて故郷の村で見た例の男と再會する。然しあの時と違つて何故その男は彼等によつて棒で、威張り散らし生意氣なのであらうか。彼等もその爲漸く都會の現實生活と、例の男の雄辯によつて植付けられた空想や期待の間に大きな相違のあることに氣付き、その男が單に彼等の狩出しを職業としてゐるシルダール (Dhilar)、即ち職業周旋人に過ぎないことを知るのである。而も彼等は最初の約束が全くの嘘で、この大きな生産機構の中では彼等が如何に無價値なものであるかに氣附かなければならぬのである。

働かうと思へば印度の工場には勞働者が不足してゐるのであるから仕事はあるが、その勞働時間は非常に長く、その賃銀は田舎の貧困生活を知る彼等にも何んと安いことであらう。彼等は仕事に従事しても最初の數週間は賃銀を受取る事が出来ない。シルダールが彼等に立替へた旅費や、就職口を斡旋したコミッションとして持去るからである。彼等は食ふために止むなく、この貪慾なシルダールから再び借金をする。その中に工場附近の商店にも未拂金か

出来て借金が倍加し、若し馬鹿化した利子の約束で貸した金を取立てることが出来なければ、手に棍棒をぶら下げて工場の表門に持受け、彼等に暴行を働くことを辭せぬカプリ人の高利貸を恐れなければならなくなる。

然し人間は何處の國に住んでも食はなければならぬのであるが、それにしても印度の都會の食物は農村のそれに比し恐しく高い。殊に彼等の住宅が大問題で、如何に農村時代に裸で寝た彼等とてさう／＼何時迄も街路を家とするとは出来ない——事實、彼等も最初三、四ヶ月は街路を家としてゐるので、その中には家族連れさへゐる——だが借家拂底の都會では到底自分達の手に負へないので、最後には同縣出身の労働者を發見し、その保證で借金をし、差配に敷金を拂つた上、始めて家に住むことを許されるのである。

かうした苦心に拘らず、その家と言へば村にゐる時よりも酷いのである。その村當時の家がどんなものであるかは、前篇に述べたが、農村だと、それでも獨立した家屋と廣い野原が附屬してゐた。然し都會だと農村の靜寂が絶え間ない喧騒に置換えられ、數家族共有の一部屋で我慢しなければならぬ。而もその労働者街の家屋とは徒に人間の群のみが集り、日當りの悪い豚小屋のやうな悪臭を放つ高層ビルディングのトンネル内にあつて、或る英人の如きはその本國の贅澤になれた「ヨークシャー豚なら豚でも入ることを躊躇する」と批評してゐる程である。而もその家賃は、彼等の収入に比して、恐しく高いのである。

かくて都會生活の一切に裏切られた農民は次第に懷郷病に取憑かれ、幾度か汽車に乗らうと駆けつけるのであるが、結局彼等は手足を縛られてどうにもならないのである。シルダールは實に彼等にとつては都會のワナであり、彼や工場街の商店や高利貸などに對する借財が常に彼等を後から追駈けては連れ戻すのである。かくて迷るに迷

られぬ彼等は、棄鉢の氣持で次第に穴倉の中へ定住するやうになる。

彼等が工場から受取る賃銀は成程それを受取る事は事實であるが、實に不思議な方法で消えてなくなる。それは常に足りないやうに思はれる。工場の生産行程には到る所に罰金制度の良が設けられてゐて、極めて封建的な労働組織が彼等の賃銀を二重三重に頭を跳ねるからである。従つて萬一病氣にでもならうものなら——工場及労働者街の不潔さや、労働條件の不合理は極めて高い疾病率を示してゐる——從來より一層耐へ難い立場となることは説明を要しない。嘗ては純心な農民であつた彼等も、これ等の苦痛をまぎらはせるため各種の悪癖を知るやうになり、酒や煙草を覺へるやうになる。然しそれと同時に罷業ストライクとか、「ラル・ファンダ」、即ち赤旗とか言ふ思想的な新語をも知るやうになるのである。

かくて萬一その工場が破産でもしやうものなら——財政的基礎の弱い印度の工場にはこれが非常に多い——早速罷業が開始され、収入の途切れる何週間かゞ過ぎる。途切れた収入は、凡て借金によつて解決するより外はない。そのため工場閉鎖によつて一旦郷里へ歸つた彼等も、今一度町へ戻つて他の工場へ勤めなければならず、かくすることによつて彼等は近代産業の大きな胃袋に呑込まれ、印度社會に於ては滓である所のプロレタリアに消化されて行く。

然しこれを具體的に述べないで抽象論に終ることは常に危険である。これ等の非難すべき工場の中にも労働者の社宅を建築し、工場内に自治制度をしく等各種の共済事業を行つてゐる工場もあることはある。然しこれ等の救済事業は飽く迄も例外に屬し、少なく共印度に於ては國寶物と言へる。フィットレー王室労働委員會も、前記の周旋人即ちシルダールに就て、労働不足の折は労働者募集のため各工場の監督や請負人が遠い農村迄出かけて行く弊害を述べて

る。或る種の産業——特に鑛山業その他季節工場及農園の二三に於ては、今なほかゝる方法が採られてをり、普通の工場に於ては失業者の増加と都會人口膨脹のお蔭で——然し印度の過去三十年間にその都市人口の増加率が僅か一%であつたことは記憶すべきである——一九三一年以降はかうしたシルダールを必要とするに至らなかつたが、同三五年以降の軍擴及今次大戦下の飛躍的産業膨脹は再びシルダールによる労働者募集を必要とするに至つた。

その役割の如何に拘らず、これ等労働周旋人の工場内に占める位置には昔から今迄一度も變化がない。彼等は必要な生産管理を行ひ、一切の技術的智識を供給してゐる。彼等は通常一労働者から昇進し、工場主と労働者間の仲介者としての抜くべからざる地位を獲得してゐるので、若し仕事の欲しい場合には彼に接近しない限りそれを獲る事は出來ない。又仕事の有無、好條件の仕事の割當て、凡てが彼の胸三寸によつて決まるのであつて、又彼等は金を貸し宿舎の斡施もして労働者搾取の手段としてゐる。彼等こそ實に王室労働委員會の云ふ如く「一つの身體の中に恐ろしく多くの機能を備へた男」であつて、正に先進國労働組合の幹部の役割を擔當してゐるとも云へやう。事實労働條件の變更を労働者に傳へ、労働者の不満を工場主に傳へるものも彼等の役目である。

然し教養なくしてかゝる地位を占める人間が、労働者の一身を掌中に納め、その権利行使によつて金銭上の搾取を行ふと言ふ危険なことが「可成り一般に行はれてゐる」と報告されてゐる。勿論、工場主や工場支配人はこのシルダールの跳梁を極力警戒してゐることはるのであるが、結局積極的な防遏手段を積極的に採らないため、効果は餘りない。カウンボール市労働調査委員會の如きは工場主、政府、労働組合三者合同の労働局設置を提議し、一九二四年のボンベイ州政府發行の「一般賃銀調査書」の如きは次の如く述べてゐる。

「労働周旋人は、依然労働者募集の主軸をなしてゐる。……ボンベイ州に於ても目下活動中の工場百七十七の中百三十五とその他の家内工場を除く操棉工場三十七の中十二迄が、それ〴〵使用労働者を労働周旋人、或は周旋人及ムツカアダム(Mukadams)の手を通して雇傭した旨を申告してゐる。ムツカアダムとは、不熟練工或は苦力團の親方を指し、この下にあつて労働周旋人は通常監督の役割を勤める。……一家内工場と七工場は、支配人が全労働者を募集したと述べてゐる……然し労働者にとつて労働周旋人の立派な事務所を経るに非ざれば、確實な就職口を得る事が現實に不可能となつてゐる」

然しこの労働周旋人の現實の問題として、月々労働者の賃銀何パーセントかの頭を跳ねる事は先に述べた通りで、婦人労働者がこれ等男の労働周旋人の監督を受ける場合には、思はず眼を被ふやうな××が起き勝ちであり、而もその就職口を得るためには男より遙かに力の強いことを示さなければならぬと云はれてゐる。印度の労働者に特有な移動性も、その原因の一部はこの労働者周旋人にあると云はれ、その理由としては彼が労働者の異動する度に、新しい労働者を採用する手数料と賄賂の増へる事が擧げられる。

労働者街の住宅が如何に悲惨な状態にあるかは、先にも述べた通りでこれは一般の公認事實である。彼等の郷里たる農村であれば、通路を遮切る屏や垣があつて小さいながらも我家であるが、一旦都會の労働者に身を落せば、彼等の無智に等しい衛生思想と教養の缺如がそれに結付いて、戰慄すべき状態を現出してゐる。家屋の軒と軒とは紙一枚を隔て、接し、後の家とは棟続きで狭い路次に腐つた塵芥や下水の池が出來てゐるのは敢へて珍しくない。共同便所も設備が悪く一部はその路次へ流込んでゐる。家とは徒に名のみでこれ等の集積するビルディング中の極めて風通し

の悪い一室に過ぎない。その部屋の入口は低く過ぎて常に屈まなければ内部へ入れない。又他の家との間に境界線を作らうと思へば、石油の古罐か黄麻袋でもぶら下げない限りその目的を達することが出来ないし、これを實行すれば室内は何も見えなくなると云ふデレンマに陥入るのである。

又ヒンズー社會から相手にされない不可解階級の家などは、文字通り古罐とボロから出来た小屋と云つて好く、その小屋とて高さ三尺を越へない大小屋程度のものである。その小屋へ入れば闇黒の中に漂ふ悪臭がブんと鼻をついて、凡そこの世の世界と思へない風景である。又ジャルガオンの工場労働者街は、一本の下水の兩側に櫛の齒の如く並んだトンネル長屋から成り、雪期には矢張り凄じい水漬りの光景を呈する。而もこの街には二百名以上の子供がゐるが、學校は一つもなく、或る社會教育家などは世界中で最も顔蒼ざめた兒童と述べてゐる。

又印度で一番綺麗な町と云はれるボンベイでは空地が少ないため、チャウル (Chawls) なる一風變つた長屋の集積となつて空へ聳えてゐる。普通六階建のビルディングに相當する高さで、その内部の氣味悪さと設備不完全のため、屋根裏迄登ることは大人にも困難な程である。セシル・マシエンはその著「印度工業」にチャウルの一室を訪問した時のことを書いてゐるが、それによると小さな一室に五家族が住み、部屋の各隅に一家族宛住んでゐる上、残る子供連れの一組は卓子の上で生活し、一種の中二階みたいな形を成してゐたと述べてゐる。その部屋は蛇のやうに曲りくねつた長い廊下に面し、普通の階段はなく、腐りかゝつた繩梯子で下と連絡してゐるのである。又建物之餘り接近して建てられてゐるので、朝でも人の顔が識別出来ない程であり、その言語に絶した陰氣さの中に住む労働者家族は、一生光と空氣に恵れることがないのである。便所その他の衛生設備も勿論ない。市労働者専用のチャウルの一

九三六年度調査によると、調査せられた千百三十八室の中二百二十七室迄三人以上の家族が住み、その人口總數は千五十三人に達してゐた。又その中三十一室には五人以上の子供を含む大家族が住んでゐた。

従つて彼等の親戚が更に就職口を求めて、彼等の家に寄寓する時には、一騒動である。又市の傭員——主として掃除夫は、家賃として男月八アナ (邦貨約六十四錢)、女五アナ (邦貨約四十錢) を支拂へば好いが、市の傭員でない労働者は男二ルビー (邦貨約二圓六十錢)、女一ルビー (邦貨約一圓三十錢) を拂はなければならぬ。事實ボンベイ市人口百三十萬の中七五%迄が一室居住者であり、清潔好きの日本人がこれ等の古いチャウルスを訪問するとすれば恐らく酷い經驗に二度と行きたくなくなるであらう。

華麗なボンベイの「印度の入口」や高級住宅の並ぶマラバー・ヒルからの絶景は、世界でも有数の美景の一つと云はれてゐるが、それ等の美景の背後にかうした悲惨な人々の運命の潛む事には、訪印客の中にも餘り氣附くものがない。事實王室労働調査委員会も、かゝるチャウルは大部分改良の餘地なく、焼却するより外に方法がないとの意見を發表してゐる。

然しこの意見に基いて新しい住宅が或程度完成し、市民の道義心も多少目覺めた事には疑ひがない。ボンベイ・ポート・トラスト會社では、労働者三千名を容れる新式チャウルを建てる事になり、多數の點で改良されたコンクリート建チャウルが四ヶ所設立された。然し無智な労働者はこの新しい家に住む事を拒絶し、半分以上はガラ空の状態となつてゐる。何故彼等が住まないかと云へば、その新住宅の一部に電燈設備のないことや、商店、交番のないことがその理由であり、更に足賃の高くつくことや、これ迄の穴倉に比して家賃の高過ぎることなどが擧げられた。そし

てボンベイ市の夏には街路に眠る市民が數千を以て數へられるのであるが、彼等とて決して家がないのではなく、それはこれ等のチャウルの暑苦しきから屋外へ逃れた勞働者階級の安かに眠る姿に外ならないのである。

此處にカルカッタ市の住宅状態に就て詳細を傳へる資料を持たないことは遺憾であるが、その一部はボンベイのそれよりもつと甚いと言はれてゐる。王室勞働調査委員會は、マドラス市四十五萬の人口中その四分の一に當る十五萬人迄が、僅か二萬五千と云ふ一室だけの家に住んでゐると報告してゐる。又アーメダバッド市では或る程度住宅を新築したと言ふものゝ結局焼石に水で、以前と變らぬ悲惨な状態であり、王室勞働調査委員會は、こゝでもその住宅の九二%迄が一室だけであることを指摘してゐる。

カウンボールの市の勞働調査委員會も、この住宅問題にふれ、同委員會主席たるのS・K・ルドラ教授が同市貧民窟を訪れ、馬や牛の方が遙かに増しな生活をしてゐることを發見した。カウンボールの市の住宅状況に關する一報告が、又キリスト・チャーチ大學の歴史經濟協會からも同じく發表されてゐて、この報告によると前記の驚異的な過剰住民問題とは別に、到底我々の信じ得ない程の不衛生状態を暴露してゐる。

それによると例へば便所のないことを報告し、或る夕刻午後六時排泄の目的で空地の一隅にしがむ人數を一學生に算へさせたら五十人以上もゐると述べてゐる。人間がかかる場所に住むことを考へれば、問題となる我が國や支那の貧民窟の方が遙かにましである事を知るであらう。次第に工場住宅は改良せられ、住宅改良を専門とする建築も印度に相當あるが實績は未だ充分と云へない。かうした勞働者一割の一エーカー當り平均密度は、或る社會學者の調査によると千二百二十九人で、一九三一年のロンドン街の一エーカー當り平均五十九人や、勞働者街平均密度の百五十

二人から見ると實に悲惨で、その點では恐らく世界一ではないかと考へる。

かゝる状態に於て印度勞働者の罹病率が如何に高いかは、容易に想像がつく事である。事實最近迄は酒と阿片が普遍的であり、肺結核と花柳病が無智な彼等の間に恥する必要な病氣とせられてゐたマラリヤと寄生蟲も極めて多く、それ等勞働者の妻は通常故郷に残されるので、都會に於ける男女數の比率は極めて不均衡である。カルカッタ及其その近郊の一九三一年度調査に於ては、男千人に對し女は僅か四百七十五人であり、ボンベイでは五百五十三名、カウンボールでは六百九十八人であつた。この統計は勞働者以外の一般知識階級を含めての數字であるから、勞働者のみの調査に於ては更に甚しい男女の不均衡状態が示される筈である。

このことは特に典型的な早婚が行はれ、家庭生活を尊重する印度に於ては、深刻な社會問題を伴ふことを否定出來ず、農村に於ては宗教的意義によつて比較的嚴格に守られてゐる戒律も破れ勝で、病氣と資淫、更に性に關する犯罪が最近顯著に飛躍してゐるのである。かくて勞働者が歸村すれば、その妻乃至は家族を通じて病氣を振り撒き、農村の健康状態をも最近著しく低めてゐる。又獨身生活を強要される勞働者は自炊生活を餘儀なくせられ、恐らくは前夜の冷い料理を朝早くかき込んで不潔な工場へ駆けつづけるため、工場内の空氣の混濁と併せて、彼等の勞働能率や耐久力を恐ろしく低下せしめてゐる。

勞働階級のみ死亡及疾病統計を得ることは容易でないが、既に述べた如く印度の平均壽命は悲劇的に低いのである。例へばボンベイ市の死亡率は二二%程度であるが、これが勞働者街となるとそれより遙かに高い筈である。一説には勞働者家庭の嬰兒死亡率は四〇%と云ふ高率であると聞かされるが、「ランカシヤと極東」の著者フレダ・ユト

レイはチャウルの死亡率を六〇%であると主張してゐる。子供をうるさがつて無智な彼等がキャラメル代りに阿片を與へるのが、その死亡率を高める最大の原因であると云はれてゐる。職業別罹病率の調査は未だ完成してゐないが、王室委員會では英領各州に於てさへその公衆衛生法が如何に不完全であるかを述べてゐる。事實、筆者の出入した或るビルなどその一階にはボーイや門番が家族と共に屯してゐるのであるが、その中からベスト患者が出た時も、他の連中が生残つた老人と娘を追出した外、先を争つて患者の使用した布團を占領し、英國官憲もそれを平氣で見逃して消毒一つしに來なかつたのである。

一、勞働條件の封建性

然しかうしたことは結局勞働者の能率、従つて又手取り収入を低下せしめてゐることは争はれない。即ち、貧乏がその眞底に反英的熱意を秘める印度人の野心や積極性や希望を根こそぎに破壊し、その結果齎らされる健康は公然と状態の低下が仕事の能率低下を招來すると同時に、収入減をも招來して彼等を貧困へ導くと言ふ循環論法が、印度で行はれてゐるのである。ロカナザンはその著「印度の工業組織論」に於て、印度では仕事の一行程に他の諸國より多數の勞働者を要し、例へば英國ダンデイの黄麻工場に於て一勞働職工の負擔する勞働量は印度に於て二人必要であるとして、その數字的根據を擧げてゐる。

一九二八年度の印度人鑛夫一人宛一ヶ年の採炭量は百三十一トンであつたが、英國に於ては二百五十トン、米國に於いては七百八十トン（一九二六年）であつた事實、王室勞働調査委員會も、製鐵工業に従事する印度人勞働者に就

て「身體はそれ程頑丈でなく、この種勞働を長期間繼續する耐久力を持たない」とも述べ、「彼等は先進工業國家に列せんとする他の如何なる國の勞働者よりも生産能力が劣つてゐる」と語つてゐる。

即ち、被壓迫民衆に對する單なる感情的な正義感からだけでなく、専門的工業上の知識からも勞働條件の改善が要求せられてゐるのである。従つてこの點を理解して始めて、彼等の勞働時間及賃銀問題を論じ得るのであるが、この二つに就ての正確な資料を得ることは現状に於て困難であり、これを概括的に述べることも印度の勞働種目が多岐に亘つてゐるため避けなければならない。又此處に引用するのは一九二九年度の古い數字であるため、その後正確には一九三〇年に始まる世界恐慌の波に印度も捲かれて幾度か賃銀の値下げが行はれたこと、この大戰下に於ては印度の

生活指數が英本國同様飛躍的に高騰してゐること等は、一應頭に置かれなければならない。

印度二大紡績地の一であるボンベイ州に於て一九二九年度の勞働者平均賃銀（一ヶ月二十六日從業）は織工で三十五ルピー乃至六十ルピーであつた。然しこの時シヨラプールの織工は三十五ルピーを僅か超える程度に過ぎなかつた。紡績工の平均賃銀は、二十ルピー乃至二十五ルピー——南印度に於てはそれより少く十五ルピー乃至二十ルピーであつた。女苦力は、八ルピー乃至十ルピー、紡車工と糸捲工は十八乃至二十二ルピーであつた（南印度のマデウラに於ては、一日二アナ、即ち月四圓八十錢を獲てゐた）。又女工監督は、三十乃至三十五ルピーであり、七名の勞働仲介人と職工長は百乃至百二十ルピーの高給を食んでゐた。然しこの場合、マドラス市の委員會が、勞働者の實生活との比較に於て最低賃銀は二十三ルピーでなければならぬと述べてゐるので、より都會のボンベイ市の最低賃銀はこれよりも遙かに高く、少く共三十ルピー前後が必要であつた。

然し一九三四年度のボンベイ賃銀調査委員会の指摘した所によると、詳細な統計數字を發表した後、印度にとつて最も重要な紡績業その他各種の産業に、その賃銀を決定する何等の基準もないことが明かにされてゐる。即ち、印度労働者の賃銀は地域及産業部門の異なるによつて、全く亂雑を極めてゐるのである。又基準賃銀も一般賃銀率の低下や増加に伴つて、隨時變化するのであり、その賃銀率を決定するにも何等普遍的な一定の基準がある譯でもない。従つて賃銀の一齊値下げや恐慌の起る毎、その労働階級に與へる影響も決して同一ではなく、一齊に行はれる賃銀値下げは常に高給者より薄給者により不公平な影響を與へてゐる。又同報告書は次の如くも述べてゐる。

「若し一九三四年十月にボンベイ市の紡績工場に働く熟練工の平均日給を、一九二六年調査の折選ばれた工場の平均賃銀と比較すると、一九二六年七月以降一九三四年十月に至る間の賃銀の一般的値下げは、一六%である事を發見されるのである」

一般に普通工場の労働時間は一日十時間、一週五十四時間、季節工場のそれは一日十一時間、一週六十時間に何れも一九三四年の工場法によつて制限せられてゐる。然し紡績工場は、普通九時間労働であり、一九三九年度には十五萬俵の綿布ストックを擁して一週四十五時間の大操短を行ひ、黄麻工場も又大戦前迄は生産制限の目的で、一週四十四時間労働を實施してゐる。造船業、比較的大規模の機械製造業、多くの鐵道工場は週四十八時間労働であるが、毎日の労働時間は土曜日の労働時間の長短によつて必ずしも一致してゐない。少年工は一週三十時間以上の労働を禁止せられ、鑛夫は地下労働で週六日、一日九時間の労働である。鐵道従業員は一九三一年法によつて繼續して働く場合は一週六十時間、中斷して働く場合は一週八十四時間迄延長することが出来るが、波止場人足に對する労働時間の法律

による制限はない。而も印度の労働者中休息は賃銀の支拂ひを受ける比率の非常に小さいことは、カウンボール市の労働調査委員会も指摘してゐる。

然しこれ等は何れも工場法の規定による使用労働者二十名以上の工場に就ての話で、印度には寧ろこの二十人以下の小工場の方が多い。労働者数の政府調査によると、二十人以上使用の工場は八千九百三十三工場、百六十七萬五百八十六人（一九三六—七年度）であるが、それ以下の工場労働者数は家内工業を含めて三百萬乃至四百萬人と云はれてゐる。かゝる小工場の状態に就ては王室労働調査委員会も、法規のないため建物の設備が悪く、機械にも危険防止の施してないことが普遍的現象であると述べ、殆んど手元の見えない電燈、時にはランプの下で夜業が行はれてゐると指摘してゐる。

かゝる小工場に於ては勿論婦人労働者の妊娠、疾病等に對する何等の保護規定もなく、衛生、洗濯、時には男女別の便所すらない。同調査委員会は作業の性質によつて幼年取締法も廣汎に無視せられ、その空氣が小工場より寧ろ家内工場に著しいことを指摘してゐる。然し例へ動力を使用する近代工場ではないと云へ、七百名以上の大量労働者を使用する作業場は、流石それ程でないと述べてゐるが、獨り雲母工場——印度の東海岸は一年十八萬トン以上を輸出する航空機用雲母の世界的産地である——のみは、全従業員の三〇%に當る八百名以上が十五歳以下の幼年工であると述べ、六歳乃至十歳の頑くない幼年工が、苛酷な雲母切斷の労働に従事してゐると云ふ悲惨な事實を曝露してゐる。

又、バンジャラ州に於ては、八歳以下の幼年工及婦人労働者が、腐敗した空氣の中で羊毛を梳けずる労働に従事

し、中央、ビハール、オリッサ各州のシェラック工場では、屋根の傾いた豚小屋のやうな土間の上で、勞働が行はれてゐる。中央州の公衆保健局長は、シェラック洗滌を専門とする勞働者でさへ「嘔吐を催す」やうな「水桶及下水から漂ふ臭つく悪臭」を取上げ、その勞働者は「穴倉の中にあるこの水中に膝迄つかり乍ら、長時間勞働しなければならぬのである」と述べてゐる。而も、其處では過度の熱氣のため全従業員の八〇%迄が身體を損ふ乾燥室に、十五歳以下の幼年工も勞働してゐるのである。

ビデイス (Bidis) と呼ぶ印度特産の煙草製造も幾多の弊害を伴ひ、これ等は比較的大きな都會の家庭工業として行はれてゐるのであるが、小さな細工場は宛然空気が抜けない箱のやうであり、眞暗な地下室である。調査委員會ではかうした煙草工場で、僅か五歳の子供が一日十時間乃至十二時間の苛酷な勞働に酷使されながら、僅か二アナ (邦貨約十六錢) と云ふ酷い賃銀しか貰はないことを發見して、英本國に於ても問題となつた程である。又、西印度特有の絨氈工場では、少年工の勞働時間に制限がなく、現在月十二萬六千足の軍需註文に忙殺されてゐる皮革業の工場状態も、極めて悪いと云はれてゐる。

印度には八十一萬三千トンの産額と軍擴開始以來年百萬トンを輸出して世界第二と云はれるマンガ、埋藏量三千六百億、年産二千五百萬トンの炭坑が東海岸及北印度に散在してゐる。その中主な炭坑はオリッサ州のゴンドワナ炭坑以下、チョータ・ナグプール、ベンガル州等で、それ等の坑道は未だ露天堀の箇所が多く、炭坑特有の多くの可燃性ガスによる爆發の危険もなく、電燈の下で作業することが可能である。而もなほ或る鑛山に於ては衛生設備の不完全と共に通風設備の缺如が重大な缺陷として擧げられてゐる。鑛夫は仕事の性質上寄生蟲に罹り易く、アサンソール縣の

地下鑛夫は、その七三%迄が寄生蟲の被害を蒙つてゐることが發表されてゐる。然し、これ等の鑛夫には地上勞働者が相當るため、その疾病状態はつきりしない。

鑛山で興味のあるのは、勞働者の募集方法である。炭鑛地帯は主としてトラヴィタ、その他の民族居住地に接してゐるので、その地方から大量に勞働力が供給せられてゐる。彼等は通常鑛山の附近に家を構へ、勞働の餘暇に田畑を耕作して自給生活を營んでゐる。その他の勞働者は農村から出稼ぎにきて又農村へ歸つて行き、大部分は寧ろ農業が専門である。然し近代技術の輸入によつて、これ等原始民族の勞働者の使用が不可能となつた。かくて鑛夫は最近監督を募集掛りとして先進印度人の間から集められるやうになつたが、その勞働者の勞働時間は極めて不規則である。

又鑛夫間の惡習慣である酒と阿片も要するに彼等の勞働時間が長過ぎて不規則なため、これを紛らす止むを得ない方法であるとされてゐる。鑛山に働く婦人勞働者は一九二九年に禁止せられ、一九三九年七月にはすつかり姿を消し、この點我國より一歩進んでゐる。然し男の鑛夫には無智な人間が多いだけに今後啓發される危険性がある譯であるが、少く共現在では勞働者組合の手も彼等の間に殆んど及んでゐず、同様のことは農園に就ても云へる。

此處では隔地から連れて來る農民と附近の原始民族を勞働豫備軍としてゐるが、通常農場は僻地にあるため個々の勞働條件は非常に異つてゐる。勞働者の募集は通常我國の年期奉公に似た一定期間の勞働契約を行ふのであるが、それに附屬する契約規則は屢々變更せられ、アッサム州の如きは一九二六年以來契約期間中に逃亡すれば犯罪として處罰する法律が制定せられてゐる。然し農園勞働者は同時に又猫の額程ではあるが、兎も角も土地を貰ふので、勞働者であると共に農民であるとも云へる。

然し此ではカムガニ(Kampani)、即ち監督が暴力を以て勞働者を脅かし、勞働斡旋人特有の詐欺的行爲も行れて、宛然監獄部屋の觀があると言はれる。農場主に對する政府側の干渉は殆んど行はれないので、此處は全く治外法權の土地であり、従つて凡ゆる封建的暴力が使用勞働者に對して發揮されるのである。而も、茶生産額の最も大きいアッサム州の農園勞働者が、印度で最も遠くから連れて來られて逃亡するにも出來得ない不遇な地位にある勞働者であることを記憶しなければならぬ。然し、特殊な特に恩恵を施された場合は一定年限の約束で募集され、それが済めば歸國を許されるのであるが、この大戦下、特に印度茶の確保が英米に於て問題となつてゐるやうな時は全く無視せられてゐる。賃銀は極めて低廉であるが、これは一種の逃亡防遏手段でもあり、この賃銀に加へて一定の金と土地を與へるのも、要するに勞働者募集の困難な印度に於て彼等を定住せしめんとする一策に過ぎない。従つて又彼等が附近の土地を開拓すれば、彼等のものとなるため、この封建的農場勞働者の障害は如何なる近代的な勞働組合指導者も突破することが出來ないと云はれてゐる。

これ等の皮相な印度勞働者の觀察も、それだけで既に職業の如何を問はず、等しく悲惨な状態にある事の委細をつくしてゐると云へやう。M・N・ロイが印度にプロレタリアなしと言ふ時には些か誇張に走り過ぎた憾みはあるが、兎に角印度勞働者の半農性は、現在印度政府の企圖する印度の工業化途上にも、又獨立運動の前途にも重大な障害となつてゐる問題である。事實、印度の勞働者中には、一家の中兄弟が順番に工場へ働きに行き、残る兄弟が又交代に土地を耕すと云つた状態が到る所に見られるのである。

英國側の期待するやうに例へ彼等の間に教育が普及しても、結局それは劣悪な勞働條件に對する彼等の批評眼を啓

發するだけの事である。而もその條件自體を改善することが現在困難であるから、結局彼等の企圖とは全く反對の方向に向ふ事となるであらう。そしてこの事を勞働者側から云へば、その劣悪な條件を改善する最後の手段として、工場法や勞働組合の問題が取上げられてくるのである。

三、工場法の改正と勞働運動の變遷

我々は既に、農民達が如何に都會へ誘惑されて行き、印度勞働者の半農性を強調する結果となるか、そして又少く共その一部は彼等に與へられる貧弱な収入増加の目的で都會に止まり、半常住的な都會生活者となるかを述べた。勿論これは何れの國にも見られる現象には違ひないが特に印度に於て顯著であり、これ等に對しても、英國政府は十九世紀末迄何等の干渉も行はなかつた事が注目せられる。事實、工場主も當時は自由な狡猾な方法によつて、必要とするだけの勞働者を集めることが出來た。勞働時間も支那やアフリカに於けると同様の長さであり、賃銀もそれに劣らず低廉であつた。年齢及勞働者に對する傷害保険等の取締り規則もなかつた。然し、遂に最初の工場法が一八八一年に發布せられたのである。それは發布するには餘りにも遅過ぎた工場法であるが、兎も角も幼年工の使用制限と機械に對する危険防止の設備を規定したが、結局これは勞働問題に無智な地方官吏に工場視察の苛酷な重荷を背負はせる結果となり、逆の効果を生んだ。

かくて最後には何等の効果もない取締り規則となり、一八八二年には當時僅か十五歳の一少年が、十四時間の徹夜勞働の後、機械のベルトに捲込まれて死んだ事件が起きた。一英人がこのため勞働一般の状態を調査することにな

り、その後彼の提出した報告書中には、印度の婦人労働者が一日二十三時間の長期労働に従事してゐることを述べ、彼女達の賃銀は一日十六時間労働で三アナ乃至四アナ（邦貨約二十四錢乃至三十二錢）であることを暴露した。そのためこれ迄は工場取締規則に反対を唱へてゐたボンベイ市の紡績労働者大会も、遂にその改正に賛成するに至つた。然しこの大会の席上彼等の提出した要求の一つである「傷害補償」が、その後四、五十年も経つてから始めて認められたことは意味慎重である。かくて工場の悲惨な状態に關する記録書は毎年英本國へ送られて工場監督局長官の手許に限りなく悲話を提出することとなり。工場の大部分は平時からも戦時状態で日曜も休まず、夜明けから日没迄働いた。條件は悪いのが普通であつた。

一八九一年に第二工場法が發布せられた。そして、全印八十ヶ所に開かれた大衆的會合を除いて、印度の労働者が二十世紀の初頭迄何ら抗議らしい聲を擧げなかつた事は注目される。然し、これは決して工場法の發布により彼等が満足すべき状態に達したからではなく、彼等が不正を社會に訴へやうにもその方法がなく、罷業を武器とすることも未だ知らなかつたからに外ならない。即ち、當時は不平があつても労働者が職場を抛棄すれば、隨時パタン族その他の罷業破り専門の労働者を連れて來る権力が工場主に保障されてゐたのである。従つて、資本階級にとり當時の印度は、正に地上の樂園の觀があつた。

然し、その後動力が工場へ移入せられ、ボンベイ州にベストが猖獗（一八八六年）した結果、労働力の大不足を來し労働時間の大延長を招來した。事實、或る工場では十五時間乃至二十時間と云ふ長時間の労働を要求し、ボンベイ市の角には労働者の糶市が出來た程であると、信ぜられぬやうな現象が記録せられてゐる。そのベストは同時に又農

業労働者層の減少をも來したため、彼等の賃銀は引上げられた。そのため彼等も遠い都會へ出て働く必要がこれ迄よりもなくなり、産業豫備軍の貯水池と見られた農村と都市の連絡は一應絶たれた。

かくて都會の工場労働者は、これ迄よりも孤立した自己を感じるやうになり、階級意識を深化するやうになつた。彼等は最早や過去の労働條件に盲従しやうとなくなつた。組織的な議論が次第に行はれるやうになり、工場主の方でも恐怖を感じて一齊に賃銀の引上げを斷行した。

一八九一年に至る間には、何等の工場法の改正も行はれなかつた。事實、當時は印度産業の勃興期に當り、労働力の不足を來したため、工場主側でも彼等の労働條件を改良することに却つて利益を感じてゐたのである。然し、この労働不足に原因して、労働時間は依然長かつたため、一九〇五年九月二十四日のボンベイ労働者大会に於ては一日十二時間の労働が要求せられ、その影響によつて、労働時間と労働條件を調査するための一委員會が任命せられ、更に一九〇七年には正式の労働調査委員會も任命せられた。この結果相當の反対はあつたが、結局一九一一年に第三次工場法が公布せられた。それは工場主側から「革命的で、危険で、不必要である」と反対されたものである。

第一次歐洲大戰は、既にその緒についてゐた印度産業を更に發展せしめる結果となつた。印度の海運業を獨占する英國船が軍隊及資材輸送の本國命令に接して（註一）出動したため輸入制限も行はれた。而も世界各國が、原料資材を欲してそれを印度に求めたため、英國資本主義の最も恐れる印度民族資本の猛烈な膨脹を來したのである。かくて雨後の筍の如く工場は發生し、労働力の需要も未曾有の程度に達した。このため労働時間の長い過去の生活へ復歸せんとする傾向もあつた。然し或る程度の意識水準に達してゐた労働者は、最早や盲目ではなかつた。労働力の不足に

乗じて彼等は賃銀の引上げを要求し、軍需景氣に需ふ各工場にも又この要求に應じ得る能力があつた。然し、その値上げは當時の物價騰貴に併行するに至らなかつたので、労働者はなほ生活に窮し、その多くは自然發生的であつたが兎も角罷業が續出した。

然しそれ等罷業の産業上に及ぼす影響は大きく、機械を止められることは當時の工場主にとって致命的な損失を意味してゐたので、罷業をやれば勝つと云ふ有様であつた。工場主達は労働者が戦後も同じ條件の繼續を要求することを恐れ、單に一九一四年の賃銀率——それは當時なほ多くの地方で固執されてゐた——よりも多少高い給與額と云ふ點を解決の標準とした。このため一九一六年度の賃銀比率が戦前より高いことは事實であつたが、生活指數を比較の對象とする場合、彼等の純正賃銀は戦前より低いこともあつた。

(註一) この第一次大戦當時、印度は三億ポンドの軍事費、百〇七萬の印度兵の外に本國の食糧確保要求に對しても小麦五百萬トン、四千萬ルピーその他の奉仕を行つてゐる。

一九一八年の流行性感冒は、印度に於て實に八百萬以上の死亡者を出した。然し物價は豫期に反して暴騰を續け、前古未會有の高値を示したのである。資本家階級はこのため素晴らしい利潤を擧げ、ベンガル州の黄麻工場の中十三工場迄が二十割以上の配當を行ひ、一九一八年にはその率をも凌駕した。このため到る所の空地には、工場建築が行はれたが、流行性感冒に基く労働力の不足は更に賃銀引上げを實現したものの、然し結局賃銀は常に暴騰する物價指數に遅れてゐたため、純正賃銀は恐ろしく安くなり、一九一九年には遂に印度始つて以來の大半議が勃發した。

これ迄の労働者はその半農性に起因して極めて柔順であり、若し耐へ得られない状態に立到れば單に郷里へ歸るだけであつた。然しこの時の高物價は到底郷里へ歸つても生活を保證されさうもなかつたので、言はゞ背水の陣を布いたのである。彼等は未だ労働組合を知らなかつたが、組織的な行動でさへあれば、それによつて何物かを得ることが出来ること云ふことを知り始めたのである。罷業委員会が組織され、罷業に勝つことが出来た。これ等の委員会は、やがて賃銀の値上げと労働時間の短縮を主眼とする労働組合に組織されて行つた。

戦時中に發達した軍需工場の戦後に於ける解散や閉鎖は、老大な産業豫備軍を印度産業界に齊らし、山積する國內ストック品のため全印度の生産量も除々に低下し始めた。失業者は増大し、工場主達はこの苦境を打開するため、これ迄は極力拒んでゐた労働時間の短縮を今度は喜んで實行した。一九二二年ボンベイ州政府は労働局を設立し、一九二二年には工場法も改正せられた。一九二四年に至り、不況の影響は眞實深刻に印度にも感じられ始めた。一九二三年アーメダバード工場主達は印度最初の組織的な資本攻勢として賃銀の一斉引下げを斷行し、同市始つて以來の罷業が勃發した。それは二ヶ月續き四萬五千人の労働者が参加した。一九二四年ボンベイの工場主達は、一九一八年以來毎年支給してゐたボーナスの廢止を實行した。そのため此處でも労働者の罷業が起き前後三ヶ月續いた。彼等は翌年も更に罷業を行ひ、當時の賃銀維持に成功した。

一九二六年政府は労働組合法を公布し、全組合を登録せしめ、會計報告書を提出せしめることとした。この組合法は一九二八年に修正せられた。労働組合はこれ迄事毎に彈壓を受け、起訴せられてゐたが、この組合法發布によつて始めてその存在を認識せられたのである。然し、それを期として印度の産業界は、不況のドン底におちた。一九二八年には罷業の波が高まり、全印各線に亘る鐵道従業員、製鐵労働者、黄麻及紡績労働者がそれに参加した。

印度の労働者が、これ迄に知らなかつた果敢さを示したのは、左翼の勢力が増大し始めた一九二九年に於てである。一九二八年の「産業合理化」を行はんとする工場主の決議は、ボンベイ市に於ける罷業となり、それがギルニイ・カムガル (Girni Kamgar Union) と呼ばれる××組合の結成となつた。その罷業は文字通り六ヶ月間続き、ファウセツト委員会の任命となつて合理化問題の調査を行ふことになつた。この闘争中に、組合は六萬五千人の會員を獲得した。政府はこれに非常に驚愕し、労働争議法は同情罷業並に「政治に強制せんと企圖する」罷業を有罪なりと宣言した。それは又一組合から他の組合への資金の融通を禁じ、十四日間の豫告なしに公共事業の従業員が仕事を抛棄することを禁止した。

一九二八年發布せられた保安命令は、海外から輸入される資金を没收し、好ましからざる英國人を追放する權利を政府に與へた。その命令は立法議會に於て二回否決されたが、最後に印度太守の權限に於て公布されたのである。その論議の進行中に著名な左翼分子が檢舉せられ、その中三十一名は「英國の印度支配を轉覆せんとする陰謀」の名の下に起訴せられた。——その中には英國人もゐた——彼等は前後四ヶ年ミラツト刑務所に拘禁せられ、遂に一名は獄死した。又二十七名は無期流刑或は懲役三年以上の判決を受け、三名は無罪となつた。事件は更に被告側から控訴せられ、その結果判決は前よりも軽減され、更に一部は釋放せられた。

その事件が遍く社會に知れ渡るや、各國労働者の憤慨の的となり、被告達は法廷に於て彼等の運動を長々と説明する戦術を採つた。その陳述書は印度青年に深い印象を與へ、××主義の聖典と持てはやされた。ファウセツト委員會はその報告書に於て労働者の要求を考慮し、労働者の不利になるやう現在の條件を變更すべきではないことや、質銀率は勞

働者代表との協議の上決定すべきであり、その際犠牲者を出してはならないことなどを述べた。

この時代の罷業續出には當局でも取締りに窮し、警官の發砲事件が屢々起きた。争議指導者は殆んど全部逮捕せられたがボンベイ市チョツパティ海岸に於けるメーデーに十萬人からの労働者が集つた。ボンベイの紡績及製油工場の罷業は、ボンベイ始つて以來の社會的騒亂となつた。運動は次第に政治問題へ發展する傾向を示したが、要するにこの道程も過去數百年間に鬱積せられた不平の爆發に外ならなかつたのである。

政府は王室調査委員會の任命によつて、運動の發展に備へやうと企てた。その調査委員會の主席は故T・H・フィツトレイであつたが、それが全委員會を擧げて單なる政府機關であると云ふ理由により、大多數のボイコットを受け一九二九年には更に罷業が起きたが、その年の終りにはジャワハルラル・ネールの主宰下に労働組合會議(T・U・O)の第十回大會がナグプールに開かれ、この英人のみからなる調査委員會をボイコットし、帝國主義に反對する聯盟に加入する決議を通過せしめた。この労働組合會議は元來第一次歐洲大戰後の世界的民主主義風潮に乗じて起きたもので、一九二〇年の國際労働會議へ印度代表派遣の必要から、印度の中心的産業部門たる鐵道、郵便、海員、アーメダバッドの紡績組合を網羅して結成されたものである。そして一九二四年初頭には既に百五十の加入組合と、五十萬人組合員を擁する大労働團體であつた。

然しこの反帝決議は決して全労働者の要求でなかつた。それはボンベイ争議の勝利に氣を好くしたギルニイ・カムガルとG・I・P鐵道組合所屬の共産黨員が、××主義の世界的風潮に乗じて組合會議の執行委員會を占領した結果に外ならなかつた。従つてN・M・ジョシイやその指導下にあるシヴァ・ラオ、V・V・ギニイ等の温健派は、會議か

ら脱退して民族聯盟を組織した。然し又残る會議派も、一九三一年のカルカッタに開かれた第十一回大會に於て更に分裂し、S・V・デシユバンヤやB・ナラウデイズ等の極左翼分子は全印赤色労働組合會議を組織した。一九三〇年から一九三四年に至る間は、一九三二年のG・I・P鐵道の火罷業を無視することは出来ないが、一般にやゝ労働運動の低調にあつた時代である。機會主義的な空氣が支配的となり、各地に組合の分裂が起きたため、運動は更に退潮を辿ることとなり、これに乗ずる政府の彈壓によつて滿身創痕となつた。このため再び合流運動が起き、全印鐵道従業員組合の斡旋で、一九三三年非共産××組合と共産××組合が合流し、一九三五年には組合會議の左右兩派が妥協し、その母體が印度の労働階級唯一の代表たるべき決議が行はれた。同年組合會議と民族聯盟の聯合委員會が設けられ、共同闘争の可能性を研究することになつた。組合會議は又國民會議派中の社會主義黨とも、共同闘争の協定を行ふに至つた。

一九三七年末、兩派の勢力は會議派九十八組合四萬六千人、民族聯盟六十二組合八萬三千人と云はれた。一九三八年春、組合會議派と民族聯盟は最後の特別合同大會をナグプールに開き、兩派の共同闘争機關として新労働組合會議を結成した。このため組合會議派では讓歩を行ひ、組合旗たる赤旗からハンマーと鎌の紋章を捨て、この新會議主義部も主として聯盟側に譲り、總裁にS・O・パネルジー、副總裁にムフタブ・アリ、ジャムナダス・メータ、ムクンドラル・シルカールの三名を選んだがこのシルカールのみが會議派出身であつた。かくて兩派は一九三九年末迄にこの新會議へ合流する筈であつたが、大戦のため又延期され、一九四一年度に於て實現することとなつてゐる。

ここ數年間、國民會議派と労働者の中に密接な共同動作がとられてゐることは疑ふ餘地がない。それは主としてネールの努力によるもので、彼は一九三六年のラックノー大會に於て民族戦線の目的を強調し、労働及農民組合の代表を招致して、印度獨立の大旗幟の下に共同歩調をとることを承諾せしめたからである。我々は既に一九三三年に遡る期間に於て、賃銀の値下げが廣汎に行はれたことを知つてゐる。一九三四年にボンベイ労働局は賃銀に関する理解ある調査を行ひ、労働争議調停法によつてボンベイ市に一労働官と主席調停官が任命したが、温健派組合の指導者シヴァ・ラオはその著書に於て、その調停法が紙上プランとしては立派だが、餘り規則が複雑なので組合が労働者に満足に行くやう説明するには數週間かかるであらうとそれに含まれる官僚性を非難してゐる。一九三四年にフィットレイ調査團の報告の一部に従つて工場法も改正せられ、一九三五年以降の軍擴時代を迎へて政府の労働争議に對する干渉は次第に苛酷となつてきた。

ガンデイの指導するアーメダバード紡績労働者協會(Major Mahajan)は、勞資協調を専門として未だ嘗て會議や民族聯盟と歩調を共にしたことなく、右翼を中心として一九三七年に出現した國民會議州派内閣の労働政策も又、勞資協調から一步も出なかつた。そのため會議派や聯盟に屬する左翼分子はマジヨール・マハジャンを階級合作組合と呼んでゐるが、その組合は労働者の實質的な利益の獲得と、多方面に亘る救済計畫の發達を要求してゐるのである。嘗つて或る人がネールに紡績労働者協會とは「會社御用の組合」を意味してゐるのかどうかを質問すると、彼はさうした烙印を押すことは正しくなく、兎も角それが三萬人以上の組合員を有する印度最大の組合であることは尊重すべきだと答へてゐる。

マジヨール・マハジャンの組合機構は民主主義を標榜し、百名の労働者より選ばれた代表者によつて會議を構成し

その會議から執行委員會が選ばれてゐる。ネールはその指導者たるグルザアリラル・ナンダ程勞働者の本質を知つてゐる人間はゐないと述べてゐるが、彼のボンベイ大會に提議した新法案は激論の對象となつた。それは調停者の決定を工場主に受諾せしめ得ない場合でも、罷業を開始する迄に少く共四ヶ月の猶豫機關を置かうと主張するもので飽く迄も獨立なる政治目標のために、階級對立の假面を被る經濟闘争の一切を妥協によつて解決せんとしたのである。

ネールは、これ等の事情を擧げて印度の勞働組合は未だその搖籃期を出ず、力も非常に弱く、その多くは單なる罷業委員會と何等異なる所がないと述べてゐる。又ボンベイの勞働者は非常に戰闘的ではあるが、彼等の指導者が涯しない理論闘争に浮身を賣してゐるためか、組織的には非常に弱いとも述べてゐる。従つて現状に於て階級闘争を信んずる人々と階級合作を信んずる人々が共同戦線を張る可能性は極めて薄く、これが印度勞働運動の致命傷と見られてゐる。

然し主として前者の立場をとる國民會議派は、兎も角も世界的な政治團體としてその態度の如何に拘らず彼等の信頼も深く、同派が一九三七年度に勞働委員會を設立した時は非常な歓迎を受け、同年の自治州第一回總選舉に於ける國民會議派の選舉宣言書も、次のやうに述べてゐる。

「工業勞働者に關して、國民會議派の政策は彼等のために最低賃銀、勞働時間、勞働條件……雇傭主と勞働者間の紛争解決のための適當な機關、老年、疾病、失業による經濟的打撃の救済、彼等の利益を擁護するための罷業權を獲得せんとするものである」

この政策は、目的の明瞭でない點もあつたが兎も角も政治團體の掲げる最初の勞働政策として、勞働者達から萬雷

の拍手を以て迎へられ、その政策の實現が緊張裡に待たれた。

一九三七年二月運用委員會は、次の如き特殊な要求に承認を與へ、所屬會員に「八時間勞働、生活賃銀の制定、失業救済」の諸項貫徹のため活動を開始するやう指令を發した。會議派の委員會結成後、ラジエンドラ・ブラサド（一九三九年度議長）は次の如く語つた。

「國民會議派が未だ充分權力を掌握せぬ中は、改良主義的方向が採られなければならない。……その權力掌握に先立つ急進的計畫の開始は危険である。それは階級闘争に導き、その階級闘争は民族運動を一つ以上の道に分裂せしむるを以て有害である」

この聲明書を以て嘗つての約束との袂別であり、現在の階級關係に於ける傳統的な軋轢を理解する事の失敗と見る者もゐた。

然しこの會議派の消極態度にも拘らず當時の罷業の波は、次第に高まつてゐた。カウンボールには勞働者四萬人の總罷業が起き、ゼネ・ストなるスローガンが全印の各工業都市に於て叫ばれた。當時のボンベイ州の國民會議派政府は「彼等の自由になる凡ゆる手段を盡して」同派計畫の實行を盟ひ、そのための勞働政策も發表したが、何等具體的な行動を採るに至らず、單に調査委員會を任命するに止つた。

然し又一方國民會議派の運用委員會勞働分會でもこれに先立つ一九三七年九月にガンデイの居村ワルダに會合を開き、勞働政策の正式發表を緊急必要とする旨を強調した。同十月この分會と會議派選出の閣僚及院内勞働書記局の合同會議がカルカッタに開かれ、同派活動綱領として次の諸項を決定し、「翌年可急的に行政的、立法的行動」を採る

ことを要求した。その諸項とは、次の如きものであつた。

- 一、統計の蒐集
- 二、不正規の建築物及季節工場に於ける次第に強化される強制労働への工場法適用
- 三、出産に對し八週間を下らざる期間の休養
- 四、組織工場に於ける熟練工賃銀の調査
- 五、労働者の交換
- 六、退職手当
- 七、最低賃銀の決定機關の設置
- 八、争議調停機關の設置
- 九、労働者住宅の改良
- 一〇、負債の減少
- 一一、休日の手当支給
- 一二、雇傭保険
- 一三、労働者の待遇に關係しての政府の産業獎勵

その他農奴的狀態にある社會の解放、土地を所有せぬ労働者に對する季節的失業期間の救済、礦夫及農園労働者狀態の調査、床掃除人の待遇改善、労働者教育の簡易化等

農民組合と全印労働組合會議の代表者は、これに出席するやう招待を受けた。組合會議派はこの會議の結果に失望したとは言へ、始めて國民會議派によつて採上げられた労働者の要求は十萬を超える労働者大會の承認を獲たのである。然し約束は實行に移されてこそ始めて價値を生ずるのである。その約束を如何に履行するか、同派の労働問題に對する理解力が批判されるのである。ガンディは彼の機關紙「ハリジヤン」に次の如く發表した。

「政策樹立は會議派のために行ふのであつて、各個人或は各團體に脅喝或は権力の示威によつて命令せんがためではない」

中央立法議會内の同派院内總理たるブラバイ・デサイも又その演説中に「我々は資本と労働の間を和解せしむべく、あらゆる努力を行はなければならない」と述べた。

労働組合の指導者達は、國民會議派に迄階級闘争を強ひる意志はないが、たゞ彼等に民主主義的運動の推進に遺憾なきを期せられたいと忠告した。

會議派所屬の州政府が二つの方向——即ちそれが彼等の利益を脅かすと言ふ理由で、その約束履行を妨害せんとする工場主の立場と救済を求める労働者の立場によつて——に牽制せられるのは、その州政府を構成する同派右翼とアームダバッドの紡績業の關係を考へれば無理もないことであつたが、同時にそれは又ネール以下の左翼からも猛烈な攻撃をうけて、同派の實権はやがて彼等に移る前提でもあつた。事實、當時のボンベイ州政府は、然る可き調査を無視して賃銀の引下げを斷行せぬ約束を記録書に残したが、労働組合の指導者は寧ろ問題の中心が、好況期に際しての引下げ賃銀の復活とその賃銀の引上げでなければならぬと政府方針を攻撃した。選挙宣言書の「生活賃銀」と云ふ

言葉は、その記録書に於て「最低賃銀」と云ふ言葉に置代へられ、同會議は單に「賃銀制定機關」と云ふ言葉を使用してゐる。最低賃銀であれば労働者の家庭の平均豫算額から算出されなければならないのであり、工場主達は「競争」とか、「異なる生産費」とかの名目の下に場所及仕事の性質が異れば、その最低賃銀も従つて異ならなければならないと強調する恐れがあるのである。

従つて労働組合の指導者達は、工場主が最低賃銀の立法化と如何なる犠牲を拂つても産業平和を要求することを攻撃した。事實、これ等も工場主達が突發的罷業を恐れるの餘り、好況期に於ても全生産機構の完全な運行を確保せんとする、その苦肉の策に外ならないのであつた。又「爭議調停機關」は、工場閉鎖の瀬戸際に立つ工場主と罷業の前夜に立つ労働者が、行動を起すに先立つて調停機關の決定に従はしめなければならないと言ふ意味を持つため、一種の強權の發動による強制調停となる場合も多いのである。勿論、その調停が労働者の罷業權を阻害しないと言ふ事は、印度に於ても労働者に保障せられてゐる。然しこの機關の成立は、少く共無警告の罷業を禁止するのである。處が印度の労働組合は、必ずしも英米の有力な組合の如く直接爭議に介入し得るとは限つてゐないので、無警告の罷業こそ取りも直さず工場主に運動の指導者誠首の餘裕を與へず、疾風迅雷的に勝利を納める効果的な方法でもある。然し工場主の立場からは、かゝる罷業こそ些細なことを理由に開始せられ、産業に與へる害も大なりと主張せられた。ボンベイとカウンボールには、二つの労働調査委員会があつて、それら報告書を發表してゐる。兩者共賃銀の引上げを擁護し、カウンボール報告書は、工場主側から組合側の影響を受け過ぎてゐると非難せられた。それ等は又休日手當の支給、労働局の設置、改組後の組合承認をも主張した。

一九三八年のカウンボール大爭議に際して、組合左翼は國民會議派を以て組織する州政府の行動を非難した。實際その時警官の發砲行爲が盛んに繰返され、警察法第四十四條が彼等に適用されたからである。ボンベイ及シヨラブールに於ても、労働者の示威運動に警察權が發動せられ、州政府ではこれ等を辯解するため罷業側に暴力行爲があつたとか、前政府治下の彈壓はもつと甚かつたと述べた。従つて改良主義を一步も出ない國民會議派内閣が罷業の起る毎に、次第に彼等から信用せられなくなつたのは止むを得なかつた。然し要するにこれ等の罷業も今回の大戦前奏曲として行はれた老大な英本國の軍備擴張案とそれに基く植民地生産機構の擴充と、それに伴ふ物價及利潤の騰貴による世界的現象の一環として起きたものである。

そしてこのカウンボール總罷業の折も、英國側に立つ回教聯盟は「赤」が會議派内閣の手先になつたと、二重乃至三重の非難を行ふことによつて資本階級への奉仕を行つたが、その實組合指導者の逮捕せられた時、その抗議デモの指揮に當つたのは決して共産主義者でなくて、非常に尊敬せられてゐた同市會議派議長のパンディット・バルクリシナ・シャルマであつた。

彼は社會主義黨にも屬してゐない最も温健な右翼代表者である。又この軍備競争の最後を飾るゼネ・ストは、カウンボール市調査委員会の報告書が完成する迄靜肅を保つやうにとの組合決議に基いて行動し、その報告書完成後工場主協會が政府の調停案を拒絶したことを知つて、始めて火蓋を切つた（一九三八年五月二十九日）のである。又その罷業は前後一ヶ年續いて労働者の勝利に終り、その間、會議派の突撃隊と並んで、婦人や子供を含む突撃隊三千名、市民同情者團二萬五千名も参加し、これに居耐らなくなつた回教聯盟でも最後には資本階級への奉仕的役割を抛棄し

て、一役を買ざるを得なかつた事が特記せられてゐる。

ネールは、同年のラックナウ大會に於ける議長就任演説に於て次の如く述べた。「國民會議派は常に、民衆の意志を強化すべき法令の設定に重點を置いて來た、このためには議會の外に於てもその活動を實行して來た」と。然しその後自らが統治者となつたために消極化した會議派州政府は、自己の政策遂行上議會外の活動は妨害になると抗議し、勞働者に組織を持つ事は許すが闘争を開始せぬやう懇願した。これは全くネールその他の努力にも拘はらず、右翼的性格を本質とする同派の正體を暴露したものであり、この空氣に乗じてガンデイも又彼の機關紙ハリジャンの「暴風警報」なる標題の記事に於て、「不秩序の力」と言ふ事に言及し、會議派の「清黨工作」を要求した。然し流石にガンデイは會議派政府の暴力による勞働者壓迫には反對し、暴力を用ひずして平和維持が不可能ならば即刻辭職すべしとも述べた。

「國民會議派によつて正直なる努力が続けられても、不秩序の力を警官及軍隊の協力なくして支配下に置き得ないとすれば、私の意見としては、官途にある事が一切の力と意義を失ふのであるから、閣僚達が早く身を引けば引く程會議派及完全な獨立を獲ち得んとする闘争のためになるであらう」

然し彼は又勞働者への不信、即ち彼等の社會的將來性に就ての「誇張せられた期待」を否定したが、その後間もなくこのガンデイの主張を實現すべくあるガンデイ・セヴァ・サング (Gandhi Seva Sangh) がワルダに會合を開き、「ガンデイ・セヴァ・サングの保護の下に、組織的方法によつて工業勞働者のために盡す事が必要である」と議決し、その基金及勞働者の訓練を要求した。然し階級闘争を標榜する組合會議派に對抗する目的で、ガンデイ一派の勞

資協調主義の勞働組合をつくらんとする政策は、それよりも先一九三八年初頭のビハール州に開れたガンデイ・セヴァ・サング大會の演説に於てサルダー・バテルにより宣言せられた。ガンデイ自身は印度に於ける勞働組合運動のイデオロギーが嫌ひで、それを外國からの輸入品と見做してゐる。ネールは、その前年九月に次のやうに發表してゐる。

「勞働者及其の指導者は、會議派選出の閣僚が彼等の友人で、凡ゆる方法によつて協力せんとしてゐる事を、好く知つてゐる。彼等の力の及ばぬ事情が、今日彼等が欲する所迄進む事を妨げるかも知れない。然しその歴史上始めて勞働者の運動が、六つの州に於て州政府と友誼的關係に立ち、その缺點の或るものを矯正し、その力と組織を發展せしめる機會を得てゐる。彼等が彼等を當惑せしめ、彼等との協力を拋棄すれば自らの進路を損ふものであらう」

更にカウンボールの總罷業に際して、國民會議派と勞働者の間に眞實共同戦線が實現した時、バイオニーヤ紙は聯合州政府にその中の危険な革命分子の檢舉を主張し、アラハバッドのリーダー紙を始め自由主義者の一派は國民會議派にソ聯の同情を持つ革命的分子との提携に反對せよと警告した。

四、大戦下の勞働問題

然し事態は今や一變した。歐洲大戦と言ふ國際情勢の急變に伴ふ激浪が、第一次歐洲大戦と同様再び印度をもその中に捲込み、印度の大戦参加問題を繞つて、一昨年十月國民會議派内閣の一斉辭職（中産階級の項参照）となつたからである。この大戦初期に於て印度民族資本家の態度も、國民會議派のそれと全く一致して、極めて反英的であつ

た。事實、歐洲市場の閉塞による綿布、皮革、茶、植物油等の龐大な國內ストックを抱へた民族資本家の損害は、大戰勃發以來僅か八ヶ月で三億ルビーと言はれたし、その被害は印度の中心的産業である紡績に於て特に甚かつたのである。何故なら印度の紡績業は一九三九年四月一日の英印新協定によつて、同年度の綿布ストック五億ヤードに加へてランカシヤ製品三億五千萬ヤードを同年末迄に買はねばならなくなつたからである。而も同八月一日の英國側による外綿輸入税(註一)の引上げ(註二)は結局、ランカシヤ製品に對抗する印度紡績の高番手品製造を不可能ならしめ、更に勞賃の政府干渉による値上げと中央州政府の賦課税、州政府の賣上税實施によつて、支那事變以來印度紡績業の有してゐた日本品に對する抵抗力は忽ち失はれ、三八年度の輸出綿布二億四千萬ヤードは一舉三九年度の一億六千八百萬ヤードへ轉落し、戰前既にその損害はアーメダバッド八百萬ルビー、ボンベイ一千萬ルビー、合計千八百萬ルビーと見られて、不況のドン底(註三)にあつたからである。

(註一) 印度紡績業に於て三十番手以上の高級品産額は全産額の僅か四%であるが、これは直接ランカシヤ製品に對抗するものであり、この製造のためには従來、七〇萬俵前後のエジプト、スーダン、ウガンダ棉等の高級棉を輸入してゐた。所がこの輸入税の引上げによつて綿糸の生産費が一六%のコスト高につく事になり、印度産業は再び低番手製造へ轉落せざるを得なかつたのである。

(註二) 一ポンド・アナ(邦貨約八錢)の値上げであつた。

(註三) これは前年度の豊作に基く農産物の暴落によつて國內購買力の低下してゐた事も一因で、當時の印度紡績業は一週四十五時間の操短を實施してこの苦境を切抜けんとしてゐた。なほ一九三七—三八年度の國內綿布製造高は、一般工場四

一億ヤード、手工業一六億六千萬ヤード、合計五七億六千萬ヤードであつた。

又一九三八年に於て鉄鋼一五五萬二千トンと鋼鐵一四七萬トンの製造高を持つて大戰下に重要な役割を演ずべき印度製鐵業も、歐洲市場の閉鎖と日本の鉄鋼購入の一時手控へによつて、タター、ベンガル・スチール兩會社共八十五トン級の新式鋸鐵爐の火を落す苦境に陥つた。

勿論、印度を自己商品の市場として確保せんとする英國資本主義にとつてこの印度産業の窮乏化は、平時なら思ふ盡である。然し、少く共今回の大戦下に於て前回に優る困難に當面する英國としては、その植民地印度に第一次大戰當時それが献納した所の三億磅の軍費と百〇七萬の軍隊に倍加するそれを要求しなければならず、それを要求する事は即ちそれを可能ならしめる所の印度民族産業の勃興を必要とするのである。従つて英國側としてもこの民族産業の窮乏化を見殺しにする事が出来ず、現實にその救済に乗出したのは昨年三月以降——即ち、ノルウエー作戦に於ける敗北によつて英本國産業の危機が招來せられた時からである。

然しこれを一段と激化する事情が、更に起きて來た。

昨年六月、伊太利の參戰とフランスの崩壊によつて印度を直接英本國に結ぶ地中海ルートが切斷せられ、印度を含む全極東の英アロツクが本國から孤立する危険に曝され、その指導的地位にある印度が、英本國に代つて全アロツクの自主的防備と經濟自給圖の確立を指導するに至つたからである。即ち、印度はこれ迄の如き單なる軍需基地とのみ見る事が出来ず、近代國家的役割を必要とするに至つたからで、それが近代國家となるためにはそれを可能ならしめる基礎的近代産業を必要とする事は言ふ迄もない。印度準備銀行總裁ジェームス・テラーも、第六回株主總會の席上次の如く述べた。

「印度は前古未曾有の困難に當面し、これ迄の如き軍需資材のみならず、その供給をこれ迄は歐洲市場に仰いでゐる

た日用必需品の製造をも行はなければならなくなつた。

即ち、單なる原料品から精製品の製造へ——それが今次大戦下に持つ印度産業の劃期的役割であり、印度政府は昨年八月この歴史的轉換に對應する國防經濟案を發表した。その結果國防經濟の統制機構として司令部的役割を果す軍需部、參謀本部の役割を果す經濟調査局、第一線の役割を果す管理部の三組織が生れ、直接生産干渉をも行ふ事になつた。又その組織の下に一億七千萬ルピーを投じて製鐵、鐵道、化學工場の大擴張を行ふ一方、輸出顧問會講を設置し、貿易駐在官をアメリカと濠洲へ派遣し、歐洲市場の閉塞によつて老大な國內ストックとなつた綿糸、皮革、茶等の販路開拓を行はしめたのである。又平和産業救済のために紡績その他へも老大な軍需註文を發し（註一）その額は本年三月迄に五億六千萬ルピーに上つた。

（註）これは凡て近東、埃及戰線行きて、昨年六月だけでも紡績業者に五二二八萬二千ルピー（綿製品八五九〇萬ヤード、綿糸六〇〇萬ポンド）、製靴業者に二二萬三千足の大量註文があつた。

この結果は、政府によつて國防費として一日二百萬ルピーを投ぜしめるに至り、疲弊のドン底にあつた印度民族産業に活を入れた。彼等はこれ迄の如く英國資本主義を彼等の桎梏と感じなくなつたばかりか、寧ろそれに追従する事に利益を感じるやうになつた。印度産業には、歴史的な發展が齎らされた。昨年九月印度國防軍モーレスウオース少將は大戦勃發來印度に千一種の新工業が發達し、近代軍需品二萬種の中一萬餘種の製造が可能になつたと發表した。鐵、雲母、マンガン、クロマイト、硝石等の貴重な軍需資材の發掘は、未曾有の量に達した。サー・トーマス・アインスコッフは印度駐在筆頭貿易官編の「印度に於ける英國貿易の現状及前途に關する報告」の中に現在

印度が自給程度に達した工業種目を詳細に挙げ、財務大臣ジェルミイ・ライズマンは、印度が昨年末迄に英本國へ送つた軍需資材として、次の如き老大な數を立法議會に報告した。

小銃四十萬挺▽小銃彈一億發▽拋射火藥一〇〇トン▽煤彈二五萬トン▽軍靴一三三萬足▽毛布一五〇萬枚▽軍衣一〇〇〇萬ヤード▽シャツ類一五〇萬枚▽靴下二五〇萬足

（註）アインスコッフによると、現在印度の自給程度に達してゐる種目は次の通りである。

鐵道（汽機車、車輛、車軸、蒸氣タービンを除く全部）▽化學品（曹達灰、硝酸銀、鹽素、クロロホルム、カルシウム）▽軍需品（有刺鐵線、砲擲、グリセリン、双物類、銅板、ハリケンランブ）▽雜貨類（アルミニウム製品、ゴムタイヤ、ガラス器具、ビスケット、煙草、アスベスト製品、電燈、紙、マッチ、農具、砂糖、電扇、電線、藥品等）。

然し印度としてのこの本世紀に於ける最大の生産量も、決して労働者大衆の犠牲なくして獲られたものではなかつた。事實、政府が昨年この國防計畫に基く生産擴張を行つた時、先づ當面したのは技術家の不足であつた。政府は百四十の鐵道及製鐵工場を調査した結果、取敢一萬人の技術不足を知つて驚き、昨年六月二十六日附を以て印度人技師四千名の強制徴用を行ふと共に技術訓練調査委員會の下に、年一萬人の技師養成計畫を實行に移したのである。この技術者の不足は、同時に又労働力の不足であつて、有史以來の生産擴張は又同時に有史以來の過重労働と労働時間の延長を齎し、カウンポールに於けるメンデスの演説の如きは同市労働者數が戦前の四萬七千人から六萬六千人に増したが、その平均賃銀は月二三・八ルピーから二五・一二ルピーに増加したのみで、その増加率九・四%は一般の生活指數の騰貴率たる一五・四%から見ると極めて低いと指摘してゐる。又製鐵工場などは全く本國同様

二十四時間操業が實施せられてゐる。

英國側ではこれ等の過程を「印度の工業化問題」と呼び、その最も重要な缺陷としてこの労働力の不足を擧げてゐる。然しその解決を困難ならしめる要件としては、その半農性に基因する労働者能率の低下と、カストによつて社会的地位と職業の決定してゐる印度教社會の複雑性が擧げられる。後者に就ては二十世紀初頭カルカッタ近郊に黄麻、紡績工場の雨後の筍の如く發達した折も、比較的高階級の占めるベンガル州には労働者になり手がなく、結局他州より百二十萬人の労働者を連れて來たと言ふ話や、例へば波羅門階級が經濟的に困窮する場合兵士、教師、料理番になる事は許されても労働者としては坑夫以外禁じられてゐる奇妙な習慣が想起せられる。

然しこの背に腹を代えられなくなつて印度民族産業に膝を屈した英國側の態度には、これを諒とする民族聯盟と依然反對氣勢を擧げる會議派の間に意見の疎隔を來たし、一九四〇年度に實現すべき兩者の合同は一ヶ年延長された。然しこの労働時間の延長と労働の過重は、戦後約二倍の物價騰貴と昨年十一月に實現した戦時課税の引上げ（註一）と結付いて、労働者の生活を一九二〇年代よりも困難な状態に陥入れた。これ等の空氣に乗じて一九三九年三月にはボンベイ紡績工場七十の罷業が起きて男子労働者十五萬、女子労働者三萬が参加し、四〇年七月にはカルカッタ黄麻工場に罷業が起き労働者四萬が参加した。ナグプール及カウンプールには、労働者を中心とするパン屋襲撃事件が起き、ジャツバルポールに於ては負傷者百六十二名、被逮捕者二百四十八名を出し、ゴラプールに於ては負傷者二十七名を出した。又回教徒労働者を多數含むアフル黨を中心に反戦運動の名目で二萬二千名も檢擧せられた。これ等は凡て政府が大戦勃發と同時に發布した印度防衛法を以て彈壓したので、問題は今や政治的領域へ發展してゐる。

（註一）前記ライスマンは印度の國防計畫遂行上一九四〇年度に於て軍事費一億四五百萬ルピー、生産擴張費二億五千萬ルピー不足すると議會に報告、郵税及所得税二五%の引上げを斷行した。然し印度人口一人宛税額は平時に於てすら九・五ルピーで、彼等より十倍も富む英國人のその丁度二倍に當つてゐる。従つてその結果が彼等の生活に如何に悲惨な影響を與へてゐるかは想像に餘りある。

然し、この民族産業の躍進的飛躍は、やがて封建的な印度社會にも大きな變化を齎らさないでは置かないであらう。近代産業と近代労働者の發達は不可分であるし、近代労働者の壓倒的多數は印度社會の宗教的、カスト的問題を解決し、やがては獨立運動の形體をも一變せしめるかも知れない。事實、英國側にとつて最も恐しい大戦後の恐怖はこの近代労働者が國民會議派の主力を構成する事であり、彼等が會議派の實權を握る時ガンデー主義とも決裂するではないかと言ふ事である。従つてその側面にあつて活動する労働組合の動きが、今程注目されてゐる時はないのであつて、戦後期待される印度産業と本國産業の摩擦と並んで二大問題をなし、彼等を指導する眞の指導者の出現が極めて熾烈に望まれてゐる。

第三篇 智識階級

一、印度の教育問題

バブ (Babu) と言ふ言葉に、正しく言つて「中産階級」と言ふ譯語は當てはまらないかも知れない。何故ならバブと言ふ言葉には實に多くの意味があつて、例へば「ベンガリー・バブ」と言へば、喜劇に登場する坊主同様、街學的な輕蔑的な意味さへ持つてゐる。元來この言葉は、ベンガル州の古い貴族を呼ぶ尊稱に用ひられたのが最初らしく、十八世紀には「洒落者」或は「伊達者」を意味するやうになり、更にバブ誰々と言ふやうに智識階級に對する敬稱に用ひられるやうになつたのである。

然しベンガル州は、同時に又スーラット及マドラスに次ぐ印度の商業中心地として多くの富裕な商人を産み出したので、この商人達をも「バブ」と呼んだ。そして東印度會社が出現するや、「バブ」と言ふ言葉は會社と民間の中間に生れた買辦や仲介人にも用ひられた。然しこの言葉は漸次威嚴を失ひ、會社の一般使用人に對して用ひられるやうになり、書記或は事務員を意味するやうになつた。従つて一應ジュリアン・ベンダが知識階級或は中産階級の人を呼ぶ時用ひたと同様の意味で、十八世紀當時に復活したと見ても強ち誤りではないであらう。

何れの國も同様、印度に於ても又智識階級が決して單一の社會層から出來てゐない事は、この「バブ」なる言葉の

歴史が示す通りである。事實、ベンガル州の商人及小貴族は、十六世紀末に於て彼等の經濟的發展の行詰りに達し、その多くは英國の印度支配によつて破産に瀕したのである。唯その折一部だけが自己の所有地を通じて農村へ生活の中心を移し、地主階級となつて新たに甦生したのであるが、残る大部分は自己の破滅を見て或る意味での神秘論者となり、神秘論を通じて宗教に關心を持つやうになつたのである。かくて、ベンガル州は昔から宗教運動の母胎となつてゐたのであるが、同時に又全印に魁けて外國文化に接觸した州でもあつた。そしてその結果に就ては、印度文化を極端に嫌ふマツカレの言葉を引用すると、彼は印度の凡ゆる思想が西洋哲學の「輝しき光」の前に顔色を失ひ、姿を消してしまつたと眞面目に信じ、次の如く述べてゐるのである。

「英國流の教育を受けたヒンズー教徒で、普通眞面目にその宗教を信じてゐるものは一人もない」

事實、この言葉は多少の偏見があるにせよ大部分眞實で、これ迄懷疑論と無智の水中を絶望的に漂つてゐた印度の智識階級、即ち中産階級は、十七世紀初頭に始まる西洋文化の突然の來襲に全く壓倒せられ、明治初年の我國同様印度特有の社會的傳統と調和し消化する事が出来なかつたのである。マツカレは又次の如くも述べてゐる。

「若し彼等が我國の西洋文化に基礎を置く教育計畫を遵奉するなら、三十年後ベンガル州の尊敬すべき階級中、一人の偶像崇拜者もなくなるであらうと確信する。そして、これには宗教を奨める努力も必要でなく、彼等の宗教的自由に些かも干渉する事なく、單に智識と反省を自然に教へ込む事によつて成し得るであらう」

然し彼が「凡ての印度に於ける宗教上の相違が、ウィツグ廣教派の教義によつて解決し得る」と信じてゐたのであるから、その間の偏見の大きい事も事實であつたが、又當時の世相の眞實を穿つてゐる點がないでもない。事實初期

の印度開拓者の間には、外國智識の普及によつて印度に「多くの精神的恩恵」を與へ得ると信じ、初期の宣教師ダフヤカレイの如きが、それを代表してゐたのである。然しメイヒウの如きは彼の著書「印度の教育」に於て「外國文學と科學はかゝる道路に立つ道標に過ぎないのであつた。聖書に示される古今を通じての正しい海圖のみが無益な、恐くは危険な航路變更から旅人を救ふ事が出来るであらう」と述べてゐるのであつて、これは正しく英國主義者の地位を安當に表現するものと云へるであらう。又マツカレは「印度人を英國人よりもつと英國的ならしめん」と欲してゐた。即ち、彼の理想とする所は教育ある印度人が「その趣味、意見、徳性、知性に於て、全く英國人」となる事であつた。

然しマツカレイの政策はその結果に於て英語主義者の警戒する所を看過してゐたと言ふ誤謬を犯してゐた。即ち、ヘンリー・クレイク卿は、英語を一般に使用すれば「何にも増して我々の印度支配を弱める事となるであらう。我々と同じ言葉の便宜を得ると云ふ事は、印度人の或る階級に、政府の高官と一般大衆の中間に立つ事が出来る有力な動機の一つを與へる事になる」と反對してゐるのである。然し外國智識の門戸はその後に於て、パークの言葉同様「我が未だ森に棲んでゐる時、既に長い時代に亘つて進んだ輝ける藝術を持つ文化生活」の経験者であつた所の印度大衆にも開かれる事に決定した。不幸にしてその教育は、慎重な印度人の同化と云ふ問題を離れて單に外國思想の傳播と云ふ事に重點を置く缺點を持つてゐた。これは英國文學や英國文化が、ゴール人やスペイン人や更にノルマン人を通じて英國に與へた嘗てのグレコ・ローマンの影響と同様の結果を、印度にも齎すであらうと考へた者もゐたゝめであるが、そのラテン文化は英國を富ましこそすれ、決して破壊しなかつたと云ふ事實を、不幸にして忘れてゐたので

ある。

従つて單に本國の文學を傳へんとするだけの英國は、最初から失敗すべく運命づけられてゐると言へやう。然しその結果は、却て別な方面に重大な意義を持つに至つた。それは飽く事を知らぬ貪欲な英國官僚主義の要求に應じて、盡きざる流れをなす事務員の大群を彼等に供給し、やがては印度の物的發展を大いに助長する結果となつたことである。殊にそれが印度民衆の政治的意識を覺醒せしめると云ふ逆の効果を生んだ事は注目に價するが、同時に又世界で最も鋭敏な最も智識の發達した印度人と云ふ人種から、彼等の知性を骨抜きにしたと云ふ點も注目せられる。これに對してはプリンセツプやその他「東洋主義者」の一派が、學の自由と教育に於ける印度語使用のために奮戦はしたが、結局目的を達し得なかつた。

然し新しい酒を古い皮に盛る事は危険であり、その反動的な過程に於て印度個有の貴重な性格を失つた事は、何んと云つても否定出来なかつた。かくて印度に於ては、全く我が國の明治初年に於けると同様の状態を現出し、先づ英國のものであれば何んでも好く、印度のものであれば何んでも悪いと云ふ結果を生んだ。又東洋主義者を中心とする英國が新しい生命を印度に植付け、多方面に亘つて印度語文學を奨励した事も事實であつた。これは特にベンガル州に於て顯著であり、この結果ベンガル語は改良せられて驚異的な發達を遂げた。又カレー、マーシユマン等の初期宣教師の功績も大で、彼等は印刷術を輸入しベンガル研究を大いに奨励した。又、彼等の宗教に及ぼした影響も大で、ラジャ・ラマ・モハン・ロイ(註一)の如きは印度思想と英國思想の調和を目的としてブラーマ・サマジ(Brahma Samaji)即ちサンスクリット中の神の名をとつて一八二八年ブラーマ協會をカルカッタに設立するに至つた。西印度

に於てはアーメッド・カーン一派の回教徒による社會改良運動が生れた。

(註一) 一七七二年ビハール州パトナに生れ、一八三三年英國のプリストルに死ぬ迄キリスト教に對抗する印度教の確立を目的とし、十九世紀に起きた宗教復興運動のスタートを切つた人である。

然し模倣しかない所に、價值ある發展の期待出来る筈はなかつた。新しい文化の洪水の中に智識階級が靜かに過去を再評價して眞實價值ある自國の性格を發見した時、そこに始めて力強い民族運動が生れて來るのである。宗教に端を發する印度の復興運動は、更にベンガル州に於ける新しい文學運動となり、美術に、文學に、音樂に限りなく廣められ、遂にサンチニケタンのタゴール大學にその實の一つを結んだ。有名なベンガル詩人バンキム・チャンドラ・チャッテルジイはかうした空氣の裡から生れた代表的な人物であり、國民會議派の國歌「母國萬歲」も彼の小説の一つからとられたものである。彼こそ實に力強い民族運動の新しい一頁を飾つた人物とも云ふべきであらう。然しその印度語運動が着々進む時、英語の印度人に及ぼす影響は非常に深いにも拘らず、結局英語で書く印度文學に餘り貢獻しない事が判つた。ベンガル出身の文學批評家もタゴールの詩はベンガル語で書かれたそれに眞に價值があるのであつて、若し英語で書かれた彼の詩によつて彼を評價するとしたら、彼の英語も確かに立派なものに相違ないが、決して正しくないと語つてゐる。事實、今迄に現はれた最も立派な印度語文學は未だ英語に翻譯されてゐないし、今後とてそれに翻譯する事は不可能であらう。

又ベンガル州はこの英國の影響と同時に、ロシアの影響も受け、その作家ドストエフスキーやゴッリ等を通して虛無思想の影響が特に顯著であつた。従つてベンガル州を事務員とテロリストの故郷とのみ考へる人々は、今なほカ

ルカッタ市に著名な文學者の一派がある事を知つたら意外に思ふであらう。彼等は確信を以て英國文學を語り、フランス文學を論じ、さうする事によつて又ベンガル特有の文學評論の基準をつくつてゐるのである。然し印度の他の地方にも見られる同様のことは、凡てベンガル州の模倣に過ぎない。

かくて藝術家や文學者は外國模倣を中止して、自己特有の創造に努力するやうになつたとは云ふものゝ、其處には又一つの弱點が残つてゐた。それは美術や文學は一般の卑俗な言葉や思想では理解し得ない點のある事で、最近の印度語は英語やサンスクリットやイラン語の影響を受けて次第に外國化し、固有の姿から遊離する傾向があつて、この復興運動の波に乗つて現はれたタゴール大學に於てすら、殊更言葉を氣取る悪い癖が非難されるのである。勿論ベンガル地方の文學者達には、十九世紀末の英國やフランスに見る程甚い「藝術のための藝術」と言つた傾向はない。然しその言葉の遊離に伴ふ大衆性拋棄の危険性は夙に指摘せられ、今なほ大衆の現實生活とは何等の關係なき個人感情の描寫に終始してゐる事は事實である。従つて若し今後の印度文學を何に期待したら好いかと云へば、恐らくは内容の最も充實した農民の自然感情から生れる小唄や民謡の中にその將來性を見出す可きであらう。従つて印度語教育の發達や、最も單純なヒンドスタン語(註一)をサンスクリットやイラン語の桎梏より解放して全印度の標準語たらしめんとするガンデイやネールの運動は、その意味で注目せらるべきであらう。

(註一) 印度人の使用語は二百餘、地方郵便局の公認語ですら七十餘と云ふ極めて複雑な事情にある。今主な使用語とその勢力を表示すると次の如くである。

ヒンドスタン語、一億二千萬人▽トラヴィド語、七千二百萬人▽ベンガル語、五千四百萬人▽パンジャブ語、二千五百萬人

▽マラタイ語、二千二百萬人▽オリヤ語、千五百十萬人等

然し英國流教育の最大悪弊は、何んと云つても中途半端な英國人ともつかず印度人ともつかない智識階級を、年々大量に産み出してゐる事であらう。事實これ等の智識階級にとつて教育とは、單に政府機關に就職せんが爲の手段に過ぎないのである。又印度の大學や専門學校——前者は現在十六(生徒數一萬千七百二十八名)、後者は二百四十一校(生徒數八萬六百四十七名)——は、現在眞剣な研究とか文化等の本來の使命はすっかり忘れ、かゝる中途半端な人間の製造に一生懸命となり、單なるその温室或は機械と化してゐるのである。その中にはカルカッタとかアラハバードの如き優秀な大學もあるが、その他の殆んど全部は徒に大量の學生を擁し、彼等を俗物に養成する事に専念し、教職に身を置くそれ等大學の教授連の中には、半世紀も昔からの講義ノートを毎年讀上げる者も多く、これが學生罷業となつたと言ふ變つた話も傳へられてゐる。又その教授種目も徒に文化方面を重視して、科學方面を極端に輕視し、實習制度なども殆んど發達してゐない事が指摘せられる。かくて徒に生徒數のみが多くて疲れた教師の多い事は、非常な弊害を呼び起して居り、教師と生徒間の融和乃至は協調と言ふ事なども殆んどない。寺小屋式な印度の傳統的教育に於ては、この教師と生徒の親密が最も大きな問題であつただけに、今日の教育の機械的な大量生産は誠に印度の悲劇と云はざるを得ない。メイヒユの如きも印度の過去に見る傳統的教育は、或る點ブラトールの理想教育にも似て上品で熱情的であつたとさへ述べてゐる。

この過去の傳統的教育に於ては、婆羅門階級の少年は八歳になると家を離れ、十四歳になる迄教師の下で日を送らなければならなかつた。この理想的教育はアリア・サマジ (Arya Samaj) (註一) 即ちアライヤ協會によつて一時ハル

ダールに再現せられ、深く印象に残る學校として今なほ記憶されてゐる。事實この學校の卒業生には若くして經濟問題の論文をサンスクリット語で書いた者も居り、その中獨逸語に翻譯せられた一つなどは、ハイデルベルヒ大學から博士號を贈られた程である。

(註一) ヒンズー教の復興を目指すダヤナンドによつて一八七五年に創立せられた協會。

然し進歩的教育の徴も現在、印度に絶無ではない。例へばバーヴナガル藩王國のダクシナムルティに學校を經營するナナバイ氏の教育法や、一切の宗教やカストを抱擁するプロモ教の廣き心も太陽を崇拜するタゴール大學、即ち國際學園インターナショナルの自由教育も又何れの國にも誇り得る學校である。又ガンデイの影響下に國民會議派の經營する民族的學校も、大學としてのアカデミックな地位こそ低いかも知れないが、徒に外國文化への屈從を避けて印度的な教育を青年達に施す點にこれ又注目せられてゐる。

かくて印度大學の最大缺點の一つは、明確な教育の哲學的基礎を持たない事だと云へるかも知れない。勿論この事は印度哲學として東洋最古の文化的價値を持つ彼等の間に、有名な哲學者が居ないと云ふ事ではない。たゞ大學の教授達が現在その生徒達に、明確な教育の目的と批判力を與へて世間へ送り出すことをしないと云ふ事である。事實、印度の學生数はそれ程少い譯ではない。然しそれ等の學生達が如何に青二才らしく見え、小生意氣に見え、内容の空虚に見えるかに就ては印度旅行者の等しく指摘する所である。勿論將來は非常に事態も異つてくるであらう。事實現在の低調な教育状態の中からも紐育大學の政治學教授をしてゐるバネルジー氏の如き立派な學者をも産み出してゐるのである。従つて印度が若し政府の俗吏を造る事にそれ程躍起にならなければ、もつと立派な功績を残し得るであら

う。事實立派な研究は既に幾つか完成してゐるのであるが、その結果の發表せられる事が非常に少ないのであり、一番甚いのは討論と批判の自由を持たない事である。又文化が地方的に滞留して(例へばカルカッタに居てボンベイで出版された貴重な研究書を手に入れる事が困難であると云つた具合に)これに拍車をかけるのは、所謂印度人の文化的向上を恐れる英國側の作爲によるものであると批判せられてゐる。

かくて現在印度に於て、マルキシズムの書物を手に入れる事は極めて困難であり、標題に××主義の文字があれば勿論それだけで發賣禁止である。従つてベル・デエフ教授の「ロシア××主義の起源」の如き反共產主義の立場から書かれたアカデミックな書物や、一英人の書いた「××主義の幻影」と云ふ××主義攻撃の書物迄、發賣禁止の憂き目を見てゐる。又印度で最も大きなカルカッタ大學の圖書室を調べて見ても、極めて簡単な社會主義入門書を二冊見出すだけでアハーリンの唯物史觀すら見當らないのである。又検閲官(と云ふより税關法、そして現在は戦時下防衛法の發動による)の馬鹿さ加減は世にも珍しい程で、殊にこの大戦下に於ては印度の何處にでも賣つてゐる書物や、彼等に讀めぬ外國語であれば小説類迄沒收せられ、こと國民會議派に關する一切と新聞雜誌の一切を輸出禁止にすると言ふ愚を演じてゐる。

又學生は自分達の言葉でない言葉で教育を受け——彼等はチョウウサーを讀み、ミルトンの古典的比喻や理論上の錯誤研究しなければならぬのである——苛酷な英國流の試験の奴隷となり、身體を害はなければならぬ。その勉強の激しさと或る場合のスポーツの閉却は、彼等の體格低下と重大な疾病の原因となつてゐると言はれてゐる。又彼等が非常に貧乏である場合が多いのであるが、寄宿舎設備は多くの場合豚小屋に等しく、サドラー調査委員會もその

非衛生的な恐る可き状態を遺憾なく暴露し、英國人すらをも撃墜せしめた。従つて學生の健康状態は非常に悪く、印度人が立派な身體を持ち昔からの勤行を続ける事を寧ろ得意としてゐると云ふ事實に最早や耐え得ない状態である。アメリカのメーヨ嬢がその著「マザー・インディア」に描いたヒンズー教徒の瘦せ衰へた姿は悲惨であるが、印度の青年達は常に疲労感を抱きながら活動し、その學生々活の想ひ出が何時も不愉快である事もそれに劣らず悲惨である。

かくて苛酷な試験、高い授業料、言論自由の缺如に伴ふ不平は次第に高まり、學生ストライキは農民騒動と平行して現在印度の流行病となつてゐる。一九一九年——二二年、一九三〇年、一九三二年——四年の第一次歐洲大戰以來前後三回に亘つて展開された市民不服従運動の時も、學生達は以上の理由により勇躍参加し、政治はこゝ數十年自由主義風潮の下に立つ學生達の妄執の鬼となつて居る。その一番大きな原因としては、例へば彼等が卒業しても別段恵られた生活を印度に於て期待出来る譯でもなく、次第に増加する中産階級出身の失業者大群が、その行く手を遮切つてゐるからに外ならない。そして、學生騒動が如何に深刻であるかは、それに必ず警官の暴行事件が伴ひ、喧しい社會問題となつてゐる事を以ても判るであらう。

この學生の政治的關心が、印度獨立運動の火蓋を切る砲手的役割を演じてゐる事も又事實で、優秀な學生の中には次第に過激な思想にかぶれる者が増へ、支那の革命當時に於る學生の役割を眞剣に討議し、スペインの學生活動に關する書物を一生懸命讀んでゐる事も事實である。従つて彼等が單に英國への奉仕以外に何も考へなかつた先輩より遙かにコスモポリタンになつてゐると云ふ事は言へるが、それは飽く迄も外観だけの事で彼等の昂奮は常に醒め安く、常に挫け易いのである。何故なら彼等の叫ぶスローガンも、結局これ等の書物からの借り物に過ぎず、何等の確固た

る世界觀乃至は信念に立脚するものでないからである。

又印度の學生は喧嘩好きで、一寸した事にも兩派分れて争ふと云ふ好戦癖のある事や、學生組織に未だ訓練の充分でないため鬭争の途中その運動を抛棄する場合も多い。然しこれ等の學生を組織し、學生の地位を向上せしめ、彼等の利益を保護し、凡ゆる建設的活動に参加せしめんとする國民會議派の影響とその努力は次第に強くなり、昨年七月同派フォワード・ブロックの指導者チャンドラ・ボースが檢舉された時も、カルカッタ大學を中心とする強力な釋放運動が行はれた程で、彼等の無智な印度大衆に對する啓蒙的役割の偉大さは否定出来ない。事實、或る州に於ては學生を動員して一定期間同派に奉仕せしめんとし、又ボンベイの學生聯盟では一九三八年度計畫としてその夏中休暇を利用して文盲征伐旅行を敢行せしめんと企てた。そして彼等は數團に分れて訓練を受けた後、各々指定せられた農村へ赴き文字を教へる傍、基礎的な衛生學と簡単なスポーツを農民に教へ、更に一定の質問書を用意して置いてその地方の實情調査の資料としたのであつて、その社會的貢獻は極めて大きかつたと言はれてゐる。

然し印度の教育は自由主義の假面を被る、即ち印度民衆を無智の状態に出来るだけ長く抑制せんとする政治的意欲に基いて殊更放任せられてゐるため、一定の企劃と水準を缺くと云ふ致命的な缺陷を背負つてゐるし、學生達も又教育を職業を得るための手段と功利的に考へてゐる結果、所謂試験勉強が教育の本質のやうに誤解せられてゐる。今日天職としての教育が頻りに論じられてゐるが、印度の實情は餘りにも「天職」を離れ、それは官吏、辯護士、事務員、醫者の候補者から成る小さな職業學校となつてゐる。社會の中心層だけを適確に教育すれば、それがやがてヒマラヤの水の如く次第に低地へ流れて大衆と云ふ五穀の實る沃野を濕して行くと云つた理想教育は、印度に於て失敗してゐる。

るのである。従つてその點多くの異論があるにせよ、兎も角も特定の職業に關する教育を行はんとするガンディー一派のワルダ計畫は大衆教育の見地から見て注目せられる。

又文字を知る女性の數は僅か五十萬人で、百人の就學率三%と云ふ印度の教育に於ける婦人の忘却も、一つの大きな缺點をなしてゐる。然しこの状態に就ては、印度婦人の社會的地位の低い事を理由に擧げるものもあるが、少く共全人口の六割二分——即ち二億六千萬人を占めるヒンズー社會に於ては、決して婦人の地位も低くないのである。事實、印度の歴史上にも多數の高貴な婦人の功績に就て語られてゐるし、その或る者は又民衆の指導者として知られ、詩人で同時に國民會議派の指導者でもある現在のサロヂニ・ナイズ女史なども、確かにその一人であると言はれてゐる。然し封建社會末期の貧困と混亂は、一般の婦人教育を極めて遅れた状態に置いて、家庭の空氣もその結果學校のそれとは全く異なる觀念に支配せられて反動的役割を演じてゐるのである。勿論婦人が男よりも保守的である事は世界的現象であるが、教育の缺如が印度に於てこの傾向を特に顯著ならしめてゐる事も事實である。現在印度の進歩的な青年とその家庭の指導的觀念の間に横はるギャップには誰しも一驚を喫するであらう。

かくて印度に於ては現在如何なる青年も結局は反動的な母親や祖母への尊敬に順應しなければならぬ所の家族制度が依然權力を持ち、大家族制の未だ残る所では支那に於けると同様、單に年長であると云ふ理由だけで無智な人が驚く可き權力を持つてゐる。然し我々はこの印度青年の無氣力と關聯して、今一つの要素である失業問題を再び此處に強調する事が必要であらう。

最近も印度の代表的大學の一卒業生が、鐵道の火夫になつたと云ふ新聞記事が騒がれてゐるが、これなど餘り珍ら

しい話でもない。我々が一般の外國商社へ行つて見れば、其處に働く大學出身の事務員は何れも三十五ルピー乃至六十ルピーの安月給取りであり、中には立派な鬚を生やした四十過ぎの大學卒業生の電話交換手やタイピストすら見受けらる事がある。又或る時にはクシャトリヤ（武士）に屬する長い間失業の擧句に漸く口を得た或る商社の門番も矢張り大學卒業生で、毎日自分より低い階級であるヴェンヤ階級出身の事務員に頭を下げてゐるのである。かくて現在印度の失業者數に關する統計を手に入れる事は困難であるが、若しその數が正確に分れば恐らく世界中の人間が驚くであらう。かゝる状態に於て、彼等が最も都合の好い産業豫備軍を構成すると同時に、英國側の最も恐れる獨立運動に走る矛盾は止むを得ない現象とも言へるのである。

一、民族運動の展開

ゴカールの死後、第一歐洲大戰に至る間の國民會議派を率ひて立つたB・T・テイラツクは、嘗て次のやうに述べた事がある。

「自活とは、私の生れ乍らにして持つ權利である」と。

さて我々は、この智識階級を母胎として生れた印度獨立運動に關連して、その政治的特質を取上げなければならぬ。然し、印度の民族主義に就て此處に詳細に述べる事は到底不可能である。従つて此處ではたゞ可能な範圍で重要な若干の點を擧げ、その發展の概念を與へるだけに止まるであらうが、我々は既に、英國教育の齎した結果の一面に就いては充分検討を行つた筈である。

印度の民族運動は先づ十八世紀に於て性格的には宗教運動とも見られる政治運動の萌芽を、中産階級の間に植ゑ付ける事に出発してゐる。即ちそれは先づ過去數世紀間に發達したヒンズー教の苦行やその他の馬鹿化した社會的習慣の形をとつてゐた。又近代的ベンガル文學の創始者の一人たる英印混血兒のデロセイオ（彼は二十代で死んだ若い天才であつた）は、これに基督教を加味し、當時のヒンズー青年に合理主義の福音を説いた。然しヒンズー教の立場を離れたその運動は、到底印度人社會に受け入れられる筈もなく、やがて起つた宗教運動のためにも一敗地にまみれた。ラム・モハン・ロイ（註一）は英印兩文化の綜合を企圖し、その後継者たるケシヤブ・チャンドラ・セン（註二）は晩年に於てこそヒンズー思想に傾注したとは云へ、兎も角もヒンズー教と基督教を接近せしめる事に於て、前人未踏の境地を開いた。マハルシー・タゴール（現タゴールの祖父）は、その博識と崇神の念を以てブラマ協會（註三）を設立したが、當時の社會には基督教に對するもつと戰闘的なヒンズー教の形式が要求せられてゐたので、その要求に應じてアラヤ協會の創立者であるダヤナンド（註四）とラマクリシナ運動（註五）の聖ボーロと云はれるヴィヴェカナンド（註六）が生れた。

これ等の宗教運動はヒンズー教の復興精神を通じて愛國精神と結び付き、基督教に對抗してより合理的な基礎に立たうとする新印度建設の前提條件をなしたのである。かくてバンジャア州の生んだ偉大な民族主義者たるララ・ラジユバット・ライも、アラヤ協會の一員であつたし、北印度の國民會議派内には、今なほアラヤ協會系の分子が相當多數含れてゐるのである。

（註一） 印度の民族運動がその宗教的背景の上に出発してゐると言ふ意味に於て、彼は近代文化復興の祖と言はれてゐる。

七七二年ビハール州パトナの婆羅門の一家に生れ、一八一五年カルカッタに移住後、ヘブリユウ及ギリシヤ語を研究、當時西洋文化との接觸によつて危機に瀕してゐたヒンズー教の復興を目指し、一八二八年ブラマ協會を設立した。彼の主張はヒンズー教の多神論及偶像崇拜を否定し、合理的基礎の上にキリスト教と對抗し得る宗教たらしめんとして最初に成功した人、一八三〇年渡英、同三年ブリストルに客死した。

（註二） モハン・ロイによつて點火された新宗教運動の第二弾として、一八三五年ブラマ協會に入會したのが、カルカッタ生れの銀行員チャンドラ・センであつた。彼は雄辯を以て聞え一八六〇年ブラマ協會の書記となり、後信仰者團體を設立、社會改良問題、特にカスト制度の廢止を中心主張とした。然しこのカスト問題が祟つて一八六三年にはブラマ協會書記の地位を逐れ、更に一八六六年には全印の遊説に上つて各地に支部を創つた。處がこれが又祟つて一八六五年には協會をも逐れたので、同六年印度ブラマ協會を設立、青年間の信理を集めた。

（註三） 現タゴールの祖父が、サンチニケタンに創立したヒンズー教の一派。その多神論を否定し、廣き心もて宇宙を神とする事を主張した。

（註四） 一九二四年カシヤワール藩王國に生れたヒンズー僧侶、英語を知らぬこの時代唯一の宗教運動家。同時に又宗教的色彩強く、一神教を主張、この印度的性格が好れて北印度を席捲する勢力を持つた。一八七五年アラヤ協會に共鳴、一八八三年五十九歳で死す。

（註五） これはラマクリシナ・バラムハンザによつて始められた運動、彼は一八三六年生れのカルカッタ近郊ダキネスワラ寺の助僧、ヨギの修練者であるが同時に又、基督教、回教をも研究した。然し彼の神秘的生活がやがて全印の注意をひき前記チャンドラ・センその他との交遊が始つた、彼の無智の勇氣が却て彼に何物かを求めんとする知識階級の偶像たらしめた。彼の主張によると神は基督教宣教師が迷信と輕蔑するヒンズーの傳統的禮拜方法を復活する事によつて却て實現し得ると言ふので、この古典的ヒンズーの復興が不圖らずも民衆の民族的自覺を促し、その運動を組織立てる結果となつた。一八八六年八月死亡。

(註六) 一八六三年生れ、ラマクリシナ自身としては政治に興味がなかつたが、その思想を政治領域へ發展せしめたのは彼であつた。彼は年少の時より全印を遍歴、政治的自由の必要を痛感し、一八九三年シカゴの宗教會議へ出席し、ヒンズー教が始めて國際的接觸を持つに至つた。彼とラマクリシナの相異は、ラマクリシナがヒンズーの獨自性を主張したのに對し、彼は宗教の普遍性に重點を置いてラマクリシナに出發する民族運動に普遍性を與へた點である。彼の政治活動は嵐の如き勢ひを以て一九〇九年の死の瞬間迄續けられ、「鐵を着た僧侶職士」の異名を與へられた。

これ等の社會及宗教改良運動を導く原因となつたのは獨り印度人の英國研究が與つて力あるのみでなく、十九世紀の英本國に於ける政治哲學の力も決して閑却する事が出來ないのである。何故なら、印度人は英本國を滔々と洗ふ自由主義の怒濤を見て、彼等も又自國に自由を導き行教機構に参加すべき權利を持つと考へ始めたからである。

一八八五年リボン總督治下の農務兼内務長官であつた英人ヒューム(註一)は退官後、これ等の空氣を緩和する手段として國民會議を創立し、これ等新時代の息吹きに活動舞臺を提供した。その第一回議長のW・C・ボネルジイ(註二)は議長就任演説に於て「その起源を我等の敬愛するリボン卿の治世下を持つそれ等の民族統一感情を鞏固にせんとす」と述べた。最初の中は會議も全く穩健で、英國自由主義にその理想を求めて、單に社會改革を奨励するだけであつた。それは長年の間極めて限られた少數のインテリ層を背景とするものに過ぎなかつた。アチャルヤ・クリバリニイも、その著書「ガンデイの道」に於て次の如く當時の會議を酷評してゐる。

「それは博學な、野心的な辯護士の定期集會で、バーク、シエリング、グラッドストンの亞流を逐ふて雄辯術に浮身を宴し、交々立つて彼等を生んだ外國の主人公達を攻撃したり祝福したりしてゐる」

彼等は言はば大聲に叫んでさへ居れば、何時かは望みも叶ふと棚ボタ式の事を信じてゐたとも言へる。事實彼等は

當時、英國の民主主義を感に耐えぬ面持で眺めてゐたのに過ぎなかつた。然し彼等が、當時の社會の改革的風潮に押されて、英國の統治方針を批判し始めるや、これを恐れる政府側では逸早く官吏の國民會議出席を禁止(一八九二年)したのである。

(註一) アロン・ヒュームは印度政府の退職官吏、在職中ラマクリシナ運動の影響で大衆の空氣が次第に反英的となりつゝある事を秘密警察の報告によつて知り、時の總督リボン卿とダフエリン卿の交替時に退職、この民族運動を英國流に指導するため、國民會議を組織したと云はれてゐる。

(註二) 當時の代表的印度人辯護士、その妻が妊娠するや、嫌がるのを無理に英國へ送り、生れる子供に英國臣民の籍を得せしめたと云ふ一事を以ても、當時の國民會議派運動の本體が推察できる。

これは宛かも宗教運動が、突然基督教との接觸を餘儀なくされて止むなくヒンズー教の傳統を固守しやうとする運動へ發展したと同様、切角英國支配の強化を目的として組織された國民會議を却つて硬化せしめる結果となつた。彼等は最早や白人に膝を屈して、その食卓にパンを求める事はなくなつたのである。

やがて國民會議派は、溫健派即ち社會改良主義者の一派と、急進派即ち獨立主義者の一派に分れるやうになつた。この傾向は二人の指導者によつて代表せられた。その一人はガンデイが自己の政治上の師と呼び、初期の同派を率ひて起つゴカール(註一)であり、今一人はテイラック(註二)であつた。ゴカールは飽く迄も自由主義者であり、偉大な改革者であり、印度下僕協會の創立者であり、デカン教育協會の人々とも交遊があつた。彼は同情ある英國人と共同活動を熱心に求め、印度が英帝國內の一自治國となる事を理想としてゐた。

(註一) G・K・ゴカール、國民會議派運動の初期に現在のガンデイ的地位を占めた人、印度經濟學者兼政治家として有名な

ダダバイ・ナオロジの影響をうけたボンベイ會議派の總帥で、一九一一年のアフリカに於ける印度人虐待問題で活動した。一九一五年死す。

(註二) バール・ガンガダール・テイラック、ヒュームの創設による國民會議派を先づ推進したのがゴカールとすれば、カーゾン總督の壓制と日露戦争に於ける日本勝利の影響下に同派が最初の方向轉換を行つて以來の指導者は、彼及チャンドラ・パールと言ふ事が出来る。一八九七年、ボンベイ州ブーナに猖獗したベスト騒動(同九月より十二月迄一四、二五七名罹病し、一一、八八二名死亡した程で、ブーナ住民に退去命令が出たが彼は踏止つた)に於て活動し、政府側が鼠を殺す行爲をヒンズー教の教義に反するとして遂に暴動化し、英國兵二名の殺害事件となるや、罪を問はれて懲役八ヶ月に處せられた。後、ピサント夫人と自治同盟運動を起し、第一次大戦中死す。

テイラックは、正統ヒンズー教徒と溫和派に不滿を抱く青年達をその背景としてベンガル地方に勢力を持つた。彼は回教徒を驅逐したマラーットの戦士、シヴァジイ(註一)を崇拜し、古代印度に有名な體育協會を復活し、象の神ガネツシュを民族主義者の團結力の象徴とした。彼は往々政治に於ける極左論と社會問題に於ける保守主義を結付けやうとしたとの非難を受けた。然し新時代の政治綱領をつくる媒介物としての傳統的思想とその中に含まれる非開化論的信念を區別する事は容易である。

テイラックは印度が獨立を得べき條件に到達した事を叫んだ最初の指導者として勢力を得た。然し、一八九七年ボンベイ地方にベストの猖獗した折、政府官吏がその撲滅手段として鼠の撲殺を始めるや、殺生を禁ずるヒンズー教に敵意ある行爲として、これを攻撃する衆愚に味方して戦つた。そして、この事がベスト防疫官吏二名の殺害事件となり、彼の最初の檢舉となつた。

ベンガル州に於ても、極左派が宗教運動の影響でその運動の象徴として血に飢えた女神カリの禮拜を始め、これが遂に彼等をしてテロリストの性格を帯びしむるに至つた。その直接行動に向ふ運動は、ベビン・チャンドラ・パール(註二)とオウロピンドウ・ゴーズ(註三)が率ひ、その青年達は爆弾を抱きピストルを懐に忍ばせた。貧窮化せるブチアル階級は、容易にその宣傳に乗つて來た。ロシアの虚無主義に關する書物は急速に擴がり、バクーニン一派の無政府主義も當時非常な勢力を持つてゐた。かくて各所に秘密團體が組織せられ、資金獲得の目的を持つて襲撃が繰返され(註四)、宛然一九一九年の革命以前のロシアに似て來た。

(註一) モガール王朝の回教支配に反對し、南デカン地方によつてヒンズー社會の復興に努力したマラーット族の酋長、一時アウランガゼブ皇帝に破れたが、一六七二年三度回教軍を破り同七四年王位についた。一六八〇年死亡。

(註二) プラーマ協會の員、會議派の轉換後、ベンガル會議派を地盤として、テイラックと肩を並べ同派の實權を持つた。

(註三) 彼の政治的地位はテイラック及パールより上であるが、元來は精神運動に出發した理論家で、第一次大戦直前、政治運動を断念し精神運動に復歸した。

(註四) 印度のテロリストは結局、文化程度の進んだベンガル州を中心とするもので、その數も決して他國に比して多いた言へなかつたが、一九〇九年には、遂にロンドンに波及し、C・ウイリイ卿の暗殺事件となつた。

カーゾン卿のベンガル州分割政策(註一)は、この空氣を前にして宛かも火藥庫に火をつけたやうなものであつた。テロリズムは益々横行し、外國商品のボイコットが始つた。現在の國産運動はその頃から起り、印度産業資本家も遂に彼等を援助するやうになつた。而も當時の國際情勢が、深刻に印度へ影響し始めてゐた。日露戦争に於ける日本の輝しき勝利と一九〇五年のロシア革命は、全アジアの植民地國家に驚愕と自信を與へた。トルコ帝國も崩壊し

た。この波に乗つた民族思潮は意識的、組織的となり、全印に火の如く燃えさかつた。

カーゾン卿の政策は、國民會議派の兩派をして一時共同戦線を張らしめたが、一九〇七年のスーラット大會に於て再び分裂し、民族主義者の一派は遂に同派を去つた。一九〇五年以降の運動は、「モント・モレーイ改革案」(註二)を獲得する事に成功した。然し、一九一一年以降の運動がやゝ低調であつたにも拘らず、この改革案の出現が餘りに遅れたため、最早や何人をも満足せしめなかつた。一九一五年にゴカールが死に、同年更にテイラックが釋放せられたため、左翼は再び勢力を盛返した。テイラックは二年間静養の後、ピサント夫人(註三)と自治聯盟を組織し、一九一七年に同派のヘゲモニーを掌握した。

(註一) 一九〇五年東ベンガル州を二分して、東半部をアッサム州に合併せしめる目的で強行せられた政策である。これはベンガル民族主義運動の力を弱め、併せてゼミンダール制に基づく土地所有の資本主義化を目的としたものであつたが、同一年東ベンガルは再びベンガル州に復歸した。

(註二) 一九〇九年強行政策を以て知られたカーゾン卿と交代せる總督モント卿と、印度事務相モレーイ卿の合作になるもの、中央立法議會の定員十六名を一躍六十名に、又州議會はパンヂヤブ、ビルマの三十名を除いて五十名に増員、同時に又回教聯盟の要求を容れその選挙に際し、宗教別比例制を始めて採用する等、極力反英氣勢の緩和を圖つた改良案である。

(註三) アンヴィ・ピサント夫人、マドラス出身で一九一七年度國民會議派議長。

第一次歐洲大戰は、印度にとつて極めて重要な意義を持つてゐた。總數百二十萬に上る印度の軍隊は同盟國側に立つて世界各地に轉戦し、二十八萬の犠牲者を除く兵士達は、何れも血のにじむ新しい經驗を持つて郷里たる農村へ歸つて來た。かくて大戰は純然たる西洋模倣や、それとの自由主義的關係を一掃した。更に我々が第二章に述べた如き

躍進的工業發展が大戦中に齎らされ、印度は巨額な利潤(註一)を獲た。印度資本家は、かくて第一次大戰以來次第に頭角を現はし、最早や看過し得ざる存在となつた。

殊に大戰勃發と同時に、英國駐屯軍の大部分と英國市民の多くが印度を離れ、印度人は英國の印度侵略以來、最大の支配權を享受する事が出來たのである。従つて大戰が終り、英國駐屯軍やその他の市民がこれ迄通りの英印關係を持續し得るものと信じて歸つて來た時には、既に戦後の世界を風靡してゐる民族自決の精神が印度にも侵入してゐて、國內情勢の一變してゐるの知らなければならなかつた。

(註一) 由來、出超國であつた印度は、一九三〇年世界恐慌の來潮する迄は一年八億ルピー以上も出超の年あり、これによつて蓄積された富は黄金のみで一億四千五百萬オンスと見積られた。

然し一九〇五年後の運動がモント・モレーイ改革案となつた如く、戦後の運動は「モント・フォード改革」(註一)の讓歩となつた事が注目せられる。然しそれも當時の風潮から見れば既に時代遅れのものである。何故なら、印度は戦時中の功勞によつて當然自治を許される事と期待してゐたからである。その改革案は印度事務相モンターギユの訪印後始めて發表せられた。改革案の内容をなす兩頭政治制度は、結局何者をも満足せしめず、遂に失敗すべき運命にあつた。この複雑な制度は、立法議會に於て無責任に議論する權利を國民の代表者に與へ、民衆の激怒に一層油を注ぐ結果となつた。政府提出の法案は悉く否決せられ、これを擁護するものとしてなく、僅かに總督權の發動によつて強行實施せられる有様であつた。

(註一) モンターギユ・チエルムスフォード改革案、現行統治法の基礎をなす一九一九年の印度統治法。これは一九一七年八

月英王下院に於て印度事務相モンターギユ氏が「英王政府の政策は印度に於ける行政各部門に印度人を漸増的に關係せしめ、自治の制度を擴張する事に存す」と述べた趣旨を同十九年成文化したのも、その特徴とする所は各州にこれ迄中央政府の有力な権限の一部を譲渡し、知事及法律の規定によつて任命された部長官の統轄する委譲事項の兩頭制が施行された事である。即ち、この改革に於て中央政府は直接外交、軍事、宗教を掌握するも立法議會に責任なく、各州も、州行政の中心をなす條項を留保事項としてこれに對しては行政會議及英國議會に責任あるも、州立法機關へは責任なく、比較的重要ならざる委譲事項に關してのみ行政長官の輔弼をうけ立法機關に責任を有すると言ふ牛頭狗肉の譲歩、改良案であつた。

三、ガンデイ指導下の國民會議派(その一)

然しこの大戦後の混亂と雨雲の往來する印度の空にも、一つの星が現はれて來た。それは南阿の印度人解放運動に輝かしい業績を残したモハン・カラムチャンド・ガンデイの出現である。彼はこれ迄印度の民族運動には何等の役割を演じた事もなかつたが、大戦中その枯木の如き裸身をボンベイに現はし、一九一七年にはビハール州チャムバラ地方で白人農園主に虐待せられる小作人のために戦ひ、更はグジュラートのカイラ地方の農民のためにも戦つた。そしてその南阿時代に會得した非暴力闘争の摩訶不思議な戰術を以て、忽ち全印を魁し去つたのである。而も當時は擡頭する民族運動の風潮の前にティラックは死に、ビスアント夫人も戰闘的でなくなつてゐる。即ち新しい指揮者の登場すべき舞臺は、既に幕を開けて待つてゐたのである。

一九一九年のローラット法——それは明かに民族運動の彈壓を目標として正式の手續を経ることなくして逮捕、又は公判に附する權利を政府に保障する苛酷な治安維持法であつた——の公布は、重病中のガンデイが病床から總督に

宛て、その法案に同意を與へぬやう懇願したにも拘らず、遂に實現した。ガンデイは遂に同年四月六日非協力運動開始の宣言を行つた。印度民族四億の感情は全印各地に爆發した。かくてバンデヒラプ州の騷亂と歐羅巴人數名の殺害事件は、同地方に戒嚴令を公布するマーティアル法となつた。

同年四月十三日アムリツツア市に於て、町の祭見物に來た農民やその家族の一團が、官憲の制止も聞かず三方を高い塀に圍れたジリアンワラ園へ大會を開くために集つた時、ダイヤー將軍は解散命令に従はない事を理由に發砲を命じた。武器を持たぬ千六百五名が、一團となつて銃火の洗禮を受けた。装甲車が街路の外側に待つてゐた。死者三百七十名、負傷者は少く共千二百名を下らなかつた。軍隊は何物にも遮げられず傍若無人に振舞つた。

その翌日、附近のグジュランワラ村の暴徒に對して空爆が行はれ、機關銃が使用された。印度は完全に恐怖時代に見舞はれた。官憲の拷問、虐殺は珍らしくなかつた。民衆は出會ふ歐羅巴人に「サラムド」(額に手を擧げる意)と敬禮しなければ處罰され、シェルウッド嬢と云ふ英國婦人が凌辱された街路を、印度人が通ると犬のやうに這つて歩かされた。學生は灼つく五月の暑さに卒倒しさうになりながら、數里の道を遠しとせず、警察へ出頭して毎日自己の所在を届けなければならなかつた。

この事件は世界的衝撃を呼んだ事件だけに、詳述する必要があるかも知れない。コンノート公爵は「アムリツツアの暗い影が美しい印度の顔を遮面せしめた」と述べたが、この事件もしばらくは戒嚴令下にあつて外部へ傳らなかつた。然しその真相が明らかとなつた時、四億の全印度民衆の憤激は天を衝いた。ラビンドラナ・タゴールも天を仰いで正義の失はれた事を慨き、ガンデイ又與へられたメダルを政府へつき返して彼等を「惡魔」と罵つた。

かくてこの事件を調査するために組織された委員会は、ダイヤー將軍を有罪と宣告した。殊に、ダイヤー將軍が「精神的威嚇として非武装の群集に發砲した」と云ふ彼の自白は民衆を驚かした。それは「白人の世界の何處——アイルランドに於てさへ用ひられるとは考へ得ない所の惨虐極まる手段」と述べられた。然し、ダイヤー將軍が英本國新聞、英國議會議員の壓倒的多數から支持を受けるのを見た時、印度民衆の悲哀は一段と深刻化された。將軍は現役を退いたゞけで、年金の恩恵は剝奪されなかつた。然しこのためガンディの非暴力運動は、更に多數の大衆の支持を受け、効果的に運動を繼續する事が出来た。回教徒も英國がイスラム強國の一たるトルコと戦つてこれを征服した事實に不満であつたので、やがてそれが回教宗主權運動と結付いて、國民會議派との共同戦線を實現したのであつた。全國到る所に宗主權委員會が設立せられ、彼等の希望であるアリ兄弟は、國民會議派と提携して或る地位を占めたが、やがて投獄せられた。然しこの共同戦線に弱點のあつた事は多くの者が指摘してゐる。數年後カリフが倒れ、ケマル・パシヤの指導下に民族國家としてのトルコが生れるや、一九二四年三月委員會はその意義を失ひ、多數の回教徒は當時改組されて反會議派傾向を強めた回教聯盟に参加した。

一九二二年十二月、英國皇太子の印度訪問に際しても廣汎な暴動が印度を軋り、翌二二年二月には聯合州チャウリ・チャウラ村に於て、民衆と警官の間に衝突が起き、發砲した警官に對する焚殺事件に發展した。ガンディは彼の理想とする非暴力の破れた事を知るや「ヒマラヤの如き大誤謬を犯した」と宣言して運動を中止し、運動の困難を招いた。最初の非暴力運動は色んな形をとつて行はれ、或は英國からの輸入綿布のボイコット（註一）、或は國產獎勵運動、或は辯護士による法廷のボイコット——多數の代表的な富裕な辯護士の中には率先國民會議派に投じたC・R・

ダスマ、モテイラル・ネールやラジェンドラ・プラサドの影響によつてその生活を捨てる者が多かつた——學校のボイコット、そして又同時に立法議會のボイコットと云つた形を採つて現はれた。

（註一）一九二二年七月三十一日ガンディは外國製の綿布を山と積んで彼自身の手で焼いてゐる。

この運動は繼續すればする程次第に波も高くなり、ベンガル州に於て最も強く、それを實行しない州は一州もなかつた。而もそれ等はバンジャブ地方のアカリイ・シーク族の叛亂や、ベンガル州ミドナポール地方の納稅ボイコットや、南印度モブラー族の叛亂等によつて一段と強化され、印度は前古未曾有の困難に陥つたと云ふ事が出来る。國外に於ても又これに呼應するが如く、シン・フェイン運動が劃期的な成功を納め、埃及のワフデイスト黨も活潑に闘争を展開した。この英國を取巻く客觀情勢の不利に基いて、總督も遂に國民會議派と妥協を決意し、バンディット・マラヴィヤを入獄中のダスの許へ派遣した。ガンディは自治を一年以内に實現すると約束したが、その年も殆んど終り、一つでも妥協點に達し得れば非常な勝利と見られる形勢となつた。然しガンディは仲々その協定條件を承諾せず、一九二二年十二月に始まる總選舉の嵐は、彼を除くC・R・ダスマやラージバット・ライやボースやネール父子等殆んど全部の指導者が投獄せられ、その數實は三萬人に上つた。

トルコに於けるカリフ制度の崩壊と非暴力運動拋棄の宣言は、ガンディの人氣を非常におとしたので、この機會を捕へて時の總督リーディング卿は彼を逮捕した。その裁判は歴史的な事件であつた。印度人基督教徒たるK・T・ポールは、彼を十字架の前に立つキリストになぞらへた。ガンディは自ら農民兼織工と名乗り、堂々たる態度を以て彼が忠實な英國の友から社會の安寧を紊す人間となり、遂には非協力運動の實行者となつた経緯を述べた。彼はその判

決を宣告する時、當惑を感ずると述べるブルームフィールド判事によつて、懲役六年の刑に處せられた。然し彼は一年後に釋放せられた。時に國民會議派ではダスと大ネールの一派が立法議會を自由獲得の舞臺とすべしと主張して、合法運動に轉ぜんとした。ガンデイ一派は猛烈に反對し、ダス及大ネールの一派は自治黨を組織した。後、兩者は和解して共に立法議會の選挙戦に出馬し、非常な成功を納めた。自治黨の團結は極めて堅く訓練も行届き、言はゞ一種の議會急進派となつた。

雄辯家で詩人的熱情に富むダスは、一九二四年から二五年にかけて國民會議派の實權を握つてゐた。合法舞臺の輝かしい指導者である彼は、ガンデイの指導に不満を抱く左翼と、運動を合法的活動に終始せんとする右翼を融和せしめる事に成功した。このため會議派の指導權から遠ざかつたガンデイは釋放後、國産獎勵運動に一時没頭し、全印紡績工協會の設立に成功した。

かくて、會議派内にも暫く平和時代が訪れた。一九二四年聯合大會が大多數の出席者を得てデリーに開かれ、ガンデイは三週間の斷食を始めた。統一を強化する方式が考へられ、大會そのものは文字通りの成功を納めたが、その實益は極めて少なかつた。

ダスには一時政府と臭いと云ふ噂が立つた。彼は時の印度事務相パーケンヘッド卿に非常な希望をかけ、その印度に關する聲明を待つ事久しかつたからである。彼は一九二五年六月それを見ずして死に、その後に行はれたパーケンヘッド卿の聲明には彼の期待するが如き特色は何等見られなかつた。彼の死後は自治黨の勢力も衰へ、最早やガンデイの指導を云々する者もなかつた。

一九二五年ヱイタルバイ・パテルが大會議長に選ばれた。彼は有名な辯護士であると同時に、幾らか底意地の悪い紳士で、立法議會の權威を高める一方、兩頭政治の非を鳴らした。一九二七年、チエルムスフォード改革の實績と印度に自治の能力ありや否やを調査する目的で、英人七名から成るサイモン委員會が任命された時、その中に印度人委員の一名もなかつたため、全印に暴風雨的反響を呼んだ。かくて同委員會は到る所でボイコットせられ、その姿を見るや弔旗を掲げて迎へた地方もあつた。政府の舊官吏と辯護士から成る反動的な自由聯盟ですら、それと協力する事を拒んだ。

メーヨー嬢の著書「マザー・インディア」(註一)はそれに油を注ぎ、英國人の心を暗くした。この書はガンデイが「下水検査官の報告」と酷評する所の著書であつたが、これを讀めば誰しも印度人に獨立の價値なしと結論せざるを得ない酷いものであつた。従つて印度人の中には、それが英國側の希望に基き、印度の獨立運動を妨害する目的で書かれたものと信ずる者も多かつた。かくて再びテロリズムが横行し始めた。バンジャヤ青年は、最早や革命的な社會主義以外、印度には獨立の道なしと主張し、切迫した空氣は、刻々高まつて來た。

(註一) アメリカ女流記者の印度訪問記で、餘りにもその暗黒面の描寫に終始したため、同名の寫眞帖は印度に於ても發賣禁止となつてゐる。

四、ガンデイ指導下の國民會議派(その二)

かくて一九二八年ガンデイは再び登場して國民會議派の指導者となつた。彼は一九二九年のラホール大會で、若し同

年末迄に印度の獨立に關する協議が英國側に於て行はれないなら再び市民不服従運動を開始すると總督に警告した。この大會は、その前年の「ネール草案」による完全自治の要求から、完全獨立の要求へ飛躍した記念せらるべき大會であつた。然しその要求の容れられざるを知つて、一九三〇年三月に火蓋を切つた最初の市民不服従運動は、印度の未だ知らざる最も大衆運動に近い形式を持つもので、中産階級の下層や農民層をも動員してゐた。

この時ガンディは印度民衆の日常生活に最も必要な鹽專賣法を闘争の目標として取上げ、三月十二日の拂曉、アーメダバードのサバルヤティ道場で鍛えた同志七十五名の眞理把握團を率ひて行進三週間、印度東海岸キヤムベル灣頭のダンディに赴き、禁制の鹽製造を開始する事によつて、闘争の火蓋を切つたのである。然し當時の勞働者階級のみは、共產主義者の指導下にあつたため、ガンディを資本主義の手先と攻撃して、その運動に参加しなかつた。それは植民地闘争の民主主義的性質を理解しない誤謬であつたが、その結果民族統一戦線の新政策も、結局××主義者が過去の大衆運動に於て殆んど何等の役割をも演じなかつた事と、過去の機會主義的な古い指導者が依然民衆の上に君臨してゐたと云ふ事實により、暗礁へ乗上げざるを得なかつた。然し當時の國民會議派にも、勞働農民の組織過程にこそ大衆動員の基礎があり、眞の獨立闘争の過程がある事を充分理解してゐるとは言へなかつた。又當時の運動にアーメダバードの紡績業者が資金提供の役割を擔當してゐたと言ふ事實も否定出来なかつた。かくて國會議派はその全歴史を通じ中産階級を母胎とする事は明かであつたが、ガンディの指導下に移つてからは、その過去に於て知らなかつた社會の諸要求をも糾合して、次第に全印度社會の民族運動となる傾向が強くなつて來た。

このガンディ運動の今一つの特徴は、これによつて印度婦人の覺醒を促した事であつた。彼女達も、市民不服従運

動には大きな役割を演じた。ヒンズー社會の貴族やボンベイに住む富裕なバルシー族の艶紺色のサリを着て隠遁生活を送る婦人迄が、飲食店や呉服屋の見張りに立ち、示威運動の案内役を勤めて警官に殴打され投獄せられた。ネールもその自叙傳中に、彼のか弱い母親が警官のため如何に慘酷に鞭打たれたかを述べてゐる。かくしてその閨房から始めて飛出し、二度と歸らない婦人も多かつた。そしてその後は公的生活に於ける彼女達の活躍も次第に表面へ現れ、聯合州の會議派内閣には著名な女の大員迄居たが、兎に角、當時はこれ等の現象も劃期的な事件と言へた。その後、賤しい階級に屬する國民會議派の婦人は一九三七年の總選舉當時、反動的な自由聯盟の指導者の一人を投票場に於て殴つた事件もあり、教養ある若い回教徒の婦人で、現に北印度の某市に於て苦力組合の書記を勤めてゐる者も現れた。そして又、社會主義一派の指導者中には婦人が二人迄ゐる程で、これ等は凡てガンディ出現以後に現はれた現象である。

かくてその當時の印度は時に悲劇的に、時に喜劇的に目まぐるしく動いた。肥つた警官が國民會議派の機關紙「コングレス・バレットイン」を賣歩く少年を逮捕しやうとすると、少年達は逸早く警官の股を潜つて逃げ、皮肉にもその後から大きな聲で「コングレス・バレットイン」と叫び、これに憤慨した警官と少年のアメリカ映畫に見るやうな喜劇も隨所に見られた。

又劍を吊つた長身の兵士であるアカリイ・シーク族などは、この非暴力運動が始まるや、その前途を祝して祝盃を舉げ、最後迄彼等の旗を守らうと決議した。そして警官に襲はれその棍棒に殴られて一人が倒れると、他の者が旗を守り、男が全部倒れると今度は女だけで旗を守り、遂にその女軍の猛撃に警官も退却したと言ふ挿話が残つてゐる。

これ等は當時起きた極めて小さな二ツの現象に過ぎなかつた。先に述べた真理把握團(註一)の活動はもつと印象的であり、それは單に血を流すか流さないかの差異だけを持つた戦争と言ふ事が出来た。小さなグジュラテイ人の少女は「お父さんを勘忍して！」と叫んだゞけで警官に殴られた。ガンデイは鹽を造りに出かけただけで逮捕せられ、民族主義系の新聞は聖マルコ寺院(註二)の福音書から「彼等ハ來タリ、夜祕カニ彼ヲ埒シ去リヌ！」と云ふ言葉を借りてガンデイ逮捕の標題とし、世界二十二ヶ國を知るU・P通信社記者ウエツプミラーをして「世界何處の國に於てもかゝる悲愴な光景を見た事がない」と嘆ぜしめた。然し、多くの者にとつてこの運動は、彼等の訓練であり、一服の清涼劑であつた。それは長らく卑俗な地位にあつた東洋の巨人、印度人の自尊心を或る程度迄回復する事が出来たからである。だが、結局最後には指導者全部が投獄せられ、その數十萬と目されて、壊滅した。

(註一) サツチャグラハ(真理の把握或は護持)はガンデイ哲學の中心をなすもので、彼獨特の非暴力、非服従の闘争もこの一部をなすに過ぎない。當時彼は前記のアーメダバッド市のサバルマテイにこの道場を作り、サツチャグラハ團なる彼の親衛隊を組織したのである。

(註二) 伊太利ヅエニスの大寺院

一九三〇年十一月、第一次圓卓會議が藩王國君主と政府の任命者と云ふ英國のお手盛りでロンドンに開かれた。彼等が聖ジエームス官廷に坐つて討議してゐる時でも、その中の或る者や妻迄が運動に参加して警官に殴打され、投獄せられた。遂に總督はガンデイを釋放し(一九三一年一月)、休戦ラヅバが鳴つた。これはガンデイ側の讓歩によるもので、ガンデイ・アーウィン協定がこれであつた。然しガンデイは同派のカラチに開かれた同年十二月の大會に於て、運動中止の命令を發した事を痛く攻撃せられた。折しもデリーに勃發した爆彈事件の首謀者として知名な青年バ

ーガット・シングが死刑に處せられるや、會議派青年層の憤激は爆發點に達して、一時分裂の危機に當面したが、結局これもガンデイの巧妙な外交手段によつて事なきを得た。即ち、ガンデイはバーガット・シングの父を説得して、彼等にガンデイの指示に従ふやう懇願せしめたからである。

第一次圓卓會議は、印度を聯邦組織にするに云ふ原則を決定したのみであつたので、この原則を發展せしむべき第二次圓卓會議の召集が目捷に迫つてゐた。ガンデイは同派大會に於て自己の運用委員會を選出し、その運用委員會の決議を待つて始めて第二次圓卓會議へ出席した。彼は飲料用の山羊をつれた半裸身で、ロンドンに現れ、新聞の第一頁を飾る話題の人物となつた。然し彼は多くの友人を得たが、それ以外には何物も得なかつた。會議は劈頭から少數黨問題で暗礁に乗り上げ、そのまゝ、流會となつた。第三次圓卓會議(註一)の結果も一九三一年の危機(註二)と總選舉によつて前途の見透しがつかなくなつた。

(註一) 一九三二年十一月から十二月にかけて第三次圓卓會議が開かれ、過去二回の會議の結果を綜合せんとしたが、結局國民會議派及英國労働黨が参加しなかつたため、何等の結果も獲られなかつた。

(註二) 一九三一年七月より再燃した反英運動及一九三二年一月に始まる第二回市民不服従運動、これに伴ふガンデイの逮捕を指す。

この運動の間ベシヤワルには戒嚴令が施行せられ、民衆に發砲する事を拒絶したガールワル聯隊はアンダマン列島へ移駐を命ぜられた。アブドル・ガフアール・カーンはクダイ・キドマガール、即ち神の下僕黨を組織した。彼等は眞赤のジャケツを制服として着てゐたゞめ、「赤シャツ黨」の異名を以て呼ばれ、共產主義者の團體と考へる者もゐたが、その實、非暴力のガンデイ主義を嚴格に守る一團で、共產主義とは何等の関係もなかつた。國境州に於けるこ

の慄悍なる回教徒バタン族の運動は、附近の蠻族と結付く危険性があつたため政府を恐怖せしめ、特別警察が同地へ乗込んで来て、絶え間なく彈壓の手を延ばした。このため同地は一瞬にして恐怖時代を迎へる事になつた。

先に述べた聯合州農村の悲惨な生活状態は、やがて地代不納運動となつて爆發しベンゴール州に於けるテロリズムの連続はアーウィン總督に代るウエリントン總督をして、その範圍の極めて廣汎な極めて苛酷な特別取締法（一九三一—一九三六年）を發布せしめるに至つた。かくてガンディは再び牢獄へ戻らねばならなくなり、休戦の時期は終つた。國民會議派は遂に非合法團體と宣言せられるに至り、騷亂、彈壓、又騷亂、印度は遂に四分五裂の状態に陥つた。これを見たガンディは獄中に於て例の斷食を行ひ、一九三四年遂に刑務所を釋放せられたが、時既に遅く國民會議派の勢力は衰へ、組織も殆んど壊滅状態近かつた。

この折、ガンディの試みた斷食に就ては、外國に於て可成り誤解せられた。嚴重にヒンズー教の戒律を守る彼として、斷食は勿論眞摯な勤行の一に過ぎない。然し、少く共この場合の斷食は不可觸階級を彼の理想たる階級撤廢の立場から、廣く印度社會へ包含せんと考へてゐるが故に、彼等を分離選舉制の下に置かんとした當時の政府の方針に抗議したまでの事である。ガンディをして云はしむれば、不可觸階級を「被壓迫層」と呼ぶ事自體、さうする事によつて惡徳を恒久化する事であつた。かくて、この死を覺悟しての獄中に於ける斷食は全印度を慄え上らせ、これ迄は不可觸階級に境内へ入る事を許さなかつた寺院の門も一齊に開かれ、食卓を穢すと云ふ理由で一緒に食事をする事を禁じられてゐた町の食堂も一齊に解放せられた。ガンディとヒンズー社會の間には遂に妥協が成立し、ブーナ協定が承認せられた。これは相當期間實行せられて不可觸階級に大きな歡喜を與へたが、依然、頑固分子の間では嫌惡の對象

となつてゐた。

一九三三年度の會議派大會は、政府の彈壓によつて非合法裡にカルカッタに開かれた。この時の議長、老バンディット・マラヴィヤは、遂に大會に参加せずして逮捕せられたが、大會席上彼が朗讀する筈であつた議長就任演說草稿には、過去十五ヶ月間に於て婦人及少年の數千を含む十二萬人の同派會員が、投獄せられた旨を述べてゐる。政府は僅か六週間を以て同派を粉碎すると豪語したが、その間十五ヶ月を費しても理想の貫徹は不可能であつたし、例へその二倍の期間をかけると言へ、依然見込みは立たなかつた。而もそれが會議派中最も長老であり、溫健派の代表者マラヴィヤの意見であつた事は注目される。事實、當時の國民會議派には一舉に革命の烽火をあげる用意もなく資金獲得の途は絶たれ指導者は次々に逮捕せられてゐるのである。然し、それでも運動が完全に參つたとは云ひ得なかつたし、又ガンディの不可觸階級の解放を意圖する斷食も、同時に政府の彈壓に對する牽制運動ともなつた。彼は刑務所より釋放せらるゝや、政府彈壓の被害の餘りにも大きいのを見て、即日不服從運動の中止を宣告した。彼の所信によれば、印度は廢墟の上に自由を欲しないのであつた。會議派會員は彼の命令に萬腔の不滿を表明し、叛亂さへ起さうになつた。然し刑務所生活に害はれた彼の健康が依然思はしからざる事がこの危機を救ひ、運動は中止せられた。一方當時の政府は、ガンディの休戦申込みに應ぜず緊急取締令の廢止や政治犯人の釋放も肯じなかつた。總督はガンディの面會申込みすら拒絶した。かくてガンディの奥の手である——そして今次大戰下にも行はれた——個人的不服從運動が、總督の拒絶に對する民衆の威嚇として行はれたが、最早や此處迄敗退しては落日の勢を盛返す術もなく、更に數百名の指導者が檢舉せられた上、ガンディ自身も又刑務所へ逆戻りせざるを得なかつた。

かくて如何にガンデイとは言へ、聳え立つ刑務所の練瓦塀に遮切られて漸く緒についた不可觸階級の解放運動を、思ふやうに實行し得ない事を知るや、又もや死を覚悟しての斷食を開始した。これは明かに一般の見る如きハンガ―・ストライキに似た一種の恐喝であつた。然し彼の死を恐れる印度政府は三度彼を釋放したが、今度は条件をつけられてゐた。ガンデイが自己を刑務所にゐる囚人と同様と考へて行動する事、一九三四年八月迄は市民不服従運動を開始しない事などがそれであつた。このためガンデイも會議派が政府攻勢の前に崩壊したと述べ、残る同派組織を一應解消するやうにとの指令を發した。

左翼の代表者ジャハルラル・ネールが愛妻カマラの危篤の報に、それ迄收容せられてゐたデーラ・ダン刑務所から釋放せられたのは實にこの時であつた。然しこのガンデイの屈服に對する彼の反對を恐れる政府は、その釋放後僅か十一日にして再び彼を逮捕し、ナイニ刑務所に收容した。この状態に直面すると最早や立上る者はなかつた。會議派は明かに解體し、市民不服従運動の形骸だけが残つた。國民會議派では合法的舞臺に轉じ、中央立法議會の選挙戦に出馬することが決議せられた。ガンデイ自身もそれに賛成し、この時新たに組織せられた社會主義者黨(註一)のみがこれに反對した。

(註一) 一九三一年アメリカより歸國し、市民不服従運動當時の會議派實行書記長であつたジャヤ・プラカツシュによつて一九三四年九月に組織せられたものである。

この社會主義者黨は、政府彈壓の下に次第に左翼化する中産階級の政治的意欲を代表したが、この事は取りも直さず同派に君臨するガンデイの指導に一抹の不滿を感じる社會層が印度に生れた事を物語つてゐた。又ヒンズー・コム

ミュナルとして知られる宗教問題に對するガンデイの處置に憤慨した正統派の一團も、同年十月その指導者マラヴィヤの下にナシヨナリスト黨を組織した。ガンデイはこれ等反對勢力の擡頭を恐れて遂にボンベイ大會に於て隱退を聲明して、不可觸階級運動と農村工業問題に没頭する事となつた。然し彼は會議派運動の背後にかくれ、巧みに同派内に残るガンデイ派に呼びかけ、彼等を右翼と提携せしめる事によつて、同派の色彩をこれ迄よりも温健なものに塗變へる事に成功した。即ち彼は最も強硬な反對分子ナリマン(註二)を運用委員から除名し、更に激論數次、遂に彼を精神的に葬去る事にも成功したからである。折しも一九三五年、本國下院を通過した修正印度統治法(註三)は、同七年四月から先づ英領十一州に自治を施行する事となり、同年一月から二月にかけ男二千五百萬、女五百萬の有権者によつて第一回總選挙が行はれる事となつた。國民會議派では、この統治法實施に對し、(イ)それが英國人の手に成つて印度人の預り知らぬ事、(ロ)總督の獨裁權が依然維持せられて印度に未だ自治領の地位を與へぬ事、(ハ)藩王國の中央干涉權を強化した事の三つを理由に猛烈に反對し、この選挙戦に出馬するか否かは非常な問題となつた。然しそれが州議會の合法舞臺に於て國民の信任に應ふべしとして選挙出場が決定せられた時、その指導者には、ガンデイの微温的態度に慍らぬ一派の運動によつて、折しも愛妻カマラの遺骨を抱き歐羅巴から歸國したネールが選ばれた。

ネールはかくて旋風の如く全印を駆けめぐつた。或る時は鐵道、或る時は自動車、或る時は飛行機すら利用して、全印を飛び廻り、印度民衆の經濟的要求を高く掲げて獅子吼すると共に、「この反動的な印度統治法は立法議會の行動のみでは倒せない、その爲には外部の大衆運動が必要であり、自由の爲の戦ひの本隊が常に民衆の組織と行動にある事を忘れてはならぬ」と叫ぶ事を忘れなかつた。

選挙は豫想通り國民會議派の壓倒的勝利に終つた。國民會議派は總議席千五百八十五の中未決定の七を除いて七百十五の多數を獲、六州に於て絶對多數を、三州に於て第一黨となつた。ネールは當選議員を全部デリーに集め、「予は印度のために一身を捧げ、議會の内外に於て印度獨立のため及印度民衆の搾取並に貧窮絶滅のため、盡すことを宣誓す」と盟はしめた。然しこの選挙の結果が、國民會議派の勝利を獲た諸州に同派の内閣を組織する事を要求した時、ネール及社會主義者黨は會議派が統治者の地位に立つ事は議會依存の消極的感情を民衆に植付け、終局の目的たる「獨立」に向ふ足並みを鈍らせると言ふ理由で、猛然反對した。然しガンデーは會議派の背後よりそれが流血革命に代る唯一の道である旨の意志を發表したので、同年七月同派は遂に組閣を承諾、先づ七州に組閣したが後ガフアール・カーンの兄を首相とする國境州がこれに加はり、都合八州となつた。かくて同派の各州大臣は四月前の堅きデリー宣誓も忘れ「國王、皇帝陛下及其の後繼者に忠誠を勵むべし」と今度は英國側に宣誓したのである。従つて各州大臣に就任した會議派員は、ラジャゴバラチャリイ（マドラス州首相）を除いて何れも右翼系の、それも二流人物のみであつた。

(註一) 彼は元ボンベイ市長で選挙處置を誤つたといふ理由で、一九三六年査問委員會に附されて處罰された。

(註二) この統治法は前記サイモン委員會の報告を基礎として第三次圓卓會議に於てその骨子を決定せるものである。その要旨は

(イ) 英領印度（一州、六直轄地）及藩王國（五八四）を以て聯邦政府を組織する。

(ロ) 英領印度の民衆に自治權を與ふ。

(ハ) ビルマの分離。

の三項目で、中央銀行設置が完了し、少く共一二の主要藩王國の承諾を待つて實施される筈であつたが、後二者を實現した

外、肝心の第一項が纏らず今次大戦を迎へて無期延期となり、目下新たな解決案を討議中である。

然しこの州選挙に於ける歴史的勝利は、再びガンデーを同派の表面へ返り咲かせる事となつた。彼は骨ばつた瘦顔をほころばせ、「ヒットラーが劍もてなせる所を、余は魂もてなせり」（一九三七年ハリジヤン紙）と豪語した。六月以後の雨期には牛車も泥濘に車輪を埋めて通はぬ中央州ワルダの僻村（彼の居所）には再び巡禮者が群れ集り、一切の命令は又この最高司令部から正式に發せられるやうになつた。臺閣に列した會議派内閣は、彼の意志によつて先づ閣僚の減俸を斷行し、政治結社の禁止を解き、全官吏に印度國旗に對する敬禮を求め、立法議會の開始に當つては會議派國歌を合唱した。

然し野戦の勇者は必ずしも政臺の賢者ではなかつた。國民會議派内閣がその支配する八州の中七州に實施した（註一）禁酒令は、各州政府に總額六千九百五十萬ルピーに上る巨額の收入減を齎らし財政難に陥入らしめた。又選挙當時民衆に與へた各種の約束も統治者の立場に立てば實行不能のものもあつたので、社會も騒然となつて來た。彼等がビハール州に於て實行した小作權の保護や、公衆保安法の撤廢も微温的であるとして農民騒動が連続し、ボンベイ州に於て實行した勞働爭議調停法も徒に勞働爭議を激化する事に役立つだけで、結局彼等を煽動する自派黨員を逮捕しなければならぬ破目に陥入つた。而も彼等の行動を社會主義的なりと非難して、その背後から支援を與へてゐたヒンズー社會や資本家階級が分離し始めたので、これ等の事情を綜合して右翼の勢力は急速に失はれ、代つて急進派の進出となつた。一九三八年及三九年の二回に亘つて最急進派の スバスユ・ボース が同派議長に選ばれたのも、この事情を物語つてゐる。今次歐洲大戦の旋風は、實にかゝる情勢に於て國民會議派を見舞つたのであつた。

(註一) この禁酒令はボンベイ州に於て収入の二五%、三百二十萬ルビー、聯合州に於て全収入の二〇%、百五十萬ルビー、ビハール州に於て二〇%、百萬ルビー、中央州に於て一・四%、六百萬ルビー、アッサム州に於て一〇%、四百五十萬ルビー、オリッサ州に於て一二%、二百萬ルビーの減收となり、これを一部所得税の州委譲と漸進棒給税の設置によつて危じて切抜けた。

五、ガンデイ出現以後の國民會議派(その三)

一九三九年九月三日歴史的な英本國の對獨宣戰布告が行はれた翌四日には、リンリスゴー總督が「印度も又交戰状態に入つた」と宣言し、特にガンデイを招致して對英協力を要請した。然し第一次大戦當時の苦汁を知る會議派は、今回慎重であつた。既に戦前印度兵のアデン(四月)及埃及、新嘉坡派遣(八月)問題をめぐつて參戰反對の態度を明かにしてゐた同派は、九月十四日ガンデイの居村ワルダに運用委員會を開いて政府との最少限の妥協條件を決議し、十月十日の全印委員會の承諾を得た上、ネール及ブラサド(同年度議長)をしてこれを總督に手交せしめた。その條件とは全體主義國家には飽く迄も反對するが、同時に又總督の前記聲明が印度民衆の承諾なくして行はれた事を非難し、若し英國が眞に自由と民主主義擁護のために戦ふなら、先づ印度に自由を與へよと言ふのであつた。然し英國の態度は極めて冷淡で、十月十七日の英國白書を以て單に戦後印度の自治を考慮するとにべなく一蹴した。此處に大戦下の反英闘争が、開始された。

會議派では直ちにその闘争機關としてネールを指導者とする緊急戦時委員會を設置し、同二十三日英領八州の同派内閣に對し一齊辭職を命じた。各州内閣は何れも合法舞臺の輝しき勝利の鐘を納めて十月二十二日のマドラス、聯合兩州を先頭に十一月十日迄には全部姿を消した。それに先立つ事一ヶ月、ゼットランド印度事務相が英國下院に於て「各州内閣は彼等が當面する問題を處理し得る能力を立派に示すと共に、驚くべき精神を以て、その知事と協力する能力のある事を示してゐる」と演説し、リンリスゴー總督又これを承認した直後の事件であつただけに、皮肉であつた。かくて總督はこれ等諸州の統治を知事の非常權限下に置き、アッサムを除く前記七州は、三人の政治顧問を持つ知事の獨裁下に置れる事となつた。かくてこの七州に關する限り、英領印度は一九一九年以前の狀態に復歸したのである。然し今回の英本國は前回と異なる未曾有の困難に置れて、第一次大戦當時の兵員及軍備に倍する援助を、印度に求めなければならぬのである。印度總督はこのため前後五回ガンデイと面接して局面の打開を圖り、十一月二日の第三回會見に於ては回教聯盟の妥協を條件に印度最高の統治機關たる行政會議の解放が提案せられた。このため會議派代表のネールと回教聯盟代表のジンナーの間に、共同戦線の下交渉が開始せられた。然しその交渉の進行中會議派内閣の辭職事件起るや、ジンナーは奇貨措く能はずと十二月二十二日を全印度が國民會議派の壓制より解放せられし記念日として回教徒のデモを行ひ、ガンデイの抗議に遇ふや、兩者意見の相異を英國側の組織する王室委員會の公判に附せんと無謀な主張をなすに至り、兩者本交渉に入らずして決裂した。そして總督の妥協工作も一九四〇年二月を以て一應失敗に終り打切られるに至つた。

三月アムリツツア事件の責任者——當時のバンヂャブ州知事サー・マイケル・オスワイヤーが倫敦に暗殺せられ、ゼットランド印度事務相も狙撃された。今は急進派の天下である會議派では、いよ／＼反英大衆運動を展開する準備

に着手し、三月のラムガル大會に於てその足堅めを行つた。その大會決議は一應ガンディを通じて英國側と妥協する道を残してゐるとは言へ、それは飽く迄も指導者ガンディを尊重する傳統的精神に基くもので、その内容とする所は、過去の闘争内容を綜合した上、英帝國主義に奉仕する印度の物資及人的資源の供給を拒絶するものであつた。然しガンディは、ネール、アザッド、ラジャゴバラチャリイ數百度の説得に拘らず遂に立つ事を承諾しなかつた。彼の頭腦にはサミエール・ホアーの警告に續く新印度事務次官サー・ヒュー・オネールの英國下院に於ける就任演説が、こびつてゐるのであつた。オネールは「若し印度に市民不服従運動起きんか、英帝國には充分反撃の用意あり」と叫び、その背後には印度の進歩を仇敵の如く憎むチャーチル首相が温健な思想の持主であるチェンバレンに代つて登場してゐたからである。従つてその下に大衆行動を展開すれば流血の惨事を見る事は必然であり、これは東洋哲學的諦觀論に出發する彼の最も忌み嫌ふ所であつたのである。彼はその上、大衆行動の展開が一九三九年十一月三十日のハリチャン紙に述べる如く(註一)ヒンズー・回教徒の衝突となつて内亂になる事を恐れ、前三回の場合と同様、一旦行動の堰を切れれば必ずや大衆は彼の制御し得る範圍外に動いて彼の指導權の喪失となる事を極端に恐れたからで、このため彼は屢々辭意を洩らすに至つた。

(註一) 彼は下の如く述べた。「會議派各層間に於ける非暴力遵守の不確實問題と離れて、回教聯盟が我々を回教の敵と見る事は恐るべき事實なり。これは會議派をして、市民不服従を通じての非暴力革命を成功的に組織する事を充分不可能ならしめ、それは確かにヒンズー教と回教の暴動を意味するであらう」

このガンディの民衆に對する不信と回教聯盟に對する過大評價に急進派では痛く失望し、直ちに第二の行動に移つた。六月十五日彼の居村ワルダに開かれた運用委員會は激論八時間の後遂に彼との袂別を決議し、來るべき大衆行動

の中心組織として義勇自衛團の組織をサルダー・パテルに依頼した。この決議は更に七月二十七日、八の兩日のブーナー全印委員會に於て、九十一對六十三の多數を以て承認せられ、劈頭ネールは左の如き獅子吼を以つて民衆の歡呼に答へた。

「私は國民會派が能ふ限りの強力な組織たらん事を欲する。私はそれがこれ迄と同様逞ましき統一體たらん事を望む。私はマウラム・アール・カラーム・アザッドの賢明な指導を欲する。私はサルダール・パテルの偉大な政治的手腕を欲する。私はラジャゴバラチャリの輝しき才能を欲する。同志よ、私は各州の、各縣の指導者である所の諸君の一人一人を欲する……然し不斷に變化する状況の下に於ては、時が不可欠の要因である。」

獨立と言ふ輝ける星は、混亂の中から生れて來るかも知れない。又混亂の中から生れて來るものは、黒い雨雲のみかも知れない。然し將來が何んであるにせよ、我々の完全な獨立は闘争と陣痛と悲哀なしに獲る事は出來ないと、私は確信する。國民會議派が手を拱ねて餘りにも長く待ち過ぎた事は明かである。我々は、餘りにも辛飽強く、三週間は過ぎた。避け得られない闘争を前にして、我々は既に基礎的要件である所の精神的・心理的準備をも終へた。我は、我々の道を選ばなければならぬ。我々は、我々の力を前進せしめなければならぬ。残された唯一の道は、迅速な決定と行動のみである——一九四〇年七月二十九日附ヒンドスタン・スタンダード紙より——

それはネール一派の急進派が、同派の實權を完全に掌握した歴史的瞬間であつた。そしてそれは大戦勃發以來僅か八ヶ月に三億ルピーの損失を受けた印度産業資本家と戦後の物價騰貴に苦しむ大衆に共通する利害關係が、急進インテリ層を代表するネール一派のそれに結付いたからに外ならなかつた。同三十一日一九四〇年の議長アザッドは、遂

に反英闘争開始の宣言を發した。第四回大衆行動の火蓋を切る準備は、一切完了した。スタートは正に切られやうとしてゐた。

(註一) 一昨年九月に於て食料品、織物一五—二〇%。煙草五〇%、文具類五〇—一〇〇%、藥品三五%の數字が發表され、同月から政府は物價統制に着手したが、それは、藥品、食料品、鹽、燈油、下級綿布の五品目に限る各州への委任事項に過ぎなかつたので、大衆の窮乏防止には何等の役にも立たなかつた。

然し國民會議派は——否、急進派の天下は、その瞬間に於て轉落へ一步を踏出してゐた。これより先伊太利の參戰と言ふ情勢の急變に伴つて本國の手を離れての自主的國防政府を必要とするに至つた印度政府は同二十九日、二月以來絶れてゐた總督、ガンデイ會見を急遽復活して彼を招致、國防計畫への参加を求めたのであつた。然し今や會議派に實權なき彼は、寂しくこれを拒絶し、彼に拒絶されるや印度政府はこれ迄の妥協的態度を一擲して攻勢に轉じ、六月十一日のカクザール黨檢舉、七月二日のボース逮捕を皮切りに反英勢力の一番を目標とする激浪は全印に荒狂つてゐたのである。折しもこのブナー全印委員會に於ていよく大衆行動の火蓋を九月一日に切ると言ふ密約が指導者間に出来たのであつたが、この密約がいち早く政府の耳に入る事となつた。彈壓の波は、一段と高まつた。問題は義勇自衛團の組織を取上げて爆發點に達した。そして會議派が行動の火蓋を切らんとした九月一日迄には、ボースの率ひる同派フォワード・ブロックのみで一萬二千餘名が檢舉せられ、急進派指導層の八割迄が填滅して一切の實際行動が、不可能となつた。

敗退した急進派に代つて、温健派が登場して來た。ネールに代つてラジヤゴバラチャリとサルダー・パテルが同派の實權を握つた。その指導下に開かれた九月十五日のブナー運用委員會は「印度の自由擁護のため」再びガンデイの下へ復歸し、同十七日の全印委員會はこれを百九十二對七票の壓倒的多數を以て承認し、急進派最後の要求たる一般革命と總罷業の主張を完全に葬去つた。それは合法的舞臺への復歸であつた。三度表面に現れたガンデイは一時間四十分の長廣辯舌を揮ひ、「英國が死活の戦ひを續ける時、印度が獨立を強要する事は正しくなく」「我々は英國崩壞の灰燼の上に自由を慾するものに非ず」と述べた。かくてガンデイは同三十日總督に會見、再び合法的闘争に復歸した同派のため最後の妥協工作を試み、先づ反戰運動に對する言論の自由を獲得せんとした。然し印度政府がこれを承諾する筈はなかつた。かくてガンデイは、十月十五日遂に特定の人員千五百名を指定して個人的不服從運動の開始を宣言した。一九三四年に次ぐ第二回目の個人的不服從運動である。その開始に當り彼は次の如く述べた。「余は印度獨立のため、英國の印度統治に反對すると共に、全國的不服從運動の開始を宣言す。今回の不服從運動こそ、印度獨立運動に一生を捧げて來た余の最後の闘争とならう」

然し又次の如くも述べた。
「然し余は未だ平和解決の希望を全く捨てない。何等かの可能な方法にあらば、英本國と印度國民の間の有効適切なる調停に立つ努力を惜まぬものである」

即ちそれは飽く迄も合法的埒内に運動を留めんとする努力であり、悪く言へば最も好き條件の下での妥協が目的であるとも言へた。然し大英帝國はかかる見透いた媚態に乗る程純心でもなく、彈壓の手は益々強化せられた。十月三十一日にはネール、翌年一月には議長アザッドも檢舉せられ、殘る著名な指導者は數名となつた。かくて十二月廿日

迄の第一次運動で最高指導者十一名、州大臣三十一名、中央議員二十二名、州議員三百九十八名、全印委員三百九十八名が逮捕せられた。又ガンデイは、遂に最後の奥の手たる死を覚悟しての断食を決意した。

戦前會議派の實勢力は、正會員百萬、その他合して四百四十七萬八千名と發表せられてゐた。この勢力を以てすれば、英國の支配と言へ轉覆し得るのではないかとも見られた。それだけにこの覆ふべきもなき消極性は、大戦下の悲劇とも言へた。これは何故であるか。指導者ガンデイの消極性も、その原因として擧げ得るであらう。又會議派の實數が如何に四百八十萬の多數とは言へその面積に於て全印の三分の一、人口數に於て四分の一を占める藩王諸國に未だ一步も喰ひ込み得ない現状と回教聯盟との抗争は言はずもがな、その會員の多數を占めるヒンズー社會に於てすらヒンズー・マハサバヤムベトカール一派等の如き強力な反對派があつて未だ完全な民族的團體となり得ない事もその理由として擧げ得るであらう。

然しこれ等を除いて更に會議派の敗退原因となつた二つの直接條件があつた。その一は昨年九月國民會議派がいざ大衆行動に移らんとした時、軍資金皆無で火蓋を切るにも切れなかつた事である。元來國民會議派では一九三七年の州選舉戦に於て過去の蓄積した軍資金の全部を使ひ果し、その補充のつかぬ中今次大戦を迎へたのである。大戦當初こそ三億ルピーの損失を蒙つた印度の産業資本家も、苛酷な英印新協定の締結を怒る紡績業者を中心に、著しく反英的となつた。國民會議派温健派がアーメダバッドの紡績業者を通じて印度産業資本家と結付く事は、蔽ひ切れない事實である。これ等の産業資本家は、ガンデイの消極性を手緩しとした。さればこそ六月十五日のワルダ運用委員會に於てガンデイとの袂別を主張したのは、急進派のネールに非ずして先づ温健派のラジャゴジイとサルダール・パテルであ

つた。然しその後起きた英國側の彈壓は先づ彼等を慄え上らせ、而も今度は六億ルピーに上る大量の軍需注文を英國側から受けて、英帝國に追従する事に却つて利益を感じ始めたのである。かくて温健派は、再びガンデイの下に復

歸し、印度産業資本家から會議派金庫へ納付せらるべき軍資金の約束は、遂に空手形に終つた事である。

第二の條件は、温健派に對抗すべき急進派に内部軋轢あつて、大衆行動のイニシアテイヴを採るべき壓力を缺いてゐた事である、一九三九年のトリブリア大會に於て議長に再選された急進派巨頭の スバスユ・ボースが高熱に苦しむ病軀を擔架に乗せて大會へ運ばれる途中、既に歐洲情勢の險惡化を理由に一舉事を決すべく英國に最後通牒を發すべき事を主張した時、同じ急進派巨頭のネールは、これに對して「誇大なる言葉にて印度の自由を獲得し得るものに非ず」と反對し、遂にボースは議長を辭職せざるを得なかつた。このためボースは前進派フワード・ブロックを組織して事毎にガンデイ及ネールに反對し、ネールの筋書によるラムガール決議を手緩しとして全印統一戦線の結成と暴力革命を提唱した程である。勿論ネールとボースは、同じ急進派の内でも全く立場を異にする二人である。然しネールがこれ等急進派の大團結を實現して、大衆行動開始の壓力となし得なかつた點——事實この時社會主義者黨も反ネールの態度を示した——は、依然問題とせられなければならないであらう。勿論ネール自身を、急進派の一人と考へる事は誤りであるかも知れない。マルクスを師とし、その心は常にガンデイと共にある所の、鋭敏な頭腦と戰闘的な精力を持つ純正自由主義の理論家と言ふのが、彼に對する正常な評價であるからである。然し政治は理論と信念の燃焼を必要としてゐる。

かくて首を真綿で締められ喉に刃を擬せられた會議派には、最早や一九三〇年及三四年當時と同様、屈服以外に道がないかも知れない。而も現状に於てガンデイ・アーウィン協定當時の遅延も許さないであらう。然しこれを以て國

民會議派の敗北とのみ言ふのは誤りである。何故なら若し我々が國民會議派の運動を西洋流の獨立運動と見れば、明かにこの過程は同派の敗北であるが、若しガンデイの主張する如くこれを一つの大きな印度民族の復興運動と見る場合、その政治的分野に於ける英國との妥協もこの民族精神復興の理想へ推進する方向である限りには、許されるからである。事實、最急進派のボースすらも、一九三八年の議長就任演説に於て「埃及が地中海に於ける英伊抗争を利用し流血の惨を見ずして對等の條件を結べる」事を、今後の會議派運動の基本的方針とすべしと言ふのであつて、此處に會議派運動の特殊な一性格を見出し得るのである。かく見る時、その道は遠しと言へ現状なほ獨立の目標へ確實に歩み續けてゐるとも言へるのである。

かくて新しい英・印協定の上に、印度は今新な「獨立」への道を發見しやうとしてゐる。ガンデイが今次大戦下に幾度か述べる如く「此處迄來て騒ぐ事は、却つて第三國勢力を印度へ導入する結果となる」と言ふ空氣が現在の印度の智識階級に支配的であり、英國の傘下にあつて大戦の颱風一過を待たうと言ふ空氣が、第一次大戦當時より濃厚なのである。事の如何は、客觀情勢の變化如何にかゝつてゐるのである。

六、ガンデイ批判

國滅んで英雄現はる——これは古來の至言である。

本書の目的は、現在の印度を構成する社會層の分析であつて、勿論特定の個人の描寫ではない。又一人の力、好く回天の偉業を成し得ざるも道理である。然し「英雄」と云ふ偉大な人格は、彼を生んだ環境の上に立つて情勢を正し

く把握し、事に當つて動員し得る實際勢力を妥當に評價する時は、歴史を創るのである。

ガンデイと言ふ印度の生んだ英雄は、不思議な魅力の持主である。彼は國民會議派初期の指導者ゴガールが南阿聯邦を訪問し、その地の印度人解放運動を非暴力なる不思議な戰術を以て指導する彼を紹介する迄は、その母國に誰一人知る者のない人物であつた。その魅力は彼が過去二十年の闘争經歷に於て、幾度か勢力の衰退を云々されながらも、常に印度の獨裁者であり、指導者である點にある。事實、彼は一九二三年と一九三四年の前後二回、會議派運動の表面から姿を消さなければならなかつたのであるが、彼はその都度凱旋將軍の如く誇らしげにカム・バックし、今又未曾有の難局に立つて四アンナ（邦貨約三十二錢）の黨費を納入する正式黨員でないにも拘らず、依然として同派最高の指導者である。

従つて印度の智識階級を取扱ふ本章に於ては、その階級の最高に位置するガンデイの分析なくして終る事は出来なしいし、その不思議な謎を解くには結局彼が現代印度に對して持つ社會的、政治的役割に就て諸説を比較し結論を得るより外に方法はないであらう。

彼は一八六九年印度の西海岸カシヤツツド藩王國に屬する一商港ポールバンダールの役場吏員を勤めるカバ・ガンデイを父とし、眼に一ちようの文字なきも宗教的には敬虔な、その四回目の妻ブトリバイを母として生れ、今日既に七十三歳である。

彼に關する諸説は區々紛々、相互に矛盾して一定の結論がないと云ふのが正しい現状であらう。印度に於て既に愚昧な民衆から神化されてゐるガンデイ、彼のかち得たその異常な聲望の故に、正常な批判を聞くのは不可能であると

も云へる。事實、彼を印度教の主神ラマ或はクリシナの再生と信じてゐる者も居り、彼の印度に於ける最初の運動であるチャンバラ小作争議に於ても、彼が法廷から釋放されて農民達の前へ姿を現はした時、彼等は奇蹟が起きてラマの使ひが彼を救ひ出したものと信じた程である。かくの如く印度に於てガンディを批判する事は神への冒瀆であり、過去に於ても唯一人C. R. ダスを除いては誰れ一人彼と太刀打ち出来る政治家もなかつたのである。

正しい評價は常に我々に課せられる義務である。そのため會議派の現書記長であるアチャリヤ・クリバラニはその著書「ガンディの道」に於て、ガンディとは可能な一切の事を躊躇する事なく、ロマンティックな夢のやうな事には手をふれない革命家であると述べてゐる。然しこのクリバラニは或る場合、進歩的な近代産業、従つて又その上に立つ資本主義機構を病的に嫌ふ偏見に捕はれてゐるので、ガンディが自由を獲得する迄の過渡的經濟機構として手工業的社會を選び、権力を持たぬ印度としては英帝國の強力な壓迫下にあつて、單に理論的のみならず、政治的にも價値を持つ「眞理と非暴力」の闘争を展開すれば、商業的、資本主義的利益と對立する事になり、そこに始めて自由への道を戦へると考へてゐる事を、彼は強調し過ぎてゐる。

又、ガンディ傳記を以て知られるロマン・ローランは、その傳記の中に於て彼を豫言者と云ふ宗教的存在と考へ、世界の總ての眞理愛好者の最高地位に立つ人であり、その勝利の勝鬨であると述べてゐる。又、ガンディがアルドウス・ハックスレイにどれだけの影響を與へたかは疑問であるにせよ、兎も角も「純正なる」方法をとる事によつてのみ満足し得る結果に到達し得ると云ふ彼の主張は、ガンディ主義の中心をなすものと言へる。然し此處では、彼の佛敎影響と云ふより寧ろジエーン敎の影響である非暴力哲學を詳細に論じてゐる餘裕はない。

然し又社會主義者や共產主義者の如く、彼の思想及行動が資本主義社會の擁護であるとのみ主張し、嫌惡の感情を以て彼を批判するのは、正にその對蹠をなすものである。その代表者とも云ふべきザウムエンドラナ・タゴールは、フランス語を以てガンディをこき下ろし、ハッチスンはその著「ナボプス帝國」に於ける民族闘争の項に於て同様の態度を示し、スバヌ・ボースも一九三四年刊行の著書「印度の闘争」に於て、ガンディの戦術を痛く攻撃してゐる。

これ等の社會主義者は、民衆の迷蒙を啓發せんとするガンディの努力をバベルの塔の建設と皮肉り、結局彼は宗教的、哲學的衣をつけた印度産業資本家の手先きに過ぎないから、大衆がいざ暴力運動へ發展しさうになると、何時も非暴力の名に於て闘争中止を命令するのであつて、それがその有力な證據であると指摘してゐる。又彼等はガンディがカスト（種姓）制度を認め、ヒンズー敎に於て神の使ひである牛の保護を主張し、勞資闘争でなく勞資協調を信念とする事も非難し、ガンディが農民を一度ならず欺いたとも罵つてゐる。

この兩者の全く相對立する諸論を見ても、彼が如何に複雑な性格の持主であるか判るであらう。彼の私生活と非常に近いネール迄が彼の自叙傳に於て、ガンディの思想は時に奇矯であり、時に混亂して完全に理解し得ないと述べてゐる程である。

又これ等の諸論とは別に彼と云ふ人間の觀察と會議派現役中の有力者の意見を見れば、又違つた一面から彼の人格を把握し得るであらう。社會主義者ザウムエン・タゴールでさへ、ガンディなる人間の偉大な魅力は否定しないのであつて、ガンディの性格中に極めて無邪氣で深く人を感動せしめる點のある事は事實である。又彼と共に生活すると彼に反抗出來なくなると云ふ事も同派有力者の口を揃えて云ふ事で、彼が問題の處理に當りいつもその切札を人目に

曝らしてゐる事は却つて偉大な政治的效果を生んでゐる。彼は率直な批判を歓迎し、若し彼以外に適任者があれば何時でも自分は國民會議派から身を引くと言明し、一度ならずそれを行動に具體化してゐる。早熟な印度に於て彼程の活動力を持ち、同時に又鐵の如き宗教戒律を守る人間は、ラビンドラ・タゴールを除いて一人もゐない。若し彼が彼の追従者に多くを要求する時には、その追従者達の實行力を高く評價した時に限つてゐる。

然し又彼には偉大な人間の勇氣を業に誇示する事によつて、事を成就しやうと云ふ芝居氣もある。現在行はれてゐる個人的不服従運動に於て彼が「恐らく余にとつて最後の闘争であらう」と發表したり、事あれば死を覺悟して行ふ斷食もその一例と言へやう。又、彼が一九三〇年友人の心配を外に、彼を仇敵の如く考へるボンベイ紡績工場主の集會でわざ／＼演説すると主張した時や、印度の英國綿布ボーコットによつて、ランカシヤ紡績業者が深刻な影響を受けてゐた一九三一年にランカシヤを訪問した事などもその一例である。然し彼は如何なる瞬間に於ても、大衆の感情と意欲を見抜きその上に立つ卓抜した政治的才能を有してゐる。又喧々囂々の駭辯と小理窟を弄する印度人中にあつて、極めて簡潔直截な彼の文章は、常に注目せられてグジュラティ語の語彙を豊富にしてゐるが、これを又英語で書く場合も同様驚嘆的の的となつてゐる。彼が新語創造の天才である事も、同時に彼が偉大な組織力を持つ政治家である事の表現とも云へやう。然し、彼の極めて嚴格な宗教生活とその思想的内容を考へると、彼を普通の政治家と同一範疇に考へる事は誤りであらう。今その一例として彼の生活上の日課を見ると、全くそれは苦行と精進を生命とする「ヒンズー教徒の生活以外の何物でもなく、その日課は次の如く決められてゐる。

午前二時	起	床	午後	一、二時間の晝
同二時—四時	思	索	同	討論及會議
同	禮	拜	日	朝食同様の夕食
同	就	寢	夜	禮
同	起	床	七時	拜
同	日	の	七時半	三十分散步
同	出	の	九時	就
同	後	同		寢
同	迄	迄		
同	十一時			

かくてガンディは、シヴァ・ラオも述べる如く彼の興味は政治それ自體でなくて人間であると云ふ事も可能で、

「印度の自由は彼にとつてすべてを意味してゐるが、彼の思想に従へば自由のための闘争も政治的でなく、不言と眞實の二大原理の發露なのである」。そしてそこに我々は例へば孔子の儒教思想がその眞理的要求としての政治を規定した如く、彼の體質の一部さへなすと見られる東洋的思想に出發し、その政治的領域と言ふ生活の一小部分に於ては印度の獨立を要求し、その全體としては印度民族の復興を言ふ大きな理想を目標としてゐると云へるであらう。

然しこれとは別に彼の偉大な功績は、兎も角も飢餓線上をさまよう何千萬印度民衆の政治的要求を代辯する事により、これ迄は智識階級にのみ限定せられてゐた會議派運動を、民族的大衆運動に發展せしめたその啓蒙的役割であらう。彼が眞理の把握運動を提唱する時、それは黨員の身體鍛練を要求するのであり、同時に手紡車使用の提唱もその底に入つてみれば反資本主義的要求でなく、現在千二百萬からゐる哀れなヒンズー寡婦に職業を與へると共に、中産階級と大衆の階級的障壁を取除かんとする深望によるもので、何氣なく氣輕に吐く言葉の一つ一つに深遠な政治的

要求の含んでゐる事は、彼の政治家としての偉大さを物語つてゐる。

然しそれと同時に彼が印度と云ふ植民地國家の中産階級を代表する指導者である事も、忘れる事が出来ないであつて、この條件の下に行はれる民族運動が、多かれ少かれ民族産業資本家の立場に立つての獨立及自由を政治的に要求してゐる事は否定出来ないであらう。ガンディが國家を階級的に分裂せしめる事が、獨立運動の力を弱めると云ふ口實の下に、例へば勞資協調を年來の念願とする事も、その間の事情を物語つてゐるとも云へる。

然しガンディが如何に偉人とは云へ、彼も又教育と環境の子である。彼は父親が官吏を奉職してゐた小藩王國の一に於て宗教に凝り固まる母親により極めて世界の狭い家庭に育てられたため、その當時印度の少年達に影響し始めてゐた新しい思想の事などは露知らなかつたのである。勉學のため英國へ赴いた時も彼は不幸で、當時世界を席捲し始めてゐた自由主義思想とは何等接觸がなかつたやうである。かくて再び彼が印度に現はれる迄は南アフリカ的一端にあつて誰知る者となかつた。これ等の事情のため、我々も彼の思想に宗教的な偏狭さのある事を否定出来ない。

今日ガンディ一派の行動を非難する印度人は社會主義者かそれであれば外國製の機械やその整然たる資本主義的組織を讚美する西洋心酔者の一團に過ぎないが、彼も又餘りにも西洋に對する東洋主義を固執し過ぎてゐる點は一つの弱點と云へやう。殊に今次大戦下に於ては劃期的な民族産業の飛躍が期待され、戦後の社會關係に大きな變化を豫想せられてゐるのである。従つて彼がこの偏狭性を捨て、近代印度への適應性を示し得ないとすれば、その政治的命は次第に失はれて行くであらう。従つてこの點だけを言へば彼より年長であるが、兎も角も東洋文化と西洋文化の融合の上に、新しい印度文化を生まんと努力し續けてゐたラビンドラ・タゴールの方が遙かに偉大な人物と云へる。

勿論最近の歐洲情勢は確かに東洋に對する西洋支配の破綻、或は困亂と解する事が出来るかも知れない。然しこれは決して東洋の勝利乃至復興を直接意味するものではない。従つて現在の印度がこの西洋支配の没落に直面して自己を確立するためには、その確立に不可欠の條件たる科學と合理主義を基礎とする社會建設が必要であつて、この點がガンディは當代の指導者でこそあれ決して次代の指導者とは云ひ得ないであらう。そしてガンディの偏狭さは、要するにネール以下も認めてゐるやうに、一部は彼の生活環境から来る狹隘さであり、他の一部は彼が智的生活の經驗者でなく、學問的基礎を缺いてゐるためである。事實、彼は讀書も餘り好まず、文化問題に關して何等卓拔した意見もなく、殊に彼の性に關する理論は、彼の最も親しい同志をすら當惑せしめてゐる。

これ等を綜合して、彼が今日印度最大の指導者と仰がれる所の客觀的條件は、英國の西洋支配に對する印度の機械的反感と、印度社會の支配的思想が未だヒンズー教の思想であると云ふ事實が結付いて生れたものに外ならないと云へるであらう。

事實、ガンディは印度の發展過程に於ける或る段階の產物であるが故に、彼の思想にはそれと同一の發展段階にある他の諸國のそれに極めて近いイデオロギーを含んでゐると云へる。過去の光榮に對する手工業の禮讚、個人主義及びビユウリタンの主張等は、その悉くがルッソーからヒットラーに至る資本主義社會の逆境時代の表現に過ぎないからである。

たゞこの場合彼の偉大さは現實主義或は倫理的信念によつて暴力と訣別した事であり、單なる民衆煽動でなく大衆間に潜む眞實の力を遺憾なく利用せんとしてゐる事である。又彼が絶えず屈從の危險性を強調し、これ迄の誰にも増

して多數の印度人に自らを恃み自らの力を信ぜしめた事、理窟ばいロマンティックな夢を描く民衆に、組織と訓練の精神を與へた事、又、彼が幾多の保守的な點を持ちながら、その偏見の重荷を或る方向に於て征服しやうと試みた事などもその偉大さを物語つてゐる。然し彼に對する批判は、印度に於ける社會的偏見が如何に執拗で、如何に恐るべきものであるかを理解しないが故に、社會革命家としての彼の重要性を内輪に見積る癖がある。彼の山なす著書から極めて頑固な非文化論者と云ふ印象を與へる文句を選ぶ事も容易であるが、それは要するに偉大な人物につきものの自家掩蔽に過ぎない。事實彼がその一派——ネールの如くガンディ思想の多くの點を嫌ひだと率直に宣言してゐる人物をも含めて——の中に呼び起してゐる人氣は全く不思議で、ジョン・ガンサーも一九三七年二月十九日附アメリカン・ネーション紙寄稿の記事の中で、會議派の運用委員會がソ聯の古い政治局と一味相通ふ點があつて、その背後に君臨するのがガンディであると述べてゐるのは興味深い。

又ガンディが國民會議派を民族的な政治團體へ發展せしめ、組織した事も彼の偉大さを物語つてゐると云へやう。ガンディには自由黨の如き彼よりも溫健派があると思へば、ネール以下の急進派もあるが、これ等の間に立つ偉大さは、何等の組織的な、政治的な傾向を示す事もなく彼の大衆的人氣を以て處する事であり、「余は一步で充分である」と云ふ言葉の示す通り、常に彼等の力で達し得る現實的目標を取上げ、決して抽象的な飛躍的な目標を掲げない事で、この點又オポチュニストの非難を中産階級の間から浴びてゐる。

然しヒンズー社會の嚴格なカスト制度や外國文化への疑惑、或は空想の中に統一を見出す理想主義、乃至はアーリアン民族が印度に齎らした人種的誇りを以て印度に全體主義に向ふ傾向のある事を指摘し、ガンディの死こそ、その

印度全體主義者の必要とする好箇の神話の材料であると考へるなら、それは又共產主義その他の極端な思想を本質的に受入れない所のガンディ及印度社會への不信と云ふより外はないであらう。印度の目指す所は飽く迄も宗教的にはヴィヅカナンド、哲學的にはナラビンダー・ゴーシエ、文學的にはバンキムチャッテルジ、そして政治的にはガンディ主義に表現せられる東洋独自の社會で、それが自由達成の曉如何なる形をとるかの問題もこの上に立つて始めて理解されるのである。従つて又ガンディが「ラム・ラージュ」、即ち神の國をこの地上の藩王國マイソールに見出すと言ひ、手工業への深い關心、新秩序の基礎としての農民への過信を以て彼がナロドニキ的影響を受けてゐると云ふとすればこれも又非常な誤りである。何故ならそれは、印度の基本的社會としての農民層に寄せる深い關心に過ぎないからである。兎もあれ彼は印度に新しい自覺と發奮を植付ける事によつて、來るべき印度への地ならしを行つた。ネールか誰か外の者がその收穫を刈取るであらう。事實、現在の國民會議派は、複雑な印度の社會層を代表する各勢力の單なる機械的な集合體とも云へるのであつて、これ等が偏へにガンディの精神的影響によつて一つに結合されてゐるのである。従つて次に必要なのは、會議派を構成する各種勢力の代表者である。

八、ガンディを繞る人々

ヴァラツバイ・パテル

本年六十三歳の彼は、少く共印度政界に於てガンディに次ぐ實勢力を有する溫健派代表の實際政治家で——事實、彼は議會分會の責任者として各州の會議派内閣に號令し、議會駆引きの第一人者と云はれてゐる——今次大戰下に於

て逸早く大衆の空気を看取し、昨年六月のワルダ聲明に於ては眞先にガンデイを裏切つたが、同九月には早くも急進派に叛いてガンデイの下へ復歸した。現在の會議派がガンデイ、ラジヤゴデイ、そして彼の三位一體の下にあると云はれるのもこのためである。印度民族資本家との結付きの緊密な事は彼の強味である。彼の内にひそむガンデイへの反逆性はワルダ聲明が最初でなく、南阿聯邦より歸國した當時のガンデイに先づ最初嘲笑を浴びせた人物も彼である。然し個人的名聲の點ではネールに劣り、智の點ではラヂヤゴバラチャリに劣る彼が、依然温健派の總帥たる地位を保つ理由はジョン・ガンサーをして「政界のボス」と呼ばしめた彼の實際政治家としての行動力、即ち革命の指導者でないかも知れないが、堂々英國側を向ふに廻して政治的取引を行ふ貫録と實力を有する點である。事實彼の辣腕は彼がアーメダバッドの辯護士時代、巡回裁判の方で彼を恐れて逃げまわつたと云ふ逸話が残つてゐる程で、又毒舌の雄でもある。彼の社會主義者を嫌ふ毒蛇蝎の如く、ハリブラ大會に於ける彼の社會主義攻撃の演説は有名である。將來ガンデイが死ねば、彼は今迄よりも一層重要な役割を演ずる事になるであらう。

ブラバイ・デサイ

彼は中央立法議會内の會議派を代表し、魅力あり、教養あり、旅行の智識の該博な人物で、同時に又有名な辯護士であつて充分尊敬に値する。將來も議會にあつて大成するであらうが、今回の政府の會議派大彈壓には持前の純正自由主義の立場から憤慨し、個人的不服従運動を始めて逮捕された。

アブドル・ガファル・カーン

クダイ・キトマガール、即ち赤シャツ隊を率ひて立つ彼は、元來素朴無口で少く共中央の人物でないかも知れな

い。然し一步西北國境州に入ればガンデイの命令と言へ、彼の承諾なしには一分たりと實行されない。従つて、唯さへ政情不安な國境地帯にかくの如き勢力を有して彼の蟠居する事は、印度政府にとり大きな頭痛の種となつてゐる。

前州首相の兄カーン・サヒーヴ博士と共に回教徒に特有な少數黨意識に漠然たる同情を持つてゐるが、又彼は「國境ガンデイ」と呼ばれ、富裕な家に生れながらガンデイの生活様式を眞似て簡素な生活を送る程ガンデイに心酔し、今回のワルダ騒動にも唯一人彼に同情して運用委員を辭任した程である。無口に表現される如く彼は生れながらの闘士で純心である。

アブドル・カラム・アザード

一九四〇年度議長である。彼はアラビヤ人の血を引く回教徒で一八八八年メツカ生れの偉大なイスラム語の學者でもあり、同時に又神學者でもある。

そして又會議派との協力を最初に叫んだ回教徒の一人として、有名な機關紙「アル・ヒラル」及「アル・バラグ」紙を經營、一九二三年には僅か三十五歳と言ふ同派最初の若い議長に選舉せられた。現在デリーを中心にアザット・コンファレンスを主宰し、回教徒を傘下に集めてのと近い事を意味して回教聯盟に對する一脅威となつてゐる。

C・ラジヤゴバラチャリ

前マドラス州首相で、「第二のガンデイ」と呼ばれる程ガンデイに近い、と言ふよりこの言葉は彼が會議派切つての理論家で、常にガンデイの理論的代辯者であると言ふ事を意味し、ガンデイなき時は常に會議派中樞部を率ひて立つて事を意味してゐる。

然しワルダ騷動にはこの私的關係を離れ、バテルと共に率ひる同派温健派の政治的立場から自ら最初に口火を切つてガンデイ・ボイコットを敢行した。然しこの時もガンデイの憤怒はバテル一身に注がれて、彼には極めて寛容であつた。流石のガンデイも彼の智と理論には結局頭が上らないのであつて、將來はバテルと並らんでの大物で、南印度の波羅門階級出身者である。

チャンドラ・ボース、その他

以上に加へて會議派や一般の印度政治家中に、印度の智識階級を代表する辯護士の極めて多い事は、興味がある。前記のバテルもその一人であり、今一人彼を除いての有名な指導者としてはチャンドラ・ボースがある。彼は英國ケムブリッジ大學を卒業して歸國の途中、例のアムリツツア事件に關するガンデイの宣言書に感激し、就職の決定してゐた印度政廳を棒にふつて會議派へ飛込んだのである。爾來獨立運動に捧げる彼の犠牲は尊敬に値し、若輩好くカルカッタ市長を二度迄も勤め、一九三八年及九年にはアザードに次ぐ若き議長に二度迄も選ばれた。然しガンデイ一派の無抵抗主義に反對する彼の態度が祟つて、三九年度の議長は同四月ブラサドに譲らねばならなくなり、同七月更に三ヶ年の公職停止となつたため怒つてフォワード・ブロックを結成した。今次大戦には唯一人暴力革命を主張し七月二日檢舉せられた。而も同派のみの犠牲者一萬餘に上りその被害が最も大きかつた。

彼は自ら社會主義者と稱してゐる。然し、彼の思想的色分けは、極めて困難である。何故なら彼の行動と理論の間は常に混亂があつて、一貫した主張が見られないからで、一九三九年のトリプリ大會に於て合法的闘争を主張した彼の議長就任演説は有名である。

彼の生命は少く共戰闘的に見える彼の主張であるが、これは彼の理論的結論と云ふより寧ろ、彼が宿病の肺患治療のため渡歐して前後三年身を寄せたアイル共和国のデ・ヴァレラ首相の影響と云ふべきであらう。

事實、極左派は現在少く共未だ顯著な存在でない。その理由としては貫録及手腕ある指導者の缺如が擧げられる。社會主義者黨の指導者も、ブラカッシュ等の如き青年のみで會議派海千山千の古強者と尤合太刀打出來る迄に成長してゐないので、ハリブラ大會に於てはバテルから「青二才」とさへ呼ばれてゐる。農村問題の紛糾してゐるビハールと聯合州を除けば殆んど大衆との接觸もない。従つて將來はいざ知らず少く共現在、運動の主流をなすものでなく印度の封建的社會が彼等の理論を本能的に拒絶してゐる事は、不幸である。然し同時に又彼等の社會主義理論も英國労働黨からの單なる借物で、印度的な何物も持たない致命的な缺點を持つてゐると言へる。

又、共產主義代表として、印度は嘗て蔣介石の第一次北伐當時、ボローヂンと共にコミンテルンから派遣され武漢政府の顧問として活動したM・N・ロイを持つてゐる。然し、今彼を共產主義者と呼ぶ事は印度の誰もが反對するであらう。彼は支那から歸國後、一九三六年迄投獄せられてゐたが、その後分裂主義的主張によりゴツシエ等の印度共產黨からも嫌はれ、僅かに農民運動を地盤として、その流麗な筆致で論陣を張つてゐた。今次大戦下には全體主義のために英國側に立つて大戦へ参加するやう要求し、會議派急進派の壊滅後はその殘黨を糾合して、昨年十一月に急進民主主義人民黨を組織した。

ジャワハル・ネール

ネールは常に彼の思想的傾向により社會主義者と見られてゐるが、未だ社會主義者黨に参加した事もないし、一九

三九年度の議長選挙問題に於ても彼より急進的なボースに反対し、ガンディ派に立つた。殊に最近の奥地旅行に於て彼が、ソ聯が獨逸かの問題に於て前者をとつたため、共産主義者と迄曲解せられてゐるが、その實依然としてジョン・ガンサーが指摘するやうに「中間左派」と云ふのが最も妥當した彼の思想的立場である。事實、彼は會議派中で最も勞働、農民組合運動に關心を持つ人物でありながら、その闘争の前面に階級問題の強く出て来る事は好まない。彼は一九二九年の憲法問題で有名な大ネールの血をそのまゝ受けついで徹底的な民主主義の理論家である。そして彼が民主主義者である限り、東亞新秩序建設問題に對する好き理解を示し得ないのは當然で、支那事變を契機とする彼の對日感情は、一九三九年の重慶行——その重慶行は彼にとつて餘程印象深かつたと見え、昨年十一月三十日チエオキイ驛で逮捕された時も、最後に會つたA・Pの記者ロフイ・キドワイに語つたのもこの重慶の思ひ出であつた——によつてその歸趨を理解し得るであらう。

彼は大戰勃發以來の緊急戦時委員會指導者として、ガンディに代つて同派の實權を握り、ガンディを一時追ひ出したワルダ聲明の作者でもあつた。然し印度の獨立運動を國際情勢との關係に於て理解する道を拓いたのは彼の功績で、ガンディに次ぐ同派指導者である事にも依然異論の餘地がない。ガンディが飽く迄も東洋主義に終始せんとしする時しかもなほネールがガンディ主義と袂別しないのは彼が理想としてのガンディ主義には信服し、たゞそれを現實社會に推進する場合にのみ唯物史觀的方法をとる所の方法論的差異を持つに過ぎぬ事を物語つてゐる。かくて彼は本年五十七歳、前後九回の入獄の經驗所有者で、單に印度のみならず、世界的立場から見ても注意せられてゐる人物である。その端麗な顔の示す如く聰明で、彼の持つ戰闘的精力は同派にとつて貴重である。豪奢なアラハ

バードの邸宅もそれを運動に捧げた後は、その一部が會議派事務所になつてゐる。彼は又几帳面な一面ユーモアを解する氣質を有し、その點は、同じ闘士で詩人であるサロジニ・ナイズ夫人に似てゐると云はれてゐる。

然し以上の問題を國民會議派と極めて近い關係にある印度共産黨に見ると、それは長い間の非合法性——一九三六年非合法的存在となり、その機關紙「ナショナル・フロント」は昨年三月發行停止となつた——と黨員自身のソ聯及英本土から孤立性、そして又何よりも本質的に彼等を受入れない印度社會の封建的性質によつて、著しく發展を阻害せられてゐる。その指導者も凡ね若く、例へばボンベイの本部を構成するミラジカルは新聞記者、ニームアカール及ヒユダは辯護士、アドヒカリイは醫者出身と云ふやうにその指導者層が全部インテリを以て組織されてゐる事や、今次大戰下に於てコミンテルンの指令及資金の思ふやうに入手出来ない——從來の連絡地はシンガポールであつた——困難が擧げられる。從來ボンベイの本部を除き、カルカッタ、カウンボール、マドラス、ナグプールの三支部を持つて黨員約三千名、一九二八年頃は例の組合を組織して相當活躍したが、一九三六年以降は戰術の變更によつて民主主義團體との協調に轉じ、會議派運動の一翼に立たうとしてゐる。この方向轉換は彼等の合法時代も過ぎ、農民及勞働者間の運動も、結局大衆を満足せしめる迄に成功しなかつた事——事實、一九三一年以後は勞働組合運動に於ても失敗した——と、その結果が單に民族資本家を恐怖せしめるに過ぎなかつた事に氣附いたからである。

然し會議派では、彼等が統一戦線のため働く限り彼等を會議派内に受入れやうとしてゐる事が注目される。それは、彼等を除けば會議派へ勞働者、農民の動員が困難である事を知るネール及ボースの斡旋と、更に彼等が社會主義黨より訓練もあり、戰術の變更も敏速である點を高く評價するガンディ一派の寛容によるものである。然し溫健派のみは、

會議派は即ち全印度社會を代表する唯一の政治團體であるから、階級的基礎に立つ團體は分裂主義的傾向を持つものとして白眼視し、それに原因する兩者の衝突は、早くも一九三八年のハリブラ大會に於て起きてゐる。然しその時の危機は當時起きたビハール、聯合兩州内閣の辭職問題と云ふ今一つのより大きな政治的危機によつて、一應は避けられたが、この對立は決して解消したものではない。従つて同派の勢力が現在の如く温健派の手中にある限り、彼等の地位は益々困難になると云ひ得る。然しその會議派も背後から資金を供給する印度産業資本家の横暴に今少しの迫力を加へない限り、積極的な反英抗争は不可能なので、此處に首鼠兩端の困難があるとも言へる。

七、印度統一の要素に就て

然し以上の問題を離れて一體印度には獨立を可能ならしめる基礎條件としての「民族性」と云ふものがあるのではうか。世上往々印度の複雑な社會層と民族性を取上げ、そこに統一の基礎なしとするも、若し然りとせば如何に國民會議派運動が展開しやうと、アイレ共和國やアラビヤ王國の光榮は永久に印度に恵れない譯である。この點はどうであらうか。事實、英國人は過去に於て印度に統一的な概念を與へるため「印度民族」と云ふ言葉を喜んで使用した。然しそれは英國のみが印度の分裂を防止すると云ふ優越感があつたからに外ならない。そして事實その時は若し英國の干渉が行れなかつたら、恐らく印度は血で血を洗ふ悲惨な闘争の中に悲割的な最後を遂げたかも知れなかつたのである。

然しその印度にも、我々の想像する以上に立派な統一の歴史的事實のあつた事は注目しなければならない。ネールも

一九三八年の「フォアリン・アフェヤーズ」一月號に於てこの事實を強調し、ヒンズー教の聖地巡禮とか、聖地とか云ふ概念は、それ自身昔から領土的統一の概念を與へてゐたと言つてゐる。又印度全體が唯一の統治者の下に統一せられてゐた時期も屢々あつた。かくて複雑な印度にも統一の可能な要素がない譯ではないのであつて、事實ヒンズー社會の文化的統一もその一であるし、昔から印度と云ふ概念が全面的に理解せられて來たと云ふ事も擧げ得るのである。殊に後者は或る點中世紀歐羅巴のキリスト教團の概念に匹敵するものである。

又英國支配に對する反感が、印度に歴史的觀念と現状に對する歴史的研究の覺醒を促した事も事實で、非常に活氣のあるベンガル美術學校とその壁畫を以て有名な洞窟の生活の間に一味相通する點のある事も、その統一的要素の一つとして擧げ得るであらう。印度のテロリスト運動も、或る點マハラツタ族の暴政或はシヴァ神の生活を髣髴せしめるものがあつて、ベンガル州に發達したそのテロリズムの口火を切つた中心的な一人も、正にそのマハラツタ人であつた。

又交通の發達は疑ひもなく印度統一の要素をなすもので、それが印度を世界政治の範疇内に置いた事は、取りも直さず一集團としての自覺を印度人間に高め、獨立運動の急速な發展を齎したとも云ひ得る。事實A・C・マズムダールもその著「印度の民族的發展」の中で、「遅ましく荒々しきバンジア人、智的な感情的なベンガル人、オートツドックスな排外的なマドラス人、熱情的で機敏なマハラツタ人、英國化されたバreshian人、冷酷で打算的なグジエラート人、それ等は夫々異なる所の外國人に過ぎない」と、印度民族性の複雑さを強調してゐるが、交通機關の發達が、現在彼等を同一範疇に置いてゐる事と、兎も角も獨立運動の舞臺では兄弟とさへ呼ばれてゐる事によつて、一應

印度人に共通した性格とか個性とか、乃至は印度大衆間の自覺とかを口にしても強ち誤りとは言へないであらう。又我々は印度が過去に於てヴェッダ、佛陀、阿育その他多くの東洋的傑物を生んだ事も記憶しなければならぬ。事實、印度の歴史が單なる地方史の綜合體と化したのは、少く共十二世紀に始まるモガル王朝以後の事である。然し現在は英國側の政治的意欲によつて多くの州に分轄されてゐるものゝ、一つの綜合體としての印度的觀念が次第に意識化せられてゐるのであつて、例へば東西兩端に住むベンガル人とラジュプット人は、民族學的に見る時兩極端に立つ人種であるにも拘らず、ラジュプット史上の各種の事件は、ベンガルの文學者にとつてこの上もない魅力を持つものとして取扱はれてゐる。又、ラジュプットの民族舞踊も幾度かカルカッタの劇場に上演せられて熱狂を呼んでゐる。マハラツタ人の英雄シヅアも又ベンガル州に於て外國の人間と考へられてゐないし、シーク族の物語もベンゴール詩人の詩囊に錦上花を添へてゐる。

そしてこれ等は單に印度歴史の綜合的傾向を示す一例に過ぎないかも知れないが、少く共印度人が印度人である限りには、彼等が海外に於て迫害される話を聞く時、一切の民族的、言語的、宗教的差異を越えて共通の義憤を覺え、ガンディーやネルが國內の何れかを訪れ、心から歓迎せられるこれ等の事實は、より尊重されなければならぬであらう。事實、これ等の點は、印度にカストとか、コムミュナルとかの厄介な問題があるにも拘らず、それ等を越えて印度がやがて獨立運動の旗の下に結付く可能性を豫想せしめるもので、この豫想の上にこそ國民會議派の發展があると云ひ得る。

又言語の相違はスイスにその例を見る如く、決して統一を妨害する致命的要素でないし、宗教的對立は一定の文化を前提條件として、舊教と新教の併存する歐羅巴諸國のある事を擧げ得るのであり、民族的複雑はアメリカにその例を求め得るのである。要は民衆のこれ等を理解する認識力の問題で、現にヒンズーの聖都ベナレスには、一枚の印度地圖をうやうやしく祀つてゐる寺院さへあるのである。

従つて我々にはこれ等の統一的要素としての國民會議派運動を再検討する必要があるのである。現に我々は印度の到る所に於て手織木綿姿の會議派指導者の寫眞を見るのである。そして同派が印度の標準語たらしめんとしてゐるヒンドスタニーは、現在全人口の三分の一に當る一億三千萬人の使用者を見て、特に回教徒間の完全な共通語となつてゐる事は、今後の有力な統一的要素と云へやう。我々は現在の指導者間に顯著な地方的性格が次第に征服せられると共に、印度の民族主義も外國の民族主義と同一視される危険性がないとは言はないが、これは決して同一の物でなく、飽く迄も印度復興運動の一翼に起つた東洋的感情を基礎としてゐる點が強調されなければならないであらう。

又一方に於て全印度に亘る労働者又は農民に共通する經濟問題も、統一を促す有力な要因である。労働組合の發展も、直接その統一の結果を表現し、ボンベイ及アーメダバードの労働者も、今ではカウンボール労働者の闘争が彼等自身の賃銀問題にも重要な影響を持つ事を知つてゐる。

又テイラツクにとつて自治とは國家の古代印度的解釋を近代化した譯語であつて、それは「人民の統治國」を意味してゐた（彼の自治同盟の講義参照）。事實テイラツクは、皇帝の宗主權は認めながらも、民衆の意志によつて支配される國家を考へてゐたやうで、その理想はエルダー（Elders）會議と年期一年の民主的機關によつて制約され支配されたクシャトリア諸王の國家であつて、彼は次の如く述べてゐる。

「自治の意味する所は、我々の皇帝を残し、英國々民の支配を認め、爾餘の事項を處理する權利を一切人民が所有する事である」

勿論現在の印度の政治家は、これより遙かに進んでゐる。然しテイラックの地位は、印度を歴史的に見て政府とは必ずしも皇帝乃至は國王の私有物でなかつたと言ふ事實を想ひ起させて、極めて興味がある。

然し今日の印度に於て最も必要な事は、自治形態の色彩を極めて強く持つ長老會議と地方自治體の強力な發展である。従つて印度の獨立運動も現在の如く中央政府に頼り過れば結局力を弱められるのであつて、此處にガンディ主義の新に發展し得る道があるやうである。英國支配の最も大きな弱點はこれ迄餘りにも大きな犠牲を印度に拂はしめ過ぎた結果、現在ではイニシアティブを探る者がゐないと言ふ悲劇と地方政府の徹底的腐敗を齎らしてゐる事である。タゴールも、嘗つて次のやうに述べた事があつた。

「我が國の政府は、我々の社會組織と何等關係のないものである、それ故に我々の前者から求めんとする所のものが何んであるにせよ、それは我々自身の自由以外の何物であつてもならない。その義務が何んであるにせよ、我々のサマジはサルカールによつてその義務の果される事により援助を期待してゐる。今日我々は我々のために、サマジの全義務をサルカールの手中に置かんと努力してゐる」

カストの痕跡を持つ現在の社會組織を解放する事は必要であらう。然しタゴールの以上の如き言葉は、同時に又英國政府の官僚的政治に對する價値ある修正、即ち自治の範圍を出てゐない。

以上を綜合して更に經濟的基礎に立つ組織の成長が印度に於てカスト制度を破壊し、健全な獨立精神を創造し、極

端な中央集權を防止する事によつて極めて大きな收穫を上げ得ると言へるであらう。事實印度は過去半世紀近く、明日にでも獨立するやうに言はれながら今日に至つてゐる。然しこれは全くその民族的統一を阻止する社會的、經濟的障礙の根深かさを物語るものに外ならなかつた。従つて英本國が印度の民族産業に、無條件に膝を屈せんとしてゐる今次大戰の意義は大きい。それが最終の目的である獨立乃至は完全自治の状態を實現し得るかどうかは判らない。それは印度を取巻く客觀情勢の變化を、相對的條件としてゐるからである。然し少く共以上の基礎を有する限り、それが國內の民族的統一に向つて、大きな一步を踏出し得る基礎的條件をなすものである事には間違ひがない。

第四篇 藩王國の君主^{フナ}

一、藩王國政治の封建性

印度にはその面積に於て全印度の三分の一、人口に於て四分の一の藩王國と云ふ不思議な國がある。それは完全な獨立國の形態を保ち、宛然歐羅巴の中世紀を想はせる封建政治の種々の惡事も行はれ、ジョン・ガーサーも次の如く述べてゐる。「印度の藩王國とは：：光輝く専制政治の貯水池である」(一九三八年五月十四日附、サタデイ・イヴニング・ポスト紙)と。

殊にこの藩王國の君主——それはラージャ、或はマハラジャ、最大の回教國たるハイデラバッドに對しては特にニザムと呼ばれてゐる——の問題は、最近の新憲法問題(註一)と今次大戰への參加問題(註二)を繞つて、一層世界の注目を集めるやうになつて來た。

(註一) 新憲法と呼ばれる一九三五年の修正印度統治法は、先に述べる如く自治領土、直轄領地、藩王國五百餘を同一の政治的基礎に置く聯邦制問題を中心としてゐたが、これには國民會議派などが猛烈に反對するやうに、藩王國の主權を極めて尊重し上院の定員二〇六名中一〇〇名迄、下院の定員三七五名中一三五名迄を藩王國に委ねてゐた。然しこの問題に對する藩王國間の利害が一致しなかつたので、英國側では不取敢重要な藩王國一二の承諾を得た上實施する事に變更し、交渉を開始したのであつたが、未だ完全な了解に達せずして今回の大戰を迎へるに至つたので、一九三九年九月十一日附を以て一時この問題

を無期延期するに至つた。

(註二) 今次大戦勃發と同時に、その特權享受に汲々とする藩王國では、ハイデラバードが空軍一ヶ中隊を獻納したのを始め、現在迄に参戰を表明せるもの三百餘國に上り、参戰反對を叫ぶ獨立運動側の脅威となつてゐる。

贅澤と不羈と自由の國を自稱する英國に於て、彼等と皮膚の色も異なる印度人留學生が、單に印度人であると云ふ理由で病院へ入院する事も出來ず、下宿にさへ困難してゐる時、同じ皮膚の色をした藩王國の君主が一度ロンドンに現はれんか、皮肉と辛辣を生命とする新聞の批評家も鉾を納めてトツプ・ニュースで騒ぎ立て、傲慢と偏見の權化である上流社會の英國婦人でも喜んでラージャと踊り、社交界の扉はラージャの方で迷惑する程彼を歡迎して、印度の不思議は同時に歐羅巴へも發展するのである。

かくて若し人格と統治者としての事蹟から判斷するとすれば、印度最大の君主は恐らくマイソールのマハラージャであるが、彼は今迄に英國へ一度しか行つた事がなく、その後も斷じて腰を動かさなかつたのである。そして筆者に誤りがなければ、世界有数の富豪と云はれるハイデラバードの君主は、一度も英國を訪れた事がない筈である。従つてこれ等のロンドンで持てはやされる君主連は、領土も比較的小さな、勢力も餘りないラージャ達とも云へるのであるが、彼の領土も小さく従つて國庫收入も尠いとすれば、彼等がロンドン社交界の女に高價な寶石を與へて現つて抜かす大金は、結局貧しい領民の膏血を絞り上げたと云ふ外はないのである。事實、前章に述べた農民及労働者の生活状態も、これ等の藩王國へ入ると殊に悲惨で、そこには實に可笑しな理由で課する重税と慘虐な法律があり、近代的な産業や工場法など如何に眼を皿にしても影も形もないのである。

例へばその一例をビイカニールにとると、そのマハラージャは最も忠實な英國の奴隸であると同時に、印度よりもロンドンで有名な人物であるが、次の如き事實に注意せらる。即ちその藩王國の立法議會は、指名議員、被選舉議員十八名、都市代表十五名、職業周旋人代表三名、租稅徵收人代表三名の三十九名を以て構成せられてゐるが、この都市代表の中十名迄が君主の指名によるものであり、又その議會は純然たる諮問議會で、悪く云へば單なる統治機關の一見本に過ぎない。例へば或る年など、一年間の仕事一切を僅か二日の會期中に處理し、一萬七千磅以上を王室費用に可決したが、教育費としては僅かに一萬五千磅を計上したに過ぎなかつた。かくてこの國の教育費は全豫算の一・二%にしか當らず、小學校費は僅か〇・二%に過ぎないのであつて、學校も百十五村に對して一校の割合と云ふ哀れな状態である。全教育費も頭割りにすれば、一人三アンナ半(邦貨約二十八錢)である。又醫療救濟費の割合は、全豫算の僅か一・五である。病院や施藥所は二十八あつて、その中には鐵道及運河労働者の特別病院も含まれてゐるが、この豫算額の中には王室一族の醫療費迄含まれてゐるのである。

又延長五百哩の鐵道もあるが、赤道直下の焼付く太陽と沙漠の國に於て停車場に待合室もなく適當な給水設備もない。驛員の給料は印度隨一の安さであるにも拘らず、汽車賃及貨物の運賃は印度で隨一の高さである。又その國の面積は二萬三千五百平方哩あるが、道路は總計二百哩しかなく、而もその大部分は王室専用の自動車道路で一般國民の通行は禁止せられてゐる。その國境には嚴しい税關もあつて、入國者は身體及携帶品の検査を受けなければならぬ。

課税の種類は極めて多様で、一種の人頭税もあり、菓子屋及鍛冶屋に對する最高年十ルピー(邦貨約十三圓)から

荷物運搬人に對する最低二ルピー（邦貨約二圓六十錢）に及び、牛一匹を所有しても年三ルピー（邦貨約三圓六十錢）の税金を納めなければならない。又他の藩王國同様、王室の慶事或は凶事に際しては特別税が課せられ、或る推定相続人の結婚式には總額四萬八千六百九十九ルピー（邦貨約六萬二千五百餘圓）に上る徵税が行はれた。又不動産の賣買には、賣買額の二割五分が賣却税として課せられ、その外にも農業税、市民税等々がある。

一九二八年の行政報告によるとその國には飢饉が起き、マハラージャは寛大にも土地購入費の月賦金徵集を延期したと述べてゐるが、その年の藩王國収入は却てその推定額より遙かに多かつたと言ふ現象を呈してゐる。

又官廳發表の行政報告は總収入の五分が王室費に宛てられてゐるが、その中にはマハラージャの邸宅、自動車、馬車、乗馬等の維持費は一切含まず、而もマハラージャは國家の責任額を出来るだけ縮少するやう希望してゐる旨を報告してゐる。その外王室の庭園、車輛、王室の儀式、電燈代の如き豫算面に現れない費用もあつて、これ等を合計すると國家全支出の實に三二・六%を占めてゐるのであつた。

又一九二二年の國勢調査報告には、ピカネル藩王國に一萬九百四人の奴隸のゐる事が記載せられてゐる。これ等の奴隸は、マハラージャ及其の家臣の下にあつて奴隸的待遇を受けてゐる人々である。彼等は豚も食はないやうな粗食と粗衣を與へられ、その妻子諸共一種の財産と考へられてあらゆる種類の勞働を強制せられてゐるのである。又彼等は結婚の折の持參金や贈物の代用にもなるのであり、主人の意志のままに結婚したり離婚したりしなければならなかつた。

英國で最も有名なマハラージャの一人は、クリケットの名手ランジイである。然し彼は既に死んだのでこれは死人

に鞭打つ結果になるかも知れないが、兎も角カティアワール藩王國に屬する彼の小さな領土ナヴァナガールの政治状態を此處に述べると

「如何ナル人、團體、集會モ前以テ政治長官ノ許可ヲ得ルニアラザレバ、政治問題ヲ論議スルヲ得ズ……政治的集會ハ、ソノ種類ノ如何ヲ問ハズ、開催スベカラズ」（現在なほ有效な一九二一年法）

更に社會的、宗教的集會も壓迫せられてゐる。新聞法など影も形もなく、政治新聞は禁止、社會及宗教的定期刊行物は政治問題に一語でも觸れると、編輯者は五百ルピーの罰金に處せられるのである。

この藩王國には他の王國同様人身の自由は保障せられてゐない。司法官もマハラージャやその家臣が秘かに權禁せんとする人間に對して、人身保護令狀を發する事が出来ない。國民の財産を沒收するにも口頭で好く、別段執行命令を必要としない。文化程度の相當高いその首都は、マハラージャ任命の一官吏の獨裁下にあつて、その市民には市政に對する容喙權がない。各種の課税が行れて一年の市収入は十七萬千九百四十四ルピーに上つてゐるが、市民にはその使途に口を挟む事が出来ない。又國內には自動車道路があつて、これは自家用車を持つのがマハラージャのみであるから結局マハラージャの専用道路となつて居る。この外にも一般用の道路はあるが、牛馬の通行は禁止され、而もその牛馬には苛酷な車輛税が賦課せられてゐるのである。又國內には十二の町と六百七十五の村があり、少く共總人口の三分五分は農村に生活し、その首都ナヴァナガール以外には重要な都市もないのであるが、その、農村には病院もなければ電燈、道路、パンチャエットとかさう言ふ地方機關もない。その首都から二本の立派な自動車道路があつて、その一本はマハラージャの別荘へ行く道であり、他の一本は狩場へ行く時の専用道路で、兩者共「馬車ノ通行ヲ禁ズ」の立

札が立つてゐる。

この藩王國には立法議會はないが、マハラージャが嘗つて總督に宛て、時勢に動かされて諮問議會を設立した旨を報告した事は事實である。即ち、一九一九年には議會成立の布告が發せられ、一定の人員が議員に任命せられた。そしていよいよ開會となるや、マハラージャが一場の演説を行ひ、續いて來賓のアルワール藩王國のマハラージャが祝辭を述べただけで忽ち閉會となり、爾後一回も開會されないので今でも語り草となつてゐる。

又法律と名附く可きものもない。行政はマハラージャ及其の秘書の氣の向くままに發表する命令、回狀、規則等によつて行はれる。従つてその行政報告によつて、財政状態を知る事は殆んど不可能である。又一定の市民簿もある事はあるが、一切の支出は戸數割でなく、各人別に賦課せられてゐるので、昨日生れた赤ん坊迄立派な納税者となつてゐる。王室費用は王子の教育費迄含めて、一切國民の負擔となつてゐる。會計検査などは、勿論他の藩王國の例に倣つて行はれない。而もその國の專賣制度は、酒、煙草、棉、鹽の各方面に及び、農民に煙草や鹽の浪費を盛んに獎勵してゐる。

又この國の狩獵はその種類の多い事のみならず、そのキャンプ設備の贅澤さを以て有名であるが、この事は同時に人民に對するマハラージャの暴政を意味し、人民には穀物を害し人間を傷ける野獸を殺す事さへ、禁止してゐるのである。バルサンと言ふ村で一人の老婆が豹に襲れて殺された時なども、誰一人として豹を傷つける事を恐れ老婆を救ふ事が出来なかつたと言われる。この狩獵の時には無数の農民が仕事を抛棄して強制的に狩出される事は、我が國の戰國時代乃至は徳川時代を髣髴せしめるものがある。我々の常識を以つては到底想像出来ない程各種の課税も行はれ、

農民はその収入の六割以上を税金として納めなければならぬし、かうして集めた國家収入の五〇%以上が、マハラージャの放蕩に使用せられてゐると言はれる。

元來總督やその他の中央政府高官が藩王國を訪問すると、恐るべき國庫の支出を意味すると言はれてゐるのであるが、アーウィン總督がこのナヴァナガールを訪問した時は三百十萬ルピー（邦貨約三百五十萬圓）も浪費せられた。そしてその支出品目には、三十四臺の自動車購入費、遊覽船の建造費等が含まれ、その祝宴だけでも十萬ルピー（邦貨十三萬圓）が費された。

然るに一九二六ト七年度に於て、國家収入の一分五厘が教育費に、僅か九厘が醫療費に支出させられただけであつた。又酒屋は二十九軒あるが、藥屋が十六軒しかない事も、その政情を明瞭に物語つてゐる。

然し我々は、個々の實例を終つて次へ進まう。
 奴隸制度は、藩王國に於て、あながち珍しい現象ではない。勿論正確に言つて「奴隸」と言ひ得るかどうかには異論を挟む餘地があるかも知れないが、兎に角我々はビカネルに一つの實例を見た。事實一九二六年のゼネバ勞働會議には、「普通の意味の奴隸は藩王國にもゐない」と報告せられ、印度政府もそれに満足してゐる旨が報告せられたが、同時に又「必要なる制度改革を行ふやう、藩王國の主權者に勸告」せられてゐるのである。そしてこの報告の否定するにも拘らず、ラジュプタナ藩王國にはその諸侯家臣の邸宅に色んな名稱の下に知られる奴隸が、十六萬七百三十五人もゐるのである。彼等の生活狀況はビカネルの場合とほぼ同一で、強制勞働と言へば奴隸の境涯を去る事一步二歩で、全人口のほぼ一割八分を占める被壓迫階級が、この被害者と言はれてゐる。然しこの強制勞働も英領印

度に於ては、流石に困難な事情があるため、行れてゐない。然し總督が藩王國を訪問すると、何れの藩王國でもその國民を強制労働に狩出し、國民は如何に深夜と言へ必ず鐵道線路の兩側にズラリと背を向けて並び、手に松明をかかげて列車の通過を待つのである。職人、農民、その他の手工業労働者も又強制的性質を持つ労働に狩出され、鼻糞程の賃銀でも貰へればめつけものであると言はれてゐる。又ラジユプタナの工場には、十四才以下の幼年工が千二十一名も使用せられてゐる事が、同時に暴露せられてゐる。

又藩王國のコムミュナル的觀察も極めて興味が深い。何故なら回教徒の君主が總人口千四百萬人の中千三百萬人迄がヒンズー教徒の藩王國を統治する場合でも、それは回教國となるのであつて、例へば總人口の八割六分迄がヒンズー教徒であるハイデラバードが回教國であり、その七割五分迄が回教教徒であるカシミールがヒンズー王國としてそれぞれ主權者の我儘な宗教的嗜好に支配せられてゐるからである。そしてこの事は言語にも反映せられ、王宮の使用語がウルドゥ語であれば、例へ人民の共通語がヒンドスタン語であつても、その習慣は無視せられてウルドゥ語が公用語に昇格するのである。

二、英國の對藩王國政策

かくの如く色々な意味で重要性を持つ藩王國は現在五百八十餘あると見られ、その總面積は七一、二五〇八平方哩で全印の四五・二%を占め、人口總數八一三一萬人で全印の二四%を占めてゐる。又その中ラジユプタナ、ハイデラバード、マイソール等はそれ／＼、二二、九〇五九平方哩、八二、六九八平方哩、二九、三二六平方哩の面積と一一二三萬人、一四

四四萬人、六五六萬人の人口を有し、歐羅巴に於ける獨逸或はスペインに等しい規模を有してゐる。然しその他は凡ね小さく、ビルバリーの如きは人口二十七人、國庫收入八十ルピー（邦貨約百二十四）と云ふ蚤の國を形成してゐる。その主權者の有する特權も各國別に英國側と取引して決められてゐるため極めて複雑であるが、兎も角も、軍隊を動かす場合一々英國側の許可を必要とする事と、外交權を持たない事以外、一定の條件の下に獨立國の體面を保つてゐる事は各國共通の現象である。これ等が極めて強固な封建社會を形成し、近代的印度の發展に致命的な障礙をなしてゐる事は、幾度か述べた通りであるが、英國では却つてその分離統治の政策上からこれを支持し、近代的獨立運動進入の防壁とさへしてゐるのである。

藩王國人民會議の議長も、一九三六年度に於て次の如く述べた。「それ等の藩王國はこの世に於ける地獄であり、その秘密を解くには恐らく數十、數百年を必要とするであらう」と。然し近代印度の壓力は、若し時間的觀念を無視する事が可能であれば、結局吸取紙にしみ込む水の如くやがてはその封建的な防塞を越えて彼等を抹殺する日も來なければならぬ譯である。トムプスは上に引用した批評記事に於て、マハラージャ達がその君主權の事で騒ぐ時、「英領印度は何故完全な自治に進まなければならないかは説明せられず、藩王諸國の人民がその支配者の權利を保全する一切の重要なゲームの人質となつてゐる」事を忘れてゐると述べてゐる。然しこのマハラージャも政治的妥協さへつけば、強ち印度の民族運動を否定するものではない。事實、彼等に保障されてゐる獨立性も、現在では英國政府から派遣せられた英人駐在官の横暴によつて非常に減殺し、「封建主義最後の堡壘となつてゐる」現狀である。従つて前記トムプスも「彼等は最早や日本の武士以上の特權なく、ヘンリー八世當時の英國のサー以上の何者でもない。

その主權は全く英國の力の上に築かれ、決して約束によるものではない」と述べてゐる。

これ等のマハラージャにも嘗ては武士道や、讃ふべき勇氣のあつた時代があつた。この時代には、本書の第六章にのべる如き立派な政治形態を各國共持つてゐたのである。たゞ、その後起きた他國の征服が、同時に又彼等の精神的荒廢を齎らしたのである。かくて現在彼等は形だけの君主として、その臣下に對して暴君となる事を許され、飢餓線上にある國民に金を出させて仰々しい禮砲を打たせたり、贅澤な禮服を造らせたりしてゐる。以上によつて彼等は現在英國の傀儡に過ぎない事は明らかであつて、チユドガールも、その著「印度のプリンス」中に、一八五三年のタイムズ紙から次の如き記事を引用して發表してゐる。

「我々は、これ等の主權者の青ざめた意味のないページェントを東洋的暴政にはつきものの運命から解放したのである……この利益(叛亂を通して有能有力な主權者を獲ると言ふ)を、我々は未だ古き主權者によつて統治せられる印度藩王國の住民から奪ひ去つた。我々の鐵の手は、その主權者の愚昧、惡徳、罪惡にも拘らず、彼等をその王座に固執せしめた。その結果多くの藩王國には慢性的無政府状態が齎らされ、その状態の下にあつて國家收入は軍隊の傭兵と朝廷の寵臣の間に雲散霧消する浪費やうになつた」

東印度會社及英國政府も、一八五七年の印度兵叛亂迄は、その主權者が失政を行つた場合には彼を廢立し、或は主權者が死んでも直系の相續者がなかつたりその他色んな理由のある場合にはその國を他に併合する政策をとつてゐた。然しダルハウジイ總督はこの政策に反對し、若しこれ等の藩王國の主權者達を支持すれば、英國の印度支配の堡壘ともなり、要塞ともなると言ふ事を、宛かも豫言者の如く聲明したのである。そしてこの豫言は適中した。

大多數のマハラージャは前記の土民兵叛亂の折英國側に味方し、叛亂の鎮壓に協力した。かくてモガール王朝最後の主權者たるバハヅル・シャーは廢立せられ、捕虜となつた。即ち、英國は、諸侯の手によつて彼等の主君を倒し得たのであつて、印度政府はかくする事によつて英國の手に移り、カンニング卿が一八五八年初代總督に任命せられた。總督は聲明書を發表し、印度藩王國の保全を保障し、マハラージャの永續及其その統治權を保障した。數人の主權者には、それ迄英國側で拒絶してゐた世襲權すら公認した。

爾後マハラージャに對する英國の政策は、代々の總督に委任せられたため、その總督の變る度に多少變化することには止むを得なかつた。一八五八年以降十年間は、不正及惡政の行れる場合政府の干渉が行はれた。英印兩政府とも藩王國の良き國內統治に對する責任を容認したが、或る時は又行政方法を規定し、それを採用すべき命令をバラマウン・ト・パワー、即ち英國々王の持つ至上權力であると主張した。この責任と聲明は、英國々王がこれ等藩王國との協定或は條約によつて生れる所の至上權力であり、この東印度會社時代から繼續する權力は全印度の進歩と繁榮を圖るべき義務を有すと云ふ見地に立つて行はれるものであつた。

リットン總督は(一八七六一一八八〇年)は、一八八二年のマイソール藩王國樹立に先立ち、本國政府に送つた公文書中に次の如く述べてゐる。

「現在英國政府ハ、印度全州ヲ外敵ヨリ護リ、民衆ヲ失政ヨリ救ヒ、統治者ニ必要ナ合法的權威ヲ付與スルニ必要ナ方法ヲトルコトニヨリ國內秩序ヲ維持スル義務ヲ履行シツツアリ。行政形態ヲ命令シ、ソノ忠告ノ採用ヲ主張スル英國政府ノ權力モ、又帝國全體ノ國內平和ト民衆ノ一般的安寧ヲ圖ルベク英國政府ニ認メラレタ責任ト必要ナル相關々

係ヲ持ツモノデアル」

サリスベリイ印度事務相は、藩王諸國に對する至上權の責任に就き、次の如き規定綱領を定めた。

「全制度中ノ第一ノ主要原則タル至上權力ノ優越性支持ハ、ウエルズレイ卿及ハーディング卿ノ政策ニソノ端ヲ發スルモノナル事ヲ、余ハ敢テ提唱スル。又第二ノ主要原則タル封建諸國ノ自治保全ハカンニング卿總督時代ノ叛亂ニ伴フ行動ニ明瞭ニ述ベラレテ居リ、ソノ後モ政府ノ行動及聲明ニヨリ非常ニ強ク保障セラレテキル。シカシテ第三ノ主要原則タル失政ニ對スル神聖權ノ拒絕ハ幾多ノ場合、特ニバローダ國ガエクワールノ審問及ソノ廢位ノ場合ニ採ラレタ方針ニヨツテ樹立セラレテキル」

カーゾン總督（一八九九—一九〇五年）の次の如き言葉も、三十年前と同様今日でもなほ眞實である。

「私ハ彼（藩王國主權者を指す）ヲ私ノ同僚並ビニ協力者ト呼ブ。彼ハ帝國ニ對シテ皇帝陛下ノ忠臣トナリ、而モソノ人民ニ對シテハ輕擧無責任ナル專制君主トナルヲ得ナイ。彼ハ彼ニ委任セラレタル權威ヲ正當化シ、コレヲ恥シメテハ不可ナイ。彼ハソノ人民ノ主權者デアルト同様、ソノ下僕デナケレバナライ、彼ハソノ收入ガ自己一個ノ満足ノため保障セラレルモノニ非ズシテ、自己ノ臣下ノ福祉ノためニ保障セラレタルモノナルコト、更ニソノ國內統治ハソノ正シキニ比例シテ修正ヲ免除セラレルコト、ソノカデハ放縱ノ長椅子タラシムル考ナク、嚴正ナル義務ノ坐席タラシムコトヲ知ラナケレバナライ。彼ノ姿ハ單ニボロ競技場ヤ競馬場ヤ歐羅巴ノホテルニダケ知ラレルモノデアツテハナライ。彼ノ眞ノ事業、彼ノ君主タル義務ハ、自己ノ人民中ニアル。私ハ兎ニ角コレヲ基準トシテソノ人ヲ計ルデアラウ。カク試ミルコトニヨツテ彼ハ結局政治的組織體トシテ滅ビルカ、殘ルカスルデアラウ」

モンターギユ・チエルムスフォード改革以後は干渉政策も屢々緩和せられ、彼等の絶體忠誠を獲得したと見られる現在では完全に拋棄せられた。かくて一九二七年藩王國問題調査のために組織されたバトラー委員會も左の如く干渉は義務であると述べてゐるにも拘らず、今では單なる机上の空論として片附けられてゐる。

「藩王國ノ主權者ヲ叛亂ヨリ保護スル保障ハ、ソレト共ニ叛亂原因ヲ探究シ、主權者ヲシテソノ困難ヲ正統ニ解決セシムルコトヲ要求スル義務ト、コノ結果ニ必要ナル手段ヲトルコトヲ命ズル義務ヲ伴フモノデアル」

然しそれにも拘らず、至上權力は藩王國の主權者をガデイ、即ち君主權の上に固定し、最大の失政の行はれる場合でも干渉を行はないのである。こゝ數年の間だけでも全印多數の藩王國に於て全く我々の信じ得ない暴行が繰返されてゐる。我々も既にその苛酷な課税や民衆の農奴同様と言へる生活状態の一端には觸れた。然しそれには更に二、三の名譽ある例外を除いて法律もなく、身體の自由もなく、言論、新聞、集團の自由もない事を附加すべきであらう。又裁判官も結局金權の前に膝を屈する腐敗分子である。不在地主の惡例も枚擧に追がなと言へやう。然しそれにも増してダービーを争ひ、クリケットの保護者となつて歐洲諸市をうろつきまわるマハラージャの方が、更に悪いと言へやう。何故なら前記の諸分子の社會的責任は極めて限定されたものであるに對しマハラージャはその國內にはとも角も一國の行政、立法、司法の獨裁者としてその責任範圍が極めて廣汎であるからである。そこには彼の意志があるのみで、一二の例を除いてはそれを制限する法律もない。その役人が如何なる惡事を働かうと（これには村の學校の教師及警官をも含んでゐる！）彼が役人である限り藩王國では處罰されないのである。而も法律の執行者がその法律を少しも知らないと言ふ事も決して珍しくない。或る藩王國ではマハラージャ乃至はその代理としての總理大臣が、

全然法律の智識なくして裁判長を勤めてゐる。又カシヤワール諸國に屬する藩王國では、地方長官や司法官が年俸僅か千乃至千二百ルピーと言ふ極めて甚い待遇で虐待されてゐる。これでは到底水準以上の人物を藩王國へ集め得ないのも理の當然である。

前記の如くマハラージャが裁判長である場合、判決の下るのに數年を費す事も強ち珍しくないと言はれてゐる。何故なら裁判長は、往々緊急缺くべからざる國務のため、巴里かロンドンへシヤンパンを飲みに出張してゐる時が多いからである。又その裁判長が連日の祝宴に疲れてゐるかも知れないし、事件の詳細を研究しなければならないかも知れないのである。従つて問題が厄介であればある程、マハラージャは「出来るだけ早く考慮して、裁決を與へよう」と公判を閉ぢ、一步表へ出れば一切を忘れて書類は埃まみれになるか、失はれてしまふかするのである。それを極端に云へば「公訴棄却」である場合が普通である。贈賄も又飽くなき富を持つマハラージャにも、依然呪はしいものではないらしい。

かゝる状態に於て、如何にして藩王國々民に人間の生活が保障せられてゐると云へやうか。この封建的な暗黒生活を逃れる人民は、年々數千に上ると云はれ、彼等を生んだ土地を見棄てる事夫れ自體罪惡であるヒンズー教徒が、この舉に出づる事情を拘すべきである。印度總督もこの状態を見て時折マハラージャに忠告するが、彼等には依然馬耳東風で、たゞ彼等の信じてゐる事は彼等が英帝國主義の支柱である限り、英國側で思ひ切つた處置に出る筈がないと云ふ事のみである。

然し英國側との條約によつて現在の地位を得てゐる彼等が、若し完全な獨立を要求するとすれば、彼等の廢立を目的とし、或は非專制政府の樹立を目的とする民衆叛亂から、彼等を保護せざるを得ない英國側の義務は解消する譯である。チユドガールも國際法の立場から、國家と個人の間には協定などと云ふものはないと指摘してゐる。元來マハラージャと云へば立憲王國に於て憲法に對して責任を持つ國王の如く、その國の支配者であると同時に人民の代表者でなければならぬ筈である。然し藩王國民衆の希望は、一度と云へ論究せられた事はなく、若し國民投票でも行はれるとしたら、英領印度とその併合を決議したり、マハラージャに年金を與へて諷にする場合が多いに違ひない。然し、事實は全くそれと反對で、民衆に一寸した同情を示したばかりに廢立せられたマハラージャの數の方が、遙かに多いのである。

紂桀に比すべき暴君の中、比較的英國嫌ひであると同時に唯一人俊敏の聞え高きマイソールのマハラージャが、最近五十六歳の年齢を以て卒然官中に逝つた事や、かねて自國軍隊の近代化や國內改革に努力して、英國側より異端視されたラジュコットの支配者タコール・サヒーブが、僅か三十一歳の若年もて旅中に不慮の死を遂げ(註一)た事は、印度の大戦参加問題の激化してゐる今大戦下に於て何かを物語つてゐる筈である。

(註一) マイソールのマハラージャは首都バンガロールの王宮中で急死したのであるが、英邁な彼の性格が今度の大战に對する印度の足並みの揃はぬ時英國側に煙たがられてゐた事は事實と言へやう。又タコール・サヒーブは一九三一年四月王位を繼承したばかりで、即位と同時に宮廷費月九千ルピーを半減し、その軍隊などに近代的教育を行つて注目せられてゐた。それが昨年六月二十日シカール旅行の途中ギルと言ふ森林中に死體となつてゐるのを發見されたので英國側では心臓麻痺と發表してゐるが、彼の年が僅か三十一歳である事と思ひ合せて全く怪しい譯である。

三、國民會議派の對藩王國政策

英國政府は、一九三五年の新憲法に基く聯邦制度實施問題に於ても、これ等暴君達によつて提出せられた馬鹿々々しい要求の悉くを取入れ、この近代民主主義を標榜する政治形態に於ても、飽く迄彼等と彼等の政府の專制形態を保持するやうに構成せられてゐた。従つて國民會議派がこれを目して自由主義の假面を被る專制政治の中央進出と非難した事は飽く迄も正しかつた。然し圖に乗る彼等の多くは、未だ參加を正式に通告しないで今次の大戦を迎へるに至つた。彼等にして若しこの聯邦制度に參加せんか、早晚輿論の力と英領印度の進歩的勢力によつて、やがては彼等の特權喪失を來すであらう事は、彼等と言へ共、知つてゐたからである。又彼等はこのまゝ進歩的の制度に參加しなければ、結局英國側政府が費用を負擔して、彼等の現状維持に努めて呉れるとも考へたからである。

然し流れ行く時代の波には、逆ふ術もないのである。嘗ては民主主義國家英國の提唱する國際聯盟の加入國五十四ヶ國の中四十五ヶ國は共和國であり残る九ヶ國だけが立憲君主國であつたが、その英國の支配する印度に於ては五百八十餘のマハラージャやその後継者が絶體專制政治の支持を當の英國に期待し、盛上る印度獨立の民主主義的波の防壁に懸命の努力を拂つてゐるのである。然もこの大戦下に搖ぐ英帝國の地位を考へれば、恐らく民族陣營に對する讓歩も最少限度に止めやうとするであらうが、兎も角も一定の讓歩を不可避的として、萬一印度に完全な自治政府でも出現する事態に立到れば、これ等の藩王國君主も廢屋と化せる王宮に幽囚を叩つ悲劇の訪れる日も強ち遠い夢とは言へなくなるのである。従つて現段階に於て、これ等藩王國に對する國民會議派の態度——それは未だ判然たる形をと

つてゐないが——一言觸れる事も無駄ではないであらう。

國民會議派では一九三七年十月カルカッタに開れた全印委員會に於て、マイソール國に於ける民衆壓迫に抗議する決議を採擇し、同國民衆に非暴力運動支持を要求した。これは同派としても、これ迄散々手を焼いた舉句鬭争を斷念してゐた藩王國へ手を伸さうとした最初の組織的な企圖であつた。然しこれに對してガンデイが猛烈に反對した。彼は過去に於ける藩王國へ一切の干渉しないと云ふ傳統を破る行爲であると抗議した。このため國民會議派の藩王國問題に對する態度には、次の三つの問題が提出される事となつた。

- 一、國民會議派は、藩王國に於ける市民不服從運動の開始に賛成するか否か。
 - 二、若し藩王國民衆が、る運動を開始する場合、國民會議派がこれを煽動し、友誼的援助を與へるか否か。
 - 三、或は國民會議派がそのイニシアテイヴを採つて、かゝる運動の援助を繼續し得る狀況にあるか否か。
- それ等に對する解答が、即ちハリブラ大會に提出せられて些少の修正を受けた同派運用委員會の決議であつた。この決議は又同派内で激論的となり、極めて温健な藩王國代表と同派社會主義者黨と云ふ奇妙な組合せによる共同戦線が成立した。その運用委員會の決議と云ふのは國民會議派の目的が全印の目標たる完全獨立であり、それ故に完全なる責任政府の樹立と藩王國民衆の自由保障のため戦ふと云ふ事を強調したものであつた。然しこれに對しては藩王國內に現存する人民會議委員會が壓迫を受けて充分に活動し得ないから解消すべきであり、それ等藩王國內の鬭争機關を保護する能力もない時、無理にこれを援助すれば結局會議派の黨旗に侮辱を加へられる危険性を招くだけだと反對する者もあつた。又藩王國の運動に干渉する事によつて力を分散すれば結局手に餘る戦線で國民會議派が戦はねば

ならぬと主張する者もいた。

このハリブラ大会に於ける論争は、同派の長老バタビイ・シテラマヤ博士の斡旋によつて——博士は現在なほ藩王國人民會議派と緊密な關係に立つてゐる——一つの妥協點に到達した。それは藩王國內の委員會は解消しないが、その活動は運用委員會の統制下に嚴重に従屬すると云ふのであつて、その事務所も本部へ移されたが、これを換言すると、藩王國の民衆は英領印度の獨立が達成する迄は、獨力で戦へと云ふに等しかつた。

ネールの報告はこれに先立つ一九二八年度に於て、若し圓卓會議が藩王國代表を参加せしめるのみで、その民衆代表等を等閑に附するならば無意味である事を暴露してゐる。而もその報告は同時にニュートン教授の言葉を借りて、封建國家とは「先づ數ヶ國間の協定、或はその數ヶ國に共通な歴史的段階に基礎を置き、續いてその住民の承諾による封建的政治機構に基礎を置く君主數ヶ國の永續的聯合體」とも明確に規定して、運動の向ふべき方向を指示した。

かくてこの報告を基礎とする一九二八年度の同派大會は藩王國に於ける代表制に基礎を置く責任政府の樹立と、基礎的市民權の設定をその主權者達に勸告する決議を採擇し、更に翌年のラホール大會に於てこれを確認した。然しその決議は一九三〇年に始まる英國政府の攻勢に忙殺されて結局拋棄せられ、その後見るべき動きはない。一九三一年の第二回圓卓會議に於てガンディは「國民會議派は全印度を代表し、今後起り得べき如何なる計畫に於ても、最下層階級を容るべき餘地を作り、全印度の共有財産として或る程度の基礎的權利を與へる事によつて臣下達を融和せしむべき事を要求する」と述べた。更にガンディは一九三四年N.C.ケルカー宛の書簡に於ても次の如く述べてゐる。

「藩王國に不干渉政策は賢明である。英領印度にはアフガニスタンやセイロンに對する場合以上に、對藩王國政策

を確立する力を缺いてゐるのである。佛領印度も、地理的には藩王國同様印度の一部に相違ないが、我々には其處に起さる事件を處理する力はないのである……余は彼等の臣下に對しての專制權を藩王國に許容し、その主權者達に國庫收入の一定少額を彼等に與へる事によつて自らを彼等の支配する人民の受託者と見做す事を許容したいと思ふ……余は、彼等の現状を強ひて破壊しやうとは考へない。余は個人と社會の變革を信する者である」

又他の書簡中で、彼は次の如く述べてゐる。

「余は貴君やその他の人々同様、墮落、横暴、無節操な專制政治を嫌惡する……余も又何人に劣らず、藩王國內の急激な改革に我慢する事が出来ない。然し我慢は出来ないと言つても、それは余の——若し御希望なら我々特有の無能によつて條件づけられてゐる事を、余も認める。藩王國と英領印度の民衆間には、疑ひもなく利害關係の共通する事が自覺せられてゐる。藩王國の主權者達は一階級を構成しながら、不幸にしてそれを認識してゐない。彼等は、防水區劃を信じてゐるやうである。彼等はこの防水區劃内に於て英國の法律及英國の武器の保護をうけてゐるのである。州自治機能の成功は疑ひもなく、遅れた藩王國大衆にも刺戟を與へて覺醒を促したと言やう。然し近代の民主主義の形態をとる自治州と封建的專制國の間に聯邦制度が成立し得ると考へるとすれば、それは愚の骨頂であり、この愚の骨頂を英國は民主政治の名にかくれて行はんとしたのである。流石英本國に於てもロシアン卿等の有識者は、これ等藩王國の君主連が民主主義者に轉向する迄、聯邦制度を延期しなければならぬと主張した。然しその時ロシアン卿は、彼等が轉向する迄待てば好いと考へたのであらうか。英國が歐羅巴に残る最後の民主主義國と自負する現在、これ等の藩王國の如き古色蒼然たる專制政治を保障し、英領印度に生れんとしてゐる新しい民主主義と結付けやうと

してゐるのは皮肉である。

かくて、藩王國民衆を現在の苦境から救ふべき工場法、賃銀制定機關、禁酒等の如き問題の解決の上にも認められないのであるが、これと同時に藩王國に於ける複雑な生活水準もその實現を妨げてゐる事を認めなければならぬ。印度には、藩王國と英領印度が絶へず角つき合つてゐる地方が多數あつて、その衝突が何處に始まり何處に終つたかを知らざる事さへ困難する有様である。従つて印度に於ては一切の満足すべき解決に到達するに先立ち、先づこの藩王國問題が解決されなければならないと言ふのは眞實である。

四、君主制體の本質と英國的影響

かくの如く遅れた東洋社會に於てなほ隨一の暗黒状態を現出してゐるこれ等藩王國を想ふ時、如何に英國の壓制の下にあると言へ、兎も角も民主主義を名とする統治下にある限り、英領印度の方がなほ救はれると考へ得る程である。然し我々が印度の古代史を繙く時、この藩王國にも現在の英國支配に數十倍する立派な統治成績を擧げた例を見して、その憶測を否定せざるを得ないのである。

例へばライス・デーヴィス教授もその著「佛教印度」の中で次の如く述べてゐる。

「氏族間の行政及司法事務は、カピラヴァスツにある彼等の共通討論場で老ひも若きも等しく出席する公共集會に於て處理せられた。唯一人の議長——それが如何なる方法で選ばれ、その就任期間がどれだけであるかは我々も知らないが——がその會期中、或はこの討論會がなければ全國を主宰する役員として選舉せられた。彼はラージャと言ふ稱號

を與えられ、それはローマの顧問官或ひはギリシャの執政官にやや似てゐるものに違ひなかつた。最も初期の佛教記録は、各種の君主政體と並行して完全な、或は制限された獨立性を持つ共和政體の残つてゐた事を暴露してゐる」

然しアレキサンダー大帝の來寇當時に於てすら、その典型的な政治形態はパンジヤブ地方に多數あつた君主政體であつた。又歴史上の輝しき足跡を残したチャンドラグプタ皇帝やその孫に當るアショーカ大帝、その他七世紀以後迄續いた一連の統治者もその偉大な行政手腕を讃へられ、印度研究者の讚美的となつてゐる。マンジュスライ・ムルカルバと呼ばれるサンスクリットの經典に據ると、ベンガル地方にもサザンカ王の歿後暫くの間共和政體が續いたと述べられてゐる。有名なベンガルのゴパール王も選舉による君主であつたし、彼に先立つ著名なスードラ階級の指導者でさへ選ばれて王となり——スードラと言へば我が國の奴僕に當るカストで到底王となる資格がなかつた。従つてこの事は同時に印度に喧しいカスト(種姓)制度が八世紀の過去に於てすらそれ程絶對的のものでない事を立證してゐる——十七年間も君臨した。南印度に於てもチョラ族は農村協同體を統治單位とした。

ただこれ等の統治形態も、十二世紀に於て相次ぐ侵略の波が高まり、遂に終局を告げるに至つたのである。而もそれに續いてヒンズー支配者と回教王朝の絶間なき闘争が始まり、一二〇六年には全印度を擧げて遂にチムール系のモガル王朝の支配下に移り、そのモガル王朝も一七〇七年アウランジーブ皇帝の没後、衰微一路を辿つて樞花一朝の夢をかこつたのである。シヴァジイの率ひるマラータ族やシーク族の烽起は實にこの衰頹期の間奏曲でもあり、興味ある統治形態の一典型を使嫉するものでもあつた。然しそれ等も興亡うたた感慨を残して、遂に東漸する西歐勢力の前に屈服したのである。

印度の獨立性はかくの如くして失はれた。然し君主印度の全部が崩壊したのでなかつた事、南印度のトラヴァンコールや、コーチンやマイソール等の多少共進歩した諸國の残つた事は印度にとつて幸運であつた。(なほこれ等の諸國に大いではガワリオール、パローダ、バーヴナガールの諸國を挙げ得るであらう)。英領印度に於ては食卓を共にする事を許されず婆羅門階級の者とは十米離れて歩かなければならない不可觸階級にも、現在トラヴァンコールでは寺院を開放し、英領の何處よりも教育が普及してゐる。又この三國には政治手腕の優れた内閣もあつて、或る程度代表的な藩王國の政府と言ふ事が出来る。マイソールでは工業化にも努力し、貧しい農民も大部分電力を利用し得るやうになつてゐる。然しそれでもなほこれ等の藩王國には未だなすべくして残されてゐる各種の政策が山積してゐるのである。ルイス・ブロムフィールドはその小説「雨ぞ降る」の中で、誤れる傳統を除き新しき生活を建設せんとする一藩王國の物語を述べてゐるが、結局それも我々に輝しい政治手腕を持つ人々の援助の下に行はれる一獨裁政治の形體を最後の解決案として提示してゐる。然しこの事こそ正に我々が解決すべき問題の出發點であつて、その最後の到達點ではないのである。

例へば、その一例をマイソールにとつてみる。その整然たる首都、バンガロールの威容、近代的の發電所、大規模な灌溉工事、文化的な關心を以て保存せられてゐる各種記念碑等をこの封建印度に見る時、思はずこの藩王國を讚美しないでは居れない。而もその主權者は、前記の如く今は既にないにせよ、教養もあり献身的な人物として知られ、傲慢なガンディすら「神の國」をマイソールに見ると叫んでゐる程である。

それにも拘らず、政治的領域に於ては形だけの民主制度が實施されてゐるだけで、立法議會の定員二百八十名中、

二百五十名迄が選舉による事は好いとして、その議會には審議權があつても立法權はない。行政會議の持つ權力は統治權だけで、首相と永久に少數黨である選舉せられた代表によつて構成せられてゐる。地方都市は指名長官の支配下にあつて、地方局は選舉による局長を持つとは云へ、結局政府絕對權の支配下にあつて、地方議會も政府のお手盛り過ぎない。従つてマドラス、ボンベイ等のマイソールに隣接した各州から伸びる國民會議派の勢力が、これ等マイソール人の間に受入れられ始めたのも當然である。殊にマイソール國民は、一九三四年度の議會に於ける次の如き首相演説には非常な衝撃を受けたのである。

「現在の國家組織には何等の變革を行ふ考を持たない……余は、議會民主主義が各地に於て衰滅しつゝある時、かかる政策が一時にせよ擁護せられたと云ふ事に驚きを禁じ得ない」

當時、マイソールには幾多の獨立運動をなす諸團體があつたが、一九三七年にはこれ等の中、人民聯盟と國民會議派の合流が成立した。一會議派指導者は、この兩派合流の前夜、秩序紊亂罪を以て逮捕せられ、これに端を發する騒亂に於て警官の發砲事件が起き、三十二名の死亡者と多數の負傷者を出した。かくして、マイソールの民主政治は極めて短期間の生命を終り、市民の自由權もこの最も進歩した藩王國に於てさへ相當制限を受ける事となつた。

これ等の藩王國君主の中で、ダービー競馬で有名なアガ・カン程特異な存在はないであらう。彼は土地を持たないマハラージャにも拘らず、英國側から「殿下」の稱號を與へられて、その出入には七發の禮砲を以て迎へられ、國際聯盟總會が開かれると、彼は何時も印度代表と潜稱してジュネーブへ乗込み、圓卓會議の折も常に英國製の印度代表として列席した。今回の大戦に際しても、彼が回教の一分派たるイスマイル派の管長である所から、逸早く印度に向け

て電報を打ち、回教徒である限り大戦に参加して英國に協力せよと絶叫した。現在回教聯盟に特異な存在を占めるシカンドル・カーン（現バンジャブ首相）のバトロンであるが、ダービー競馬の勝利者として知られる彼の富も、回教徒ブルジョアを包括するこのイスマイル派管長であるからである。現在、彼も印度より歐羅巴に有名な人物で、抜目のない英國政府の便利な印度操縦の道具に扱はれてゐる。彼が「殿下」の稱號を與へられてゐるのも、彼の祖父がペルシャの一王族の娘と結婚したからで、その舅の死後彼の祖父は王位を狙つて果さず、難を印度に避けて定住するやうになつた家柄のため與へられてゐるのである。

これ以上藩王國君主の個人生活を描く事は醜聞になる怖れありとは云へ、少く共次の如き事件は極めて興味ある事件で取上ぐる必要がある。中央印度諸國に屬する一藩王國にジャープアと云ふ國がある。一九三四年このジャープアの王室生活に就て發表せられた一パンフレットは、次の如き内容を暴露して全印度の注目を惹いた。

このジャープア國の君主は極めて精力絶倫で、ラニー、即ち正式の王妃九人、バスワン、即ち嬖妾二十六人（内三人は××女）の合計三十五人を擁し、この嬖妾は正式の結婚式を経ず、有夫の場合でもその夫と離別する必要がないと云ふ破廉恥的なものであつた。この亂行は要するにラージャの絶対権が法律を超越するものと見られ、如何なる暴行、如何なる破廉恥も法律的な犯罪を構成しないからである。處がこのパンフレットは後宮の夜に咲く嬖妾二十六人の一人々々は悉くこのラージャの壓制に嘆く持主であると傳へ、宛然この世の地獄たる王宮から逃れて全印度に救ひを求め一王妃の手紙を發表してゐるが、その手紙によると次のやうな一節がある。

「私は一九一二年に結婚しました。然し私は結婚後數日ならずして、非常に困難な地位に置かれてゐる事を知りました。見方によつては、私は王宮に閉ぢ籠められた囚人であり、一室に閉ぢ籠められた生きながらの捕虜として日を送つてゐると言へませう。私に與へられる収入は一年一萬一千ルピー（邦貨約一萬四千三百圓）と言ふ事ですが、私の手許へ實際に渡されるのは僅か月五ルピー（邦貨約六圓五十錢）に過ぎません。これでは私の切詰めた生活必需品さへ買ふ事が出来ず、それに對する手當も別ありません。他の結婚した王妃達も、大なり小なり同様の惨な生活を送つて居ます。その一人は余りの事に發狂した程です……ラージャは……私を殺し、私を彼の女達に仕へる床掃除女にすると言つて脅かしました。私の生命は今なほ危険です。健康も好くありません。私達王妃は一人残らず、地獄の責苦を受けて居ります……」

そして、數年前にも矢張りこれと同じ内容を持つ王妃の手紙が、ボンベイの新聞に發表せられて、全印の注目を集めた事があつた。最早これ以上詳細に述べる必要はないであらう。英領印度に於てさへ婦人の地位が悲劇的である時、封建印度に於ける女性の地位に、英國側が語る如き幸福のあらう筈はないのであつて、それが如何に悲惨であるかは、この一挿話によつても充分覗れる。

印度の現行社會制度の下に於て、これ等マハラージャ達に近代的な統治者たる事を要求する事は無理である。ジョン・ガンサーの「アジアの内幕」も次のやうに述べてゐる。マハラージャの最も誇るのは、寶石でも後宮でない。その禮砲である……彼等はその禮砲を君主權の象徴と考へ……デリーに君主會議の開れる折合憎くそれが休日である日曜でもあらうものなら、わざ／＼蒸し暑い一晩を列車の中に送り、翌朝この禮砲と割れるやうな民衆に迎へられるにこやかにブラットホームへ妻を現すのである」と。事實彼等は生れ落ちるなり媚を呈する事を職業とする臣下に取

卷かれ、墮弱と腐敗を傳統とする王宮の空氣の中に於て、自らを「小なる神」と見做すやう教育されるのである。彼等が成年後、歐羅巴へ留學する事は、彼等を墮落せしめんと待受ける英國の懷へ飛込む事で、結局彼等が王位を繼承する時迄に立派な放蕩者になつてゐなければ、寧ろ不思議な位である。従つて總督や藩王國駐在官が如何に命令を傳へやうと、自らを喜んで犠牲にする國民の下僕たる訓練を受けてゐる者のあらう筈はない。マイソールの死んだマハラージャの如く、印度切つての賢君であれば、たつた一度しか歐羅巴へ行かず、而もそれが晩年であつたと云ふ事は意味深重であるが、これも全く彼が幼年時代に嚴格なヒンズー教育を、太妃自らの手で與へられたために外ならない。この少年時代の教育が如何にマハラージャの將來を支配するかは或る印度の大學内で平民教育を受けた一小國のラージャが、その後オックスフォード大學へ留學したものの、歸國後は立派な獨立運動の指導者になつてゐたと云ふ一事を以て知り得るであらう。

かく暗愚にして無條件な英國ひいきであれば、彼等が今次大戰下に於て逸早く大戰参加を表明し、死活を賭する印度獨立運動の前途を阻む行爲も敢へて説明の要がないであらう。事實今次大戰に於ては、前記の如くアガ・カトンがいち早く激電を發し、ハイデラバード國が空軍一ヶ中隊を献納した外、獨艦の印度洋活躍に憤慨して英國海軍へ十五萬ルピーを献金してゐる。又カシミールのラージャは、その一族たるウダイプール、ジョドプール、ジャイプール等を率ひて参加、現在では既に三百餘國に上り、ガワリオール諸國に屬するスキデイアの如きは、ラージャ自身英國の危機を叫んで民衆の参加を求め等、意外の熱狂振りを示してゐる。

五、藩王國最近の民族運動

然し最近はかく遅れた藩王國に於ても各種の民衆運動の波が高まり、今次大戰下の重大事を迎へてもマンサと云ふ一小藩王國に、農民運動が起つて勝利を得た。カシミールに於てもシエイク・アブドルの率ひる獨立運動が強力に展開され、西カシヤル諸國に屬する藩王國ラジュコットにも人民戦線的運動が起きた。殊にこのラジュコットに於ては總人口七萬五千の六割迄が、都市生活者であるにも拘らず、國庫收入年百十五萬ルピー（邦貨約百五十萬圓）の中約六割に當る七十萬ルピー（邦貨約九十萬圓）を王室に奪はれ、而もラージャの飽くなき貧慾は國民の日用品たるマツチ、水、砂糖迄も政府專賣制度の下に置き、更に財源増收の目的で賭博場を民間に許してゐたのである。

又國家の統治規定には、立法議會の制度を規定しながら有史以來前記の如きたゞ一回、それも僅か二時間開かれただけで、内閣も悉くラージャの一族、或は寵臣によつて占められてゐる。所が最近、その首相が地位を自分の子供に譲り、その甥を警視總監に任命した所、この二人共國民に馴染薄い若輩の青年であつたため、國民もこの無茶な派閥主義に遂に不満を爆發させた。その結果、一九三八年八月には慘虐な警官暴行事件となり、これが賭博場の公認取消を要求する國民の對政府闘争へ發展し、統一人民委員會の結成となつた。

この警官暴行事件によつて、二百名の負傷者と八十名の投獄者が出た。この事件後、國民の憤怒は全國的となり、同國の警察力は遂に大衆の壓力の前に威力を失ふに至つた。國民は總理大臣とその甥の罷免を要求し、責任政府の樹立を叫び、かくして單なる社會改革運動から立派な政治闘争へ發展した。

この時、國民會議派の議會局を握る溇建派の代表たるサルゲール・パテルが、突然飛込んで来て同國の政治状態に猛烈なる攻撃の火蓋を切つた。これ迄彼は藩王國問題に一切干渉しないと云ふ同派の方針を支持する一派の代表者であるためその行動は非常に注目された。彼は更に進んでその鬭争を有効ならしめるため、カチャワールの××主義者とも共同戦線を結成すべしとも主張した。(註一)

(註一) この問題は極めて興味ある發展を辿り、一九三九年三月にはガンデイの断食騒ぎ迄起きた。即ち、パテルの加入に驚いたラジュコットの主権者タコール・サヒーヴは妥協する事に決し、十名から成る國政改良委員會(内七名迄會議派の推薦)を任命して解決に當る協定がパテルとの間に成立した。然し三月に至り會議派推薦の委員數名が同國居住の英人の反對で拒絶せられたため、これに憤慨したガンデイは同三日から断食を開始してこれに抗議した。この有效適切な國民會議派の抗議には印度政府も驚愕し、直ちに總督は断食の中止を要求する一方、最高判事のサー・モリス・グウヤーをして一切の解決に當らしめたため、ガンデイの断食は九十六時間の後中止せられた。然しその後ラジュコットの宗教團體が會議派に協力しないのに憤慨し、遂に同派の大衆行動の中止をガンデイは命ずるに至つたため、パテルの努力も水泡に歸し結局會議派はラジュコットの支配者に欺かれて失敗する結果に終つた。

然しより重大な意義を持つのは、最も進歩的な藩王國の一に數へられるトラヴァンコールの現状であらう。この國に於ては、國民會議派の全印不服従運動の展開せられる度にこれに呼應し果敢な鬭争を開始してゐるのであるが、一九三八年から九年にかけても又軍隊の發砲事件が國內三ヶ所に起き、警官の暴行事件が毎日のやうに繰返された。同國會議派の指導者達は投獄せられたが、民衆の團結は堅く、彼等の政治的權力獲得の決意をより高く高唱した。全印に著名な同國首相サー・C・P・ラマスワミー・アエルは藩王國人民會議を粉砕して見せると豪語したが、粉碎

する所か今なほ解決しない大衆運動の飛沫を全身に浴びてゐる。政府の集會禁止も一蹴せられ、市民非協力の要求に學生も参加し、女學生も又示威運動の先頭に立つた。勞働者も参加し、數千の紡績工がタイロンに集合した時には軍隊が發砲し、死者二名を出した。又同國內に勢力を持つシリアン基督教徒もヒンズー教徒と提携し、印度の癌たるコムミュナル問題も同國に於ては忘れられてしまつた。彼等が何故ヒンズー教徒と提携するに至つたかと言ふと、最近政府の息のかかるトラヴァンコール銀行の一が破産し、その最も酷い經濟的打撃を受けたからであつた。

かくてラジュコット事件を契機に、藩王國問題から一切手を引くと宣言したガンデイも、このトラヴァンコール事件には少からず食指を動かした。又、現在は殆んど鎮壓された形で、印度政府もその禍根を絶つべくその駐在官を通じて干渉の手を伸べやうとしてゐるが、これ等の全印度的運動へ結び付かうとする藩王國の民族運動的空氣こそ、その封建的障壁が現在如何に高く、如何に堅固であらうと、やがてはそれを突破して向ふべき方向を暗示してゐると言ふ。

第五篇 印度在住の英國人

一、統治方針の史的變遷（その一）

サーヘブなる印度語は、「旦那」或は「貴君」と言ふ極めて一般的な敬語に過ぎない、従つて、これを特定の會社を形成する英國人の代名詞に使用する事は、誤りであるかも知れない。然し現在十七萬七千人を算へる印度在住の英國人階級は、それ自身印度の支配者として、少く共印度人全體を對象する場合にはサーヘブの社會的地位を保つてゐるのであるから、これを比喩的にかく呼ぶ事は一向差支へないであらう。

然し我々が過去三百年の印度統治史をひもとく時、この印度のサーヘブであつた英國人には、常に二つ型のあつた事に直ちに氣附くのである。

その好き方の型を代表する一人に、アムハースト總督（一八二三—一八二八年）治世のマドラス行政管區長官サー・トーマス・ムンローと言ふ人がゐる。彼は一八二四年十二月三十一日附の覺書によると、次のやうに述べてゐる。

「若し我々が印度人の人格向上に努力しないとすれば、例へば彼等をして公正な法律と適正課税の恩恵に浴せしむると言へ共十分とは言へないであらう。然し外國政府の下にあつてはそれを抑壓する幾多の原因あるため、それを没落から救ふ事は容易でない。自由を失ふ者はその徳性の半を失ふ者なりと言ふのは、古來の格言である。この事は單に個

人の場合のみならず、國家の場合に於ても眞實である……隷屬化せられた國家は、宛も奴隸が自由人の特權喪失を意味すると同様、國家たるの資格を失ふのである。それは課税の特權を失ひ、自らの法律を造る特權を失ひ、その國の統治或は内務行政に容喙する權利を失ふからである……それは國家主權の任意の權力ではなく、國家的性格を破壊し、國家的精神を喪失せしめる所の外國主權への從屬を意味してゐる……我々が結局この國から追出されるとして、それは我々の政府組織が結果に於て全民衆を侮辱するものとなるよりも遙かにましであらう」

かくてこの印度を熱愛した行政長官の事蹟は今なほ印度人の頭腦に深く刻まれ、舊マドラス行政管區へ行けば今なほ小唄や民謡となつて口の端に残つてゐる。この事は恐らく全英國人の胸に波打つケルト人とサクソン人の血の混合體に原因すると思れる所謂ジョン・ブル型と正反對の今一つの型を我々に想ひ起させるのであつて、我々も又英國の印度統治史を見る場合、必ずこの矛盾する二つの流れの上に立つて理解する事が必要であらう。

その所謂ジョン・ブル型に反對する今一つの型は、ワッツワース、ミルトン、ブレイクの詩に秘められた純宗教的な熱情に促されて時折り生れた英國の自由主義傳統と言ふ事が出来やう。ジョン・ボール、ウイリアム・ラングトン、トーマス・ムーア、チャーティス一派(註一)、トム・マン、チャールス・キングスレイ、クエーカー教徒等一聯の亞流がその系統に屬してゐる。彼等の等しく特徴とする所は「英國を異國の奴隸たらしむな」と叫ぶ愛國的純情である。事實、英國は過去に於てこれ等の人々の存在により、第三者の認める以上に革命的であつたし、燃ゆるが如き熱情を示した事もあつた。又自由のための戦士、英雄的な諸侯、或は又正義の殉教者に必要以上の歴史の頁を割いた時代もあつた。

(註一) 一八三六年から一八四八年——即ち英國産業主義の勃興の前夜に生れた英國民權運動の一派

然し我々は又英國歴史の今一面に、英國を所謂商人の國として資本主義的僞善の典型國——そして現在の英國に支配的な——ならしめてゐる今一つの流れのある事を、忘れる事は出来ない。その流れを代表する一派は、これ迄如何なる事態に直面しても常に冷酷そのものの感情を表現し、最悪の事態から最大の利潤を生み出す不思議極まる能力の所有者である。その點冷酷無比な政治家として知られるソ聯の巨頭スターリンすら「英國の資本家程強力性に富む不思議な人物は世界にゐない」とアメリカ新聞記者との會見に於て語つてゐる程である。然しこのジョン・ブル型の氣質を代表する冷靜さは、その中に爆弾を秘めた所の冷靜さで、この爆弾は前者の生命とする正義感からではなく極めて功利的な原因で時折り炸裂する。例へば獨逸のポーランド侵入を見て、「最早や我慢が出来ない」と立上つたチエムバレーンやチャーチル以下の激怒がそれで、それは全く彼等の感じた獨逸の××に對する正義感からではなく、世界の覇者を以つて任ずる彼等の矜持を傷つけられた事に對する激怒に過ぎなかつたからである。それは彼等の資本主義的感情の爆發とも言ひ得るであらう。

この理想主義と重商主義——勿論その基底に於いては同一な——が混淆して今もなほ典型的な形として残つてゐるのは英帝國を構成する最大の植民地、印度であると言ふ事が出来る。然し不幸にして英國人は、印度人にその英國史を讀む事を禁ずる事が出来なかつたので、彼等はその理想主義の一面のみを見て、我等も又英國の奴隸に非ずと信ずるに至り、その運動を抑制する所か、却つて助長した事は皮肉である。

事實、前記トーマス・ムンローの覺書が印度に於ける英國理想主義を代表するものである事は先にも述べたが、か

かる理想主義——即ち本國と同一水準の自由をその植民地にも移入しやうと言ふ英國側の考は、少く共その印度支配の初期には決して珍しい現象ではなかつたのである。即ち當時の理想主義肌の小壯官吏の中には上司の怒りも恐れず自己の信念に忠實な者も多數ゐた。例へば一八三〇年インダス河航行案が政府部内で論議せられた折も、小壯官吏を代表するサー・チャールズ・メトカルフの如きは、次の如き激烈な口調を以てそれに反対してゐるのである。

「彼等の承諾もなく我等の隣人を欺いたり、暴力を用ひたりしてその土地や河川を測量し、彼等を驚駭せしめたり激怒せしめたりする事は、單なる無法に過ぎない：表面マハラージャのランジット・シングへ贈物を届ける口實の下にインダス河を測量せんとする計畫は、私には實にいやらしく思はれる。最も可能性のある事として若し見破れた時には、その國々の嫉妬と怒りを招くと言ふ事は、私の意見によると失敗する事の出来ない我々政府の政策としては無價値なトリックとしか考へられない」

當時に於ても彼の意見は、勿論採用せられなかつた。然し渺たる一屬官の地位を以て、上司の壓迫激怒も恐れず、自己の信念のためにはかくも烈々たる激語を以て争ふ氣魄は、貴族主義的傾向の強い英國人社會に於ては全く珍とするに足る事であつた。然しこれが當時に於て決して稀有の現象でなかつた事は、その後司法官制度を繞つて起きた論争中に提出されたサー・フレデリック・ハリデイの意見書によつても立證せられるのであつて、ブール・チャンド氏も一九三八年二月號の「モダン・レビュー」誌に於てこれ等當時の統治問題に關する論争も言はゞ直接その任に當る官吏層の責任感の表現であつて、印度總督がその周圍に議會的役割を演ずる一團を持つてゐた事を立證するものであると述べてゐる。事實當時の官吏は、かくの如く政府の統治方針を批判しても別段その昇進の妨げとはならな

かつた。勿論當時の政府報告や覺書を見ても、別段統一ある英國支配の精神的構造を形成する有機的な各部分であると言つた印象は與へなかつた。然しその一人一人がそれ／＼各個人特有の觀念や感情や同情を持つて生きた心の生きた表現と言つた印象を與へる事は否定出来なかつたが、かうした現象も最近起きたキルロー事件（註一）を除いては、今日殆んど跡を絶つたと言へる。

（註一）この事件は警官殺害の廉で起訴せられた一印度人が、その實その警官にひどく苛められ自衛行動に出發してゐたと言ふ理由で無罪となつた事件である。

然しこれに續く時代には、その理想主義的熱情は抛棄せられて、印度占領の初期に見られた英國重商主義の偽瞞と強奪の復活した事を見逃すことが出来なかつた。この偽瞞と強奪こそ前記英國重商主義が本國の資本主義社會建設に貢獻する道であり、本國産業の工業化を促してその資本蓄積を招來した道であつた。かくして十九世紀の中葉本國に近代産業の覇權が樹立せられるや、ランカシヤ製品は印度にも氾濫して、古來歐洲にも覇を唱へた印度手工業を一朝にして壊滅に歸せしめた。

この重商主義的掠奪が如何に暴虐を極めたかはマルクスの資本論中にもその一例を示されてゐる。即ち、阿片栽培の契約が東印度會社の一社員に賣渡されるや、彼は直ちにそれをピンズと呼ぶ仲買人へ四萬磅で賣渡し、ピンズも又即日これを六萬磅で轉賣して、鰻上りの暴利が食られたにも拘らず最後の購入者がその栽培を實施した時には莫大な利潤を擧げたと言ふのである。

十九世紀に入るや、英國統治の性格には悲劇的な變化が起きた。これ迄は多少共自由主義的性格を有してゐたので

あるが、彼等の支配権が強固になるに従つて漸く官僚化し、印度人の利益を一切無視するやうになつたのみならず、彼等の行動の一切をも悪意に解釋するやうになつたからである。それは印度が單なる英國の寶庫としてその搾取の對象に轉落し、同時に又近代的植民地統治の形體が始めて完成した事を意味してゐた。

この近代統治期の先頭に登場したのは、コーンウォールス總督（一七八六—一八三〇年）である。彼は英國の地主階級の出身者であつたので、印度にも又地主階級をつくる事を企圖し、これ迄は徵稅請負人に過ぎなかつたベンガル、聯合、ビハール三州のゼミンダールを地主に昇格せしめる事によつて、不幸な農民に對する支配を強化した。又印度人の官吏登用によつて複雑な印度社會に又新たな支配階級をつくつたが、これ等印度人官吏には決して最高の政治的地位に就く事が許されなかつた。それと言ふのも彼の持論が「ヒンズー教徒は一人残らず墮落してゐる」と言ふのであり、例へば前記のムンローが「彼等は單純、無邪氣、率直であり、世界の何れの人種にも劣らぬ誠實さを持つてゐる」と言ふのと全く正反對のものであつたからに外ならない。彼こそ、印度に對する英國最初の讓歩と言はれるメント・モレー改革案（一九〇九年）に於て強力に地方立法參事會から印度人官吏の追放を叫んだ印度事務相モレー卿の先驅者と云ふ事が出来る。

然し彼が正義派の一人として、當時の政府官吏が貿易を副業として豪奢な生活を送る腐敗振りを痛烈に攻撃した事は、唯一の異色ある事蹟であつた。然し不幸にして彼はその原因を彼等の道德的腐敗に求めずして待遇問題に求めたため、英國人官吏の俸給は一躍今日の水準に飛躍し、印度人官吏との間に大きな懸隔を生ずるに至つた。これは最早や彼が單なる職業的官吏として印度自體には何等の愛着も感ぜず、單に義務として統治事務の處理に當つたからに外

ならない。従つて彼自身は質素な生活を送つた事を以て有名であるが、印度に對する熱情と智識の缺如は、やがて彼をして民衆嫌惡病を齎せしめ遂に蟄居生活に轉じ、而もこの事が更に統治者と民衆の間を疏隔せしめる原因となつた。ミル及ウィルソン共著の「印度史」も、彼に就て次の如く述べてゐる。

「西洋文化の輸入に先立つ事數世紀、印度に於ては既に法律や裁判が印度人自身の手で處理せられ而も社會の團結は強固、人口又稠密にして繁榮し、人民又富んで幸ひなりし時代のあつた事をコーンウォールスは、忘れてゐるやうである」

彼に續くジョン・ショア總督（一七九三—一八〇九年）は、その容貌から見ても前者より狹量であり、同時代の人人も彼の印度民衆に對する偏見の甚しかつた事を、筆を揃へて書殘してゐる。あらゆる事情を綜合して、彼は印度に對して完全に無智である事が唯一の資格として總督に任命せられたやうで、この事が却つて英國統治の基礎を強化した事は疑ひを容れない。ベンガル州の知事ウエズレイが奴隸を鞭打つ如く、カルカッタ市の州政廳から印度人官吏を一齊に追放したのも、この當時の事であつた。

然し統治機構と勢力の確立は、必然これ等の英國人社會にもヒンズー社會を支配するカスト制度の影響を與へずには措かなかつた。即ち、彼等は印度社會の最高に位置する階級を構成するに至り、マツカレーなどはこの英國人社會を「波羅門階級の新種」と呼ぶに至つた程である。これは傳統と因襲を尊ぶ印度人社會に、新たな憤激の種を蒔く事に外ならなかつた。形勢は果然險惡となつた。ウィリアム・ペンティンク總督（一八二八—一八三五年）はこの危機を回避すべく登場した人物であつただけに、前二者とは異なり、先づ印度人に對する理解と同情に出發し、英國人社會か